

# 私本太平記

黑白帖

吉川英治

青空文庫



国土病むこくどや

直ただよし義は残つて、なお重臣たちと、今後の方針をかためあつた。御逃亡の君については、詮議せんぎはもちろん、尊氏の意を服膺ふくようして、むしろ予想しうる二次、三次のそなえに心をくばるべきであるとし、ほどなくみな、退出した。

そのあと。

直義は、広間から兄のいる一殿でんへ渡つて行つた。——なにかよい話があるといわれたが、どんな話が自分を待つのか。——彼もいまは、いつものおちつきにもどつていた。

彼を見ると、尊氏は、

「すぐ、正月だなあ」

と、言った。

話は、そんなことばかりほぐれてゆき、——全然、時局のことではなかったのである。

「ほかでもないが弟。近々に、上杉重能しげよしがお供して、母者をこれへおつれして来るぞ。……どうだ、うれしかろうが」

「えっ、母上を」

「元弘げんこういらい、ほとんど、別れ別れ、親と子、ひとつにいたこ

ともないわしたちだった。父貞氏さだうじどのの御逝去のころを境に、

世は大乱にむかい、われらは戦陣また戦陣——。母者もまた、あ

の鎌倉から三河、伊吹、さらには丹波の山奥と、流転に流転をか  
さねられた……。おもえば御不幸なお方ではある」

「上杉伊豆（重能）の領地、丹波の梅<sup>うめ</sup>迫<sup>さこ</sup>へと、夏ごろ、ひそか  
にお移りとは、かねて伺っておりますが」

「む、一ト頃は、伊吹もあやうく、そのため、道誉の手で、梅迫  
の光福寺（現・安国寺）へ御避難をおすすめ申しおいたもの。：  
：じつは、尊氏自身で、丹波へお迎えにとも考えたが、都の留守  
も案じられ、佐々木道誉を、数日前に、わしの代りにつかわして  
おいたのだ。……思えば、これは虫の知らせであつたらしい」  
「ははあ。それは僂<sup>ぎようこう</sup>倅<sup>さい</sup>でしたな。もし後醍醐の件が、御不在  
中のことでもあつたら、どんな大混乱となつていたかわかりませ

ん。それにつけ、都もまだこんなありさまでは、せつかく母上をお迎えしても、いつまた、いかなる変を見まいものではなく、それがまた、兄者の御負担になりはいたしませぬか」

「いや。わしとおまえとの、兄弟ふたりの心次第だろう。そとの敵は、あらまし、恐れるにはたらん。……かつはまた」

と、尊氏は、あらたまつて、こう言つた。

「上に、新しい朝廷を仰ぎ、そして、室町幕府の第一歩をそのお膝もとに開く日にあたりながら、なお尊氏が、自分の母や妻子らを、遠くにおいているとあつては、諸民の思わくがどうであろうか。人心の鎮しずめにも、よいかたちではない」

「いかにも、それはその通りですが」

「かたがた、久しぶりで戦のない正月だ。こんな年は、夢の世のつかのまみたいに珍しい。母上にも、こうなりましたという所をば、お目にかけてようではないか。それを見れば、朝の廷臣方も安堵んどしようし、また自然、洛内の市民にも、正月気分が興ろうと申すもの」

いまから尊氏は、その日を、楽しんでるふうだった。そうま  
では、心からよろこべない直義ただよしではあるにしろ、彼にも決して悪い気はしなかつた。

さきに。

尊氏は、権大納言にのぼり、直義は、参議となつた。しかし世人は、直義のありかたと、幕府のたてまえから推おして、彼を現下

の、

副將軍

と、観ていた。

事実、直義自身も、それくらいなきぐらい氣位きぐらいだった。このさいの難関は、たんに、兄の代行者ぐらいなことでは切り抜けえないとされていたのである。

「兄は兄、おれはおれ、所信はどしどしやってゆかねば、将来、大きな悔くいをみよう」

かつては、その所信から、大塔ノ宮を鎌倉の牢で刺し殺させもした、あの強い自信である。

年暮くれのわずかな日も、彼はむだには過ごしていかない。幕府の名



で、奏請そうせいを仰ぎ、堀川ノ光繼みつつぐ、洞院ノ実世さねよ、そのほか、後醍醐ごたいごについて行つたとみられる十数家の公卿の官かんしやく爵やくをけずり、また、

「近衛経忠も、どうやら臭い」

という密告から、関白家の附近にも、番所をもうけて、その出入りを見張らせるなど、肅正の風は、仮借かしゃくをしなかつた。

つづいては、二十六日、侍所さむらいどころの高こうノ師泰もろやすに兵一万余をさずけ、

「義貞征伐に手間てまどらすな」

と、これを越前金ヶ崎攻めの加勢に、発足させた。

こういうあいだにも、後醍醐の落ちのび先を、銳意、求めてい

たのはいうまでもない。

その結果。——暮も押しつまつてから、脱出後の足どりが、おぼろながら、つかめてきた。

やはり河内から大和へ潜せんこう幸さいされていたものらしい。しかし、この方面は、相当、往来が多く、また追捕ついぶの兵も、第一に手を廻したはずのところである。

どんな偽装をもつて、どうして逃げおおせられたものか。尋常一様なる御手段であつたとは思われない。

「天野金剛寺古記」によると。

二十三日

帝王、賀名生あなふに御着ごちやく

二十八日

吉野きんぷせん金峰山にふぎよに入御

と、見える。雪やあられの、厳寒の道を落ちて行つたものにしては、おそろしく日かずも早い。おそらく馬で飛ばした所も再々であつたのだろう。

そして、経路から考えるに、途中では、和田、楠木などの残党がお迎えして、葛城かつらぎ山脈を南へ越えてゆかれたものと想像され、紀州へ入つてからは、土地ところの宮方、三輪みわの西阿せいあ、真木定じようかん観、貴志、湯浅党などが、前後を厚くおかこみして、山上の蔵王堂ざおうどうへと、一時、ご案内申しあげたのではなからうか。

いずれにせよ、これらの手順だの吉野大衆との交渉は、あらか

じめ、北畠親房や四条隆資たかすけらが、運びをつけていたもので、さらにここから、高野こうやへお遷りうつの議もあつたが、その議は止み、ここ吉野の山上を、以後、

### 吉野朝廷

の地と、さだめられることとはなつた。——いわゆるこれが、  
なんちよう南朝である。——それにたいして、京都の朝廷を、  
ほくちよう北朝と、世人はいつた。

京都では、暮の二十九日、なんとなく殺伐さつぱつな氣の失うせない中にも、一道どうの平和らしさが流れていた。尊氏の母堂やら妻子眷けんぞ属くが、丹波から迎えとられて、都入りしたのであつた。

年は明けた。

北朝の、建武四年

南朝では、延元二年  
えんげん

おかしなことだが、こう真二つに、ひとつ国土が割れ、二つの年号を称え、それぞれ異なる正月を迎えたのだった。

日本の分裂症時代、“南北朝”とよばれる畸形な国家へ突入して行った年を、この春とすれば、以後、その大患はじつに、五十七年間もつづいたのである。

これまでで、もうたくさんであつたらうに、まだこの先、いぜんたる血みどろやら謀略の抗争を半世紀もやりつづけなければならぬとは……。

たれが予想したろうか。

たれもそんな予想はしなかった。願つてもいかなかった。

だから生きてもられたし、各が我意、主張を固執こしつしてもい  
られたのだろう。もし、そんな未来とわかつていたなら、たれに  
せよ、虚無か、出家か、でなくとも、生きのほこりなどは持てな  
かったにちがいない。

後醍醐にしても。尊氏にしてもである。

わけて尊氏などは、自分の画策と、事の結果とが、

「こうも、思いのほかにも、変ってくるものか」

と、その年の初めに、その一年の未来さえ、分らない気がした  
であろう。

後の史家には、後醍醐と尊氏との講和を、どちらも、謀略と謀略との、だまし合いであつたと説く者もあるが、後醍醐とて、初めから、好んであんな冒険的な脱走をもくろんでおられたものは決してあるまい。

もし、吉野落ちが、初めからの計画であるならば、わざわざ、その御一身を敵の足利軍にゆだねて、都へ還る必要などがどこにある。

あれほどなお覚悟を以てするならば、叡山あんぐうの行宮から、直接、吉野へ入ることは易々いたるものであつたはずだ。やはり尊氏との政治的交渉に、大きな御期待を寄せていたからにほかならない。

それがである。ついに、龍は雲を呼び、雲は龍を乗せて、政治

圏外の、絶対地へ去ってしまった。

尊氏にとつては、大きな痛打であつたし残念でもあつたろう。彼はもう血みどろにあきあきしていた。血が万事を解決しないことも知っていた。

もつと彼の心に重量をしめていたのは、いまの優位のままあとは政治的な進展に乗せて行こうとしていたことだつた。——それが破られたのである。——直義以下の大勢を前にして、彼はあのような度量のひろさをみせてはいたが、じつのところ、落胆は深かつたろう。そして、ことしも来年も、また来々年も、なおまだ不安定な幕府の発足と、戦いの連続をも、胸におかないではいられなかつた。



「……自分の意志ではなく、しかも、自分の意志かのように、周圀はあらぬ方へ動いてゆく……？」

彼はふと懷疑する。大いに悩む日もあつた。しかし彼にはこの頃、ひとつの慰安の場がなくもなかつた。家庭が甦よみがえつていたからである。

丹波の梅うめさこ迫せまから迎えられて、以後、都に定住となつた尊氏の家族は、家来や侍女たちもいるし、なかなかそれは大人数だつた。

母堂の、清子

みだとい所と登と子こ

嫡ちやくなん男なんの千寿王、九歳

そして、腹ちがいの一子、

いさやまる  
不知哉丸

は、ことし十五となつており、その生母の藤夜叉も、はや三十路じをすこし出で、いまでは「越前えちぜんノ前まえ」とよばれ、まったく、武家家庭の型に拘束された一女性になりきっていた。

かえりみると。

これらの女性が世路せいろに耐えてきたたたかいかいも、戦野せんやの男どもに劣るものでなく、しかもこんな弱い群れは、武門という武門や公卿の深窓からもみな「時の波」に漂ただよい出されて、およそ余されてはいなかつた。——むしろ、尊氏の家族のごときは、幸運も幸運、最上な方だつたのだ。

が、越前まえノ前まえには、それですら、いのちの縮むほど、或る期間

が、つらかった。もつとも、彼女のつらさは、漂泊の危険や生活のみじめさではなく、

### 母堂

### みだい所

### 嫡男の若ぎみ

などのなかで、武家家族として共々にその家憲かけんや作法さほうの規矩のりに  
しぼられていなければならなかつたこの長い月日が、口にもいえぬ  
ぬ気苦勞であつたり、情けなさであつたらしい。おなじ尊氏の子  
でありながら、しかも不知哉丸は長子であるのに、事々に、周囲  
の老臣や侍女かしづきは、

「千寿王さま。若君さま」

と、これを立てて、不知哉丸には意識的に差別をする。

でも、彼女は、

「ひがむまい」

と、自分の卑下で自分を抑え<sup>おさ</sup>ころしてきた。しかし、いつまでたつても、彼女には、武家生活に溶け込<sup>と</sup>込めず、そして目下の男女を目下と顧<sup>い</sup>使用するような思い上がりにもなれないのだつた。そして、いつも心のすみのどこかには、前身のひげめが住み、<sup>でん</sup>田樂<sup>がく</sup>女<sup>ひめ</sup>の藤夜叉<sup>ふじやしや</sup>がまだ息づいていたのである。

ここもむずかしい。

一国の和が困難なように、小さい“家”にすら、人間の集合するところ複雑な何かをみな心の襞<sup>ひだ</sup>にもつていた。けれど尊氏は、

しごく大ぎツぱに、これらの家族を見、ひとまずからすま烏丸のさる女院のお住居のあとへ入れて、時折には通つていた。そして直義なども来合せると、母や登子を笑わせて、まどい団欒に飽かない晩もあつた。

しかし、そんなときも、ふと気づくと、越前ノ前と不知哉は、いつかみなのうちから消えていた。直義は敏感なので、あるとき、尊氏へ注意した。

「不知哉いさや丸も十五です。いかに何でも、この春はもう、元服げんぶくさせねばなりませんまい」

まもなく、その元服は実現された。しかしみから身柄は、錦小路殿へひきとられ、直義の養子となつて、なのりも、

ただふゆ  
直冬

と、名づけられた。

彼の生母の越前ノ前が、都から姿を消したのは、それからまもない後だった。

多少の騒ぎはみえたが、家庭の秘事として、表立った捜査もおこなわれず、深いわけを知っている二、三の家臣の間で「おそらく、元の田<sup>でんがく</sup>楽村へ帰ったものであるうよ」などとささやかれたのみだった。

越前ノ前

と、よぶよりは、尊氏にはやはり、藤夜叉とした方が、胸にせまるし、生きてもいる。

「なに、いなくなつた？」

彼女の失しつ踪そうと聞いたときの彼の驚きは、国家的な大變と、一  
家族との違いこそあるが、後醍醐のきみを掌てから逃がした折より  
も、もつと、あらわな苦痛を、おもてへにじみ出していた。

「ふらちな女だ」

と、言つてから、また次に。

「せつかく、不知哉丸を元服させて、直ただ冬ふゆと名のらせ、錦小路  
殿（直義）の養子として据えたものを、なにが不足ぞ。すててお  
け。行方などはさがすにおよばん」

事を、政治として扱うときの彼と、全然、私情でしかない場合  
の彼とは、まるで別人の観かんがある。だらしのないほど、一面はも

ろい。

しかし、このことに限つては、それきり藤夜叉の名も口にしなかつた。——もつとも、時はすでに二月下旬で、越前の戦況が、朝に夕に、ひんぴんと聞え、そのの早馬が入るたび、幕府の室むろま町界隈ちかいわいは、わきかえつていたときでもある。

そして、三月に入ると、まもなく、

### 金ヶ崎落城

の報が、斯波高経しばこうけいと高ノ師泰たかのしやすとの連名で、早打ちされてくるし、ひきつづいて、落城のさい、足利勢に捕われた後醍醐の皇太子恒良つねながが、現地から都へ、押送おうそうされて来た。

押送の将が、幕府へ出て、直義へ告げた日の報告によると。



新田義貞は、さすが北国では、自分に悔いなき戦いをして、金ヶ崎、そまやま 山の二城を根拠に、めざましい経略、また奮戦をみせたという。

けれど、高ノ師泰の加勢が寄手に着いてからは、さしも破綻はたんをあらわして、ついに敗れたものだとある。

この戦いで、新田党の雄、うりゆうたもつ 瓜生保は戦死し、義貞の子義よしあ 顕きも、たかなが 尊良親王も、大勢の味方と共に自刃するなど、いかに苛烈な抗戦であったかは、あとになって、じょうさい 城砦しやうさい に入ってみると、死馬の骨が山とつんであったのでも分った。籠城の将兵はみな、馬を食っていたのである。

「して、義貞は？」

「まだよくわかりません」

「討ち洩らしたか」

「さあ、そこは？」

直義は、次の報を、待ちかねた。するとまもなく、尾張守高経が、新田党の首級二百余コをたずさえて、帰洛した。しかしそのたくさんな首を実検して行つても、義貞の首はなかつた。脇屋義助の首も、洞院ノ実世さねよの首も、なかつた。

直義はいまいましたげに、実検を終ると言つた。

「すべて二日の間、三条河原へ梟かけならべろ」

町の者は、もう見あきている。驚くべきことにも驚けなくなつた非情な唇をそらし合つて、つぶやいた。

「首が咲いたね、土筆つくしみたいに」

「今年は花見と思つたが」

「また、首の春だよ」

人は、このような物を見ても、そこの前を笑つて通るほどの群れになつていた。無常を感じるほどな血の濃こさもなくなつていたのである。——そしてここは北朝の都だが、南朝の吉野の山は、どんな春を粧い出していたことか。

## まだ二十一

吉野に開かれた南朝の政府は、さしあたって、後醍醐のおはい

りになった山上の吉水院きつすいいんをあてて、そのまま、

吉野朝廷

としていた。

そこは、蔵王堂の供僧坊ぐそうぼうとよぶ小院で、やや下がりがかけた崖がけに倚よつて、一面は谷に臨のぞみ、いつも下へ落ちてゆく水音が寒かつた。

花に寝て

よしや よし野の

よし水の

枕の下を

石走いはる音

ここへおちつかれてからの後醍醐は、しきりと歌を詠よまれていた。それも秀歌しゅうかが多かった。自然、運命の極限が、人の悲腸ひちように詩魂しこんを叫ばすのであろうか。

ここにて

雲井の桜咲きにけり

ただ かりそめの

宿と思ふに

これらの御製ぎよせいにみても、吉野はもう花の雲だったにちがいない。そして一月いらい、足利方の目をくらましては、都を出奔しゅしゅんして、これへ集まってくる公卿たちも多く、御座ぎよざのあたりもいっとなく賑わっていた。

そのなかには、前さきノ内大臣定房や参議さんぎノ経季つねすえや、また近衛経忠といつたような、関白家もあつたので、朝廷の儀容ぎようもとのい、人材にかけては、決して、北朝の廷臣に劣るものではなかつた。そこで、まもなく、

「ここも、手ぜま」

とする声が高く、行宮あんぐうは、蔵王堂にも遠くない所の、実城院へ移された。

で、おそらくは、ようやく、ここに皇居の粧いやら朝儀のかたちなどもととのいにかけていた頃であつたらう。

金ヶ崎落城の悲報が入つた。——その詳報の聞えるたびに、夜の花は、声なき御廂みひさしを、雨と打つた。

けれど、やがて。

新田義貞や、脇屋義助らは、なお越前のそまやま 杣山城に拠つて、健在とわかつて来たのみでなく、洞院とういんノ実世さねよも力をあわせて、再起の兵を、全北陸にわたつて呼びかけているとの報をえたので、みかどは、

「末すえこそ待て。一勝一敗のたびに、一喜一憂するはおろか」と、この折にも、一首を詠えいじて、左右の人々にしめされた。

都だに

さびしかりしを

雲晴れぬ

吉野のおくの

さみだれの空

「……それにせよ」

と、後醍醐もなにかにつけてよく仰つしやるのは、奥州方面の消息だった。——みちのくの鎮守府將軍——あの北畠あきいえ家は、なぜまだこれへ見えぬか——というお心待ちな焦躁であった。

北国に、義貞。

東国には、宗良むねなが親王。

また、九州には菊池の党。

そして伊勢に、北畠親房、河内和泉には、四条隆資たかすけと、それぞれの地に、それぞれな宮方の驍将ぎょうしょうがたたかっている。あるいは、四隣しりんの兵を糾合きゆうごうして、次の地盤をつくりつつある。——



―だのに、なぜあの純情無垢むくな若き將軍顯家のみが駈けつけて来ないのか。

さきにも、江戸忠重ただしげを密使として派せられていたが、さらに命めいをおびた吉野勅使は、この月、みちのくへ急いで行つた。

北畠顯家は、この一月ごろ、多賀たがノ鎮守府から伊達郡だてぐんの靈りようぜ山さんへ移つていた。国府も守りきれなくなつたのだ。

みちのくの天地も、中央の余波から兵革へいかくのやむときはなかつた。四方に蜂起ほうきする兇徒のなかにあつて、顯家は、

「ああ都へ。君と父とのいる都の危急へ。何とかして」

と、心はあせつていたが、いかにせん、ここを立つことができない周囲の実状だった。

さきに、吉野朝廷からの、ご催促さいそくに接したとき、彼は密使の江戸忠重ただしげに託して、大意、こういう御返書をさしあげてある――

勅書、ならびに貴札きさつ、謹んで拝見いたしました。吉野へ臨幸のよし、社稷しゃしよくの大慶たいけい、顕家もほつといたしたことでございませう。

つきましては、即刻の上洛を思うこと、心も矢竹にございませうが、奥羽一たい、乱麻らんまの状にて、余賊よぞく、容易に平定せず、さきに新田義貞からも、しきりな急使を受けておりますもの、いかにせん賊徒平定の謀はかりに、日夜、心をくだくのみで、遅々ちちちと、延引えんいんいたしておりますこと、真に、われながら鬱鬱うつうつ

々々の感にたえません。

しかしながら、綸旨りんじを拝して、将卒共に、勇氣百倍いたしました。きつと一日も早く馳はせ上ります。そして天下の逆賊はらを掃い、君辺くんぺんの害を清めて、昭々しょうしやうの御代みよを恢復せずにはおきません。八幡まん、燃ゆる心でおります。委細は上洛のときとし、まずは君前よろしく御披露ごひろうのほどを。

顕家あきいえ（花押かきはん）

人々御中おんちゆう

今は、その時からもう八カ月も経過していた。東北にはすでに早い秋おとすが訪れている。

「行こう！ 万難を排して」

顕家は決意した。——断ジテ行クトコロ鬼神モ避ク——とは、おそらく、そのときの彼の胸中であつたろう。

その顕家は、奥羽おううの鎮守府大將軍という肩書こそかがやかしいが、年は、ことしちようど二十歳はたちにすぎない。

そして、上にいただく義良親王は、十一だった。

十一歳の皇子を擁ようするまだ二十歳の若き將軍は、ここに、

「日夜、中央の危急を案じながら、むなしく、四圀の草賊にさまたげられて、ことしもまた、雪にとじこめられなどしたらなんとしよう。国の大事、吉野のご浮沈。もはや猶予ゆうよのときでない。途中で倒れるまでも行こう！ 八月十一日、ここ靈山りょうぜんを発足す

るぞ」

と、ついに令を出した。

これをたすける人々には、結城宗広、伊達行朝、そのほか、奥州五十四郡の心ある武士どもがあつた。——それに国司勢をあわせるとほぼ一万騎にのぼる勢いをなした。——青襟の將軍頭家のけなげな意気に打たれて奮い立つたものか。それもあるうが、皇室を大事に思うことでは、むしろ僻地の武族や若者の方が純であつたかもわからない。

八月十八、十九の両日には、はやこの二度目の上洛軍は、白河ノ関を突破していた。勢いは風より疾く、秋の千種に見送られて、兵の眉も爽やかだつた。

やがて宇都宮についた顕家は、そこから一使を、吉野朝廷へ飛ばしていた。

「みちのくの精銳一万、りようぜん靈山を立つて、白河ノ関を越え、ここまで来ました。前途幾山河、いくさんがなお途々の敵の邪げは想像を絶しましうが、一念、くじけることはありません。——しせき咫尺に罷り出する日は、今年中か。あるいは年を越えるかもわかりませぬが、まずは第一報までを、この地から」と。

顕家の若い眉と共に全軍は「シキアテン士気天二チュウウ冲ス」の概がいだった。ゆらい、中央の官軍はいたずらに官かんしゃく爵を誇つて老いやすかつたが、みちのくの官軍は若かつた。純で情熱的で、ただ国の難なんに征ゆくとしている、いわゆる山沢さんたくの健児の風がまだあつた。

宇都宮は、結城宗広ゆうきの領で、いわば官軍の一拠点である。七日ほどの休養と装備をととのえ、また参陣の新手も加えて、

「一気に小山を抜け」

と、次の小山城へと、おめきかかった。

今春、足利方の桃井貞直とたたかつて、何度戦ツても、勝てずに退いたところである。

そうした強固なる壁なのだ。

「退けぬぞ！ このたびは」

じつに、ここを降すくだには、十三昼夜の猛攻また猛攻を要した。

しかし、ついに破つて城将の小山朝郷ともさとをとりこにした。そのかわりまた、みちのく軍の犠牲の大だいもいうまではない。

しかも、いたる所には、まだ小<sup>しょうるい</sup>壘<sup>い</sup>に<sup>よ</sup>拠<sup>よ</sup>る敵や残軍の反撃が途<sup>みち</sup>に待<sup>まち</sup>つていた。打<sup>うち</sup>ちはらい、打<sup>うち</sup>ち払い、すでに、秋<sup>あき</sup>は深<sup>ふか</sup>み、十月<sup>じゅうがつ</sup>もすぎかけている。――

「……利<sup>とねがわ</sup>根<sup>ね</sup>川<sup>がわ</sup>だ」

まんま<sup>おもて</sup>んたる大河<sup>おほがわ</sup>に面<sup>おもて</sup>を吹<sup>ふ</sup>かれたとき、人も馬<sup>うま</sup>もそそけだつた。みちのくの脅<sup>おそ</sup>威<sup>い</sup>にたいする鎌倉<sup>かまくら</sup>方の防<sup>ぼう</sup>禦<sup>ご</sup>線<sup>せん</sup>は、つねにここを「――越<sup>こ</sup>えられるものなら越<sup>こ</sup>えてみろ！」と、一大<sup>いちだ</sup>自然<sup>じぜん</sup>の利<sup>り</sup>を持<sup>も</sup>つ備<sup>び</sup>え<sup>え</sup>として恃<sup>たの</sup>んで<sup>い</sup>る。

そのうえに足利<sup>あしかが</sup>方<sup>かた</sup>では、顕<sup>けん</sup>家<sup>け</sup>の西<sup>にし</sup>上<sup>がみ</sup>にたいして、すでに抜<sup>ぬ</sup>かりのない防<sup>ぼう</sup>備<sup>び</sup>の陣<sup>じん</sup>を対<sup>たい</sup>岸<sup>がん</sup>にし<sup>し</sup>いていた。

つたえられるところによると、鎌倉<sup>かまくら</sup>にはいま、尊<sup>そん</sup>氏<sup>し</sup>の子<sup>こ</sup>の千<sup>ち</sup>寿<sup>じゆ</sup>



王が、足利義詮よしあきらとなつて、京都から降くだつて来ているという。

——そしてまわりには、上杉憲顕のりあきや細川和氏かずうじやまた高ノ重こうしげも茂ちらがつき添そつて、関東地方をかため、とくに斯波家長しばは、東国における実戦では経験第一の者なので、利根川へも彼が大將としてのぞんでいるとのことだった。

さすが、顕家の麾下きかも、ここでは苦戦の足ぶみを余儀なくされた。——いつか冬にも入り、坂東平野ばんどうの氷雪ひょうせつになやまされることも、たびたびだった。

が、十二月十三日の決死の渡河とがは成功して、ついに、敵の堅陣をけちらし、十六日には、長駆ちようく、もう武蔵野の西を駆けつつ、

「はや、鎌倉はそこ」

と、先を争っていた。

府内における、小壺、前浜、腰越の合戦などは、二十三、四日頃のことである。——敵の斯波家長は、杉本城で自刃し、足利義よしあきら

詮しあきら以下は、三浦方面へ、敗走した。

「年内には、吉野までも」

と、急いできた顕家も、ついにここ鎌倉で越年となった。霊山出発らしい、四月よつきめ目だった。

けれど、これでも迅はやい方であり「よくぞ！」と踏破とうはの後あとを振返ったことであろう。同時に「ここまで来れば！」の感もあった。

ここで、つけ加えておかねばならないことがある。

北畠あきいえ顕家軍の鎌倉突破は、いかにも、一瀉しや千里に行つたよう

だが、これには、ほかの助勢じよせいもあつたのだ。

一つは、北条時行の助けであり、もひとつは、新田義興よしおきの応援である。

北条時行（亡き高時の遺子わすれがたみ）は、そのご、勅免となつて、伊豆にいたので、顕家の南下に呼応こおうして、箱根に旗を上げ、また、新田義興（当年、まだ二歳の徳寿丸）は、新田党の郷土、上野こうずけを出て、これも側面から顕家を助けていたのである。

——わずか五年前をかえりみれば、執権しっけん高時は、後醍醐の怨敵んてきだった。また義貞は、その北条九代の府を、一朝ちようのまに、瓦礫れきとなさしめた人だった。

それが、いまでは“反尊氏はん”のもとに、勅免こうむを蒙つて、高時の

子も、新田の党も同陣になっていた。じつに予測もできない時の  
変りようである。

そして、これらはみな、時をひとつに、全国へむかつて発せら  
れていた吉野朝廷の大号令によるもので、その目標は、

京都を奪回せよ！

であつた。

檄げきは、東北四国九州へも告げていう。

京都の北ほくちよう朝あさは偶像ぐうぞうである。傀儡師かいらいしの尊氏にはさしたる

戦意もない。直義ただよしは一驕きようしや者ものにすぎず、次第に武家からも見

離されよう。兆きざししはもうみえている。

反対に、吉野遷幸せんこうこのかた、諸州にひそむ忠誠の士は、みな

悲憤して起ちあがつた。一個の浮沈にとどまらず、この国そのものが保てるか、救いなき荒廢へ落ちて行くかの、真の国家の危機を、人は初めてほんとに気づいたようだ。見ずや、諸国のあいだには、これまでにない正統な朝廷支持の声がぼつ然と高まつていることを。

時は、まさに今である。

京都を奪回せよ

東西南北から、京都へ迫れ。

こう激越な檄は、東海道をはせのぼるみちのくの健児らへも、  
軍樂のような鼓舞を盛り上がらせていたのだ。さらに途中では、  
宗良親王の参陣を見、その兵力も二万余の大軍に増強されてい

たのである。

しかし、明けて延元三年のこの一月は、彼らにとって、苛烈であつた。

行くての美濃路は——不破<sup>ふわ</sup>、関ヶ原、垂井、青野原——すべて敵勢で充滿していた。はやくも京都から直義の指揮下に、高<sup>こう</sup>ノ師<sup>も</sup>冬<sup>るふゆ</sup>、吉川<sup>きつかわ</sup>経久、佐々木道誉、おなじく秀綱、土岐頼遠<sup>よりとお</sup>、細川頼春などが、数万の兵力を幾手にもわけて、待つていたのだ。

いかにその旗かずや軍色が多かつたかは、先<sup>せん</sup>ノ陣と後<sup>あと</sup>ノ陣との割りあてをきめるにさいし、諸将の間で、クジ引きがおこなわれたというのでもわかる。まだ二十一と聞く花の如きみちのくの鎮守府將軍顕家の首、それを、われこそ挙げんと、みな競<sup>きそ</sup>い合つた

ものだったろう。

しかし、顕家の首は、そうたやすくは取れなかった。

かえって、数日にわたる激戦の結果では、その逆が出た。一陣と一陣との駆け合せでも、一騎と一騎とのたたかいかいでも、断じて、みちのく勢が強い。

京都では、この敗報に、大動揺をおこして、一時は、西国落ちの評議まであったというが、これはうそである。——高こうノ師もろやす泰が、急遽、加勢に向ったのはほんとだが、まだ、美濃平野の対峙だった、そこまでの狼狽などするはずがない。

むしろ、やがて、

「すわ、あぶない！」

と、自軍の立脚点に、恐怖したのは、顕家の方だった。

なぜなら、ただただ敵中を突破しつつ、長驅ちようく、これまで来たことなので、一時、敗散した東国の足利勢は、そのあとで勢いをもち返し、東海道を追跡して、いまやすぐうしろに迫っていたからである。

しかも、その追撃軍は、少数ではない。上杉憲顕のりあきをはじめ、江戸氏、葛西党かさい、三浦一族、坂東八平氏ばんとう、武蔵七党などの混成旅団で、あなどりがたい兵質と数であった。

顕家は、このとき、

「越前の新田義貞は、われらが、はや、ここまで来たことは、夙つとに聞いているはずだ。義貞は、どう動いているか。義貞のうごき



こそ、知りたいもの」

と、しきりにあせつた。

けれど、忍びの連絡はなし、何ら、その消息を知りようもない。もし、義貞も京都へと、歩調を共に進んでいるなら、自分はこの一歩でも退くべきでなく、どんな犠牲を払ってでも、一路京都へ行くべきであると、顕家は考える――。

「おそろくは」

と、結城ゆうきノ入道宗広が、彼の長い経験から見て言った。

「新田殿としては、うごきたいにも、うごかれぬ状態なのでございましょう。もし、それができるくらいなら、東国へ迂回して、すでにわが軍と合流もしていたはずです」

「では、ぜひもない。道をかえて、伊勢路から奈良へ入ろう」

「が、それにしても」

「うしろの敵か」

「さればで」

「なんの一ト反撃くれて、敵の潰<sup>つい</sup>えるそのひまに、順次、南へ下がつて行け」

反<sup>かえ</sup>り合戦というものは、非常な迅速と、敵の油断を突くのでなければ成功しない。——機をつかんで、みちのくの兵二万は、一せいに後を向いた。

この戦いで、敵の土岐頼遠は負傷し、桃井直常は、さんざんになつて、<sup>すのまたがわ</sup>洲俣川を逃げ渡つた。奏功は、充分だったのである。

——よしっ！ と見るや顕家たちは、方向を南へ変えて、一気に、北伊勢へ、転進をつづけた。——そして伊勢や伊賀の山中でも、行く先々では、足利方のさまたげに出会ったが、行くところ、それに剋かった。

こうして、やつと、

「才、奈良が見える」

と、全軍の士は、伊賀路を南下がりに来つつ、諸もろごえ声あげて、よろこびに踊りあつた。

この日、辰たつのいち市の辺で、足利勢との小ゼリ合いがあつただけで、顕家あきいえ以下の長途の兵は、ここに奈良を占拠した。

当然、吉野朝廷のよろこびは大きく、顕家の不撓とうくつ不屈な来援は、

「よくぞ、よくぞ」

と、高く歓呼されていた。

奈良とは目と鼻のさきの吉野である。けれど顕家は、ついに、吉野へは参内せず、みかどへお目にかかろうともしなかつた。また、つい伊勢に居ると聞いている、父の北畠親房とも、もちろん、会つてはいなかつた。

「ここで息は抜けぬ」

と、彼はすぐ次にそなえて、

「京都回復の大命を成しとげ、そして真の勝利をみるまでは」  
と、かたく誓っていたものであつたらう。

その京都にあつては。——尊氏もこのところ、従来の「直義」  
ただよし

まかせ〃を放擲ほうてきしたかのようなおもむきがある。

直義は、じつとしていられる質たちでない。

みずから美濃へ出馬し、帰つては北国の手当とくを督し、また、奈良方面の作戦に当るなど、向うところの局面へ没している。

いきおい、尊氏はまたも、好まざる表面に立たなければならなかつた。

昨今、京都の上下は恟きようきよう々々と万一の憂いにおびえ出しており、それに第一、執事の高ノ師直もろなおなどが、決して、尊氏を安閑あんかんとはさせておかなかつた。——かねてから師直は、尊氏の〃直義まかせ〃な態度には、多大な危惧と、不満とをもっている者だつた。

「おそれながら」

と、師直は、たびたび、尊氏にいさめていう。

「錦小路さま（直義）へ、一切の権をおゆだねあるなどは、ちにしきこうじと早計ではござりますまいか。天下の耕地は、刈入れかりいどころか、まだまだ、青田にもなっておりません。しかのみならず、五風十雨う、まま洪水でみずが襲つて、せつかくこれまでにきた御経営も、一夜に泥の海と化かすごとき惧おそれすら、なきにしもあらずです」

「わかつている」

尊氏には、たいがい、わかつているには違いなかつた。——師直も決してこのひとを、暗君とは思っていない。否、大いにおそれてさえいるのだが、それにせよ直義がこのひとを超えてあまりな権けんを持つのは好ましいことではなかつた。しぜん自分の将来も共

にうだつの上がない予想がされてくるからだった。

しかし、尊氏の心境も、もう前のようではない。顕家の奈良占領の事實は、彼を大きく反省させた。

いまさらのように、吉野戦略の全国的な構想の大を知り、また、南朝方にはその持つ伝統と、後醍醐という不世出なきみの精神力とをめぐって、顕家のごとき純で強烈な臣子が、なおまだ、少ないなども、大いに覚さとつたようであった。

それにもよるか。

二月二十八日以降の、足利勢の奈良攻めには、たしかに、その指令は、尊氏から出たかとみられるふしがある。高ノ師直の軍旗が、この戦場にあらわれたなども、その一証といっている。

奈良は、猛攻撃をうけた。

奈良坂、東大寺附近、法華寺かいわい界隈、てがい手搔小路と、合戦は連日、しれつ熾烈をきわめた。——が、一方の顕家のきか麾下は、いかんせん、いわゆる“疲れ武者”で疲れぬいていた。

「無念だが」

と、顕家は四囲の情勢から今は奈良を放擲するしかないときめて。

「河内へ退ひこう。河内、和泉、摂津の兵をきゆうごう糾合し、敵の天王寺へ突いて出よう。かしこによ抛れば、海の口をやく扼し、かたがた、淀をさかのぼって、京都回復の作戦に出ることもできる」

こう決意すると、彼は、義良親王の前に伏した。親王はやつと



十二になつたばかりの童形どうぎようである。顕家は、兄のようさとに諭して言つた。

「宮様とは、数年の間、みちのくの艱苦を共にしてまいりましたが、ここにてお別れ申さねばなりません。供人ともびとを添えてお送りいたしますゆえ、吉野へおわたり下さいまし。吉野には御父のみかど、御母の君（准后ノ廉子）、みなおいで遊ばします。わけて御母の君にはどんなにお顔を見たがつていらつしやることでしよう。……この顕家も、やがて都を取り返したあかつきには、さつそく吉野へ罷りまかいでますれば……」

「……………」

親王はただうなずいていらつしやる。

親王は七ツ、顕家もまだ十六のときから、この幼い君臣は、朝廷を代表して、陸奥みちのくの遠くへ赴任し、多年風雪の苦を共にしてきたのである。親王にすれば父母以上にも慕われていた顕家であつたろう。こらえ泣きのせきをやぶつて泣かれたが、やがて、なだめすかしてようやく吉野へお送りしたのであつた。

つづいては、東国で参陣された宗良親王むねながへもすすめて、この君とも、強たつてここで別れた。そして吉野へ送らせた。——彼には胸に期きする何かがあるにであつたとみえる。

京都は目前だが、同時に足利軍の配備は、これまでに踏破とうはして来た海道戦の比でない。そして、すべて新手の敵だ。その重厚な兵力はまた、いくらでも後備を繰り出すこともしよう。

「これからは」

と、顕家はいよいよ惨烈な苦戦を思う。

なにしろ頼む味方の中堅は、長途の疲労からまだ充分に脱けきれていず、それにこの奈良へ着いてからは、士気のゆるみも生じていた。

純なるみちのくの健児たちも、そのすべてが顕家のもようであつたわけではない。顕家のごとき教養のうえに持たれた情熱でも信念でもなかつたから、ひとたび弛むゆると、ただの野性の若さだけになり、それが物珍しい奈良界かいわい限の都会的な物への物欲に移行していつて、燃え狂つたのは、自然といえは自然と言いうる現象であつたらう。

ほかの書にはないが「興福寺略年代りやくねんだい」には、このときの奥み州兵ちのくへいは、奈良ではじつに手当り次第な掠奪をおこなつて、まるで野の子供みたいな野蛮性を發揮したと書いている。——その暴状ぶりは当時戦乱に馴れた時人じしんをしてさえ「前代未聞ぜんだいまもん……」と、眉をひそめさせた程とあるから、よほどひどかつたものらしい。

これを見たあきいえ顛家の傷心はいうまでもなかつた。彼が、宗良むねながと義良の両宮にお別れしたのもそのためではなかつたか。また前途に、新たな困難や苦戦が予想され出していたのも、ひとつには、この救い難い現象にもあつたらうか。

しかし、暴兵化した暴兵にもまた一種の強さはある。

顛家はよくその貍ひきゆう貅ゆう（中国で昔、飼ひ馴らして戦陣に使つた

という猛獸)を上手に用いたらしい。和泉、河内の野に転戦してからも、彼の軍は、行く所で勝った。

そして、天王寺の敵、細川あきうじ顯氏を破つて、そこを占領したのは三月八日で、その八日九日は、ひどい雨だった。

雨の京都は、この報で、

——京中、動乱シテ、恐怖、流言、極キハマリナシ。〔官務記〕

の状だったという。

けだし、天王寺の陥落は、淀川の線に沿そつて、すぐ京都をおびやかしうる体勢を敵が持ったことを意味するからだ。

しかも、この優勢に加えて、顯家の弟、北畠あきのぶ顯信もまた、男おとこやま

山に進出していた。その男山八幡の上からは洛内の屋根も見

える。「官務記」が記しるしたことも、あながち誇張ではなかつたろう。

「すわ、抜かつたり」

と、足利方では、兵馬の大移動に追われていた。

これほどとは、尊氏も予想せず、直義も思っていなかつたものとみえ、直ただよし義は急遽、東寺まで出陣し、師もろなお直の手勢は、ただちに洞ヶ峠ほらとうげから八幡やわたにわたつて、男山攻撃を開始した。

だが男山は、頑がんとして陥ちない。しかも、ここに手まどつていれば、いよいよ天王寺方面の顕家を強大にする。

尊氏は、洛中から指令を送つて、師直に告げた。

「さきに天王寺を攻めろ。天王寺が陥ちれば、男山も自然陥ちる」

と。

で、師直は、一部の兵力を八幡にとどめて、一子師冬もろふゆ、武田、島津、吉川きつかわ、田口、岡本などの諸部隊をひきい、自身、天王寺へ駈け向つた。

いまや様相は、南朝と北朝と、また南党の士と北党の士とが、あしたの運を、ここにかけたかたちであつた。

このときにあたつて。

吉野朝廷では、はるか越前の新田義貞へむかつて、

“——天下ノ安危ハ只コノ一挙ニ有ル。一刻モ早ク、  
ヘンキヤウ 辺境ノ

合戦ハサシ措キオ、京都回復ノ征戦ニ急ギ上レ”

と再三、勅の密使を、北へ飛ばしていた。

おなじような檄げきは、九州へも、ひんぴんと送られたが、菊池党や阿蘇あそ一族は九州内部のたたかいでうごけず、義貞もまた、越前から足の抜けない事情にあるのか、とうとう、このかんじんな時機に、北方から京都を突いて、尊氏の胆きもを寒からしめることもなく、ついに四月は過ぎてしまった。

顕家のたてこもった天王寺の附近を中心とする堺ノ合戦、渡辺橋ノ合戦などは、このあいだに一勝一敗をくり返しつつ激烈をきわめ、戦場もここのみでなく、摂津、河内、和泉の野にわたる一円の火となっていた。

「よく戦った」

……思えば、と顕家もかえりみて悔いはなかった。



みちのく以来の、純で野性な若人たちも、あらましは戦場の野の  
晒ざらしと化し去つて、残るは少なく、多くは、以後の部下だった。

顕家は、その夜、感慨の中にいた。陣中用の小硯こすずりと小さい燭あかりを机におき、深更まで何か筆をとっていたのである。外は暗い霧で、この夜も敵味方の声が海鳴りのように遠くでしていた。

顕家が夜をあかして書いた杉原紙すぎはらがみ十数枚にもものぼる文章は、吉野朝廷へたてまつる彼の政治意見書であつた。

上奏文の内容は。

兵革に苦しんでいる民の租税そぜいをかるくすること。

わけて地方政治に徳を布しいて撫民ぶみんの実を示さねば、国の乱は絶えないであろうということ。

それらの持論を前提に。

まず朝廷みずから「遊幸宴飲」の風習を廃め、一切の奢侈を禁じ、とくに公卿、官女、僧侶らの、

「機務キムヲ蠹害トガイシテ、朝廷ノ政事ヲ黷ケガス」

などの輩はいは、いわゆる朝恩に狎なれて、みだりに、官職の榮を争う醜悪な輩と共に、すべて一掃そうしなければならぬと断じ、時代の悪を、痛嘆しているものだった。

全文は七箇条、このほかにも、朝令暮改ちようれいぼかいの弊へいやら、賞罰の不明朗やら、吉野朝廷の君臣には、とにかく痛いところをついて  
いる。

もちろん、どことなく文意は若い。政治的達見というほどなも

のでもない。

けれど顕家が精いッぱいな憂心の吐露とろではあつた。——久しく奥州の任地において、中央の政府の状をながめ「これでいいのか？」と疑い、「これでは世の紊みだれも中央悪のせいではないか」と憤つてさえいたものを、今、吉野朝廷へ上表していたものであろう。そして、この夜からわずか七日の後、五月二十二日。

顕家は、戦死した。

ところは和泉ざかいの安倍野とばかりで、明確にはわかっていない。

天王寺や堺ヶ浦では、一時、足利もさんざんな敗はい相そうだったが、高こうノ師もろ直なおの迂回作戦と、細川あきこうじ顕あきこうじ氏の突撃が功を奏そうしてから、

顕家の麾下きかは分断され、みちのく以来の家士百八人も個々討死してしまい、顕家もまた乱軍のなかに力も尽きて、斃たおれたのだった。紅顔、まだ二十一。

北畠顕家の生涯は終わったのである。犠牲を犠牲の意義に生かすきつて散った花のいのちは、いかにもきれいで、あとかたもない野の露は、ひとしお、あわれというほかない。しかし吉野のうけた衝撃は小さくなかった。朝廷では、彼の上奏文を読んだ直後にこの悲報をうけたのである。一字一句にこめられた顕家の祈りの文字は、いちばいひしと、朝臣たちの骨身に沁しみたにちがいない。また、これを境に、時局は重大な転機きたを来して、北畠顕あきのぶ信の拠よつていた男山も七月に入つて陥落し、摂津河内の拠点は、あら

まし、足利方の占める所となつてしまつた。

そのうえにも、さらに吉野朝廷をおどろかせたのは、北方からの一報だつた。——それは越前にある新田軍の破滅を意味するものですらあつた。

そのごの新田党は、四面の地方土軍や足利勢との駈引に忙殺されて、なすところもない態だつたが、吉野の召命しやうめいの頻りなのに焦心あせりをおぼえた結果だらうか。ここへ来ての義貞の戦いは、焦心あせればあせるほど頽勢たいせいに傾いていたところ、七月二日、藤島の燈明寺とうみやうじ 躰たゝとよぶところの泥田の道で、義貞は流れ矢にあたり、年三十八で、あえなくもついに戦死したとの情報なのであつた。

あきぎり  
秋霧の御記  
ぎよき

吉野の群臣は、絶望にうちひしがれた。それもこんどは、決定的な絶望というしかない。

期待していた北畠顕家は亡く、いままた北の空で、新田義貞もついに戦死したという。

## 京都回復

の望みなどはもう思いもよらなかつた。なんとといっても、宮方軍の総司令義貞が戦死と聞えては、全国的に波及するところも決して少なくないだろう。それを思い、これを思う人々は、

「どうなるのか」

「この果ては？」

と、ただ自失の色めきを、実城院の御座ぎよざに詰めあっているだけだった。

何しろ、すべてはここに一頓挫のほかはなかった。——けれど奥あんぐうまった行宮の深くでは、かえって何かふしぎな活力のような精気が、その昼もうすぐらい御簾ぎよれんの御灯みあかしにあかあかとかがやいていた。そしてたえず、准後の廉子がまめやかな奉侍をしたり、時刻時刻には、かならず煎薬せんやくをさしあげたりなどしている御起居のさまなどもよくうかがわれる。

後醍醐は、廉子がさしあげるその薬湯の盥わんをお手にしながらも、

「定房をもいちど呼べ」

と、前さきノ内大臣定房をしばしば召されたり、またすぐ、

「親房を」

と、北畠親房を交じえて、長時間にわたるおはなしがあるなど、およそ、表の衆臣のあいだにあるような絶望感に負けたような御容子は全くなかった。むしろ——義貞死ス——との悲報が入つてからの後醍醐は、つねにも勝まさるような御音吐ごおんとで、夜もおそくまで、ひねもす終ひねもす日、人々の意見を徴ちようしては、次の挽回策に、心身のお疲れも忘れてゐるかのようだった。

そして、それから十日ほど後には、

「ぜひもない。京都回復の企きと図はしばらく措おこう。要はまず、東



国みちのく奥州の固めに主力をそそぐことだ。しかる後に、尊氏の根柢をその足もとから覆くつがえそう」

と、さいごの叡慮えいりよも決まったようであつた。

さきに、顕家と別れて、この吉野へ来ておられた義良親王よしながは、そのため三たび、陸奥みちのくの任へ就いて赴ゆくことになつた。

輔佐ほさには、顕家の弟、顕信あきのぶを陸奥むつの鎮守府將軍にのぼせ、また、結城宗広ゆうきをも付き添わせて、ここに、東下の軍勢が、再編成されたのだつた。

いや以上のほかに、宗良親王むねながも加わり、北畠親房きたはたも行こうに加わつた。吉野にはなくてはならない重臣の親房である。その親房までが行こうを共にしたのを見て、いかにこんどの挽回策に、後醍醐

が、積極的であつたかがわかる。——ゆらい、難なんに当れば当るほど、かえつて、難に強くなる御気性の底が、ここにもあらわれたものだつた。

しかし、豪邁ごうまいなる天皇をお父ぎみに持つた御不幸といつてもよからう。いじらしいお別れにみえたのは義良親王であつた。凡ぼ下んげの子なら遊びざかりの十二でしかない。——せつかく、顯家と別れてこの吉野に来ておられたものを、またまた、元のみちのくへ下くだることになつたのである。御父のみかどはともかく、母情として、廉子の胸などはどんなものであつたらう。凡下の親には想像もなし能あたわないことだつた。

義良親王と一行の随員たちは、やがて伊勢ノ大湊に集まり、用

意されていた大船五十二そうの上に乗り別れた。

吉野山から伊勢の港へ出るには、山間二十八里、急いでも三日がかりの難路でその困難はたいへんだった。しかし全国との脈みやく絡らくを取る海路として、西の泉州堺は、足利方におさえられていたので、吉野経営には、この伊勢ノ大湊ただ一つが、無二の生命線だった。

さきに北畠親房が、はやくから伊勢地方の確保に努めていたのはそんな理由からでもあった。そして、ここには大きな造船能力まで持つて、吉野と鎮西諸国、また奥州や東国との中継所の形をなしていたのである。

ところが。

この一行こう五十二艘の大船は、はじめはつづがない海路にみえたが、やがて遠州灘えんしゅうなだにさしかかったとき、大きな暴風しげに出会つてしまった。「正統記」に九月十日頃とあるから、いまでいう颶た風いふうであつたのだろう。

一瞬のまに覆没ふくぼつしてしまつたのやら、また助かつた船にしても、みな大破してちりぢりにどこかへ吹き流されていた。

もちろん、それぞれの消息が分つたのは、よほどあとになつてからだが、北畠顕信と結城宗広むすひが陪乗ばいじようしていた義良親王のお船は、あくる日、知多半島沖の篠島しのじまにただよい着いた。

またべつの船にいた北畠親房は、遠く、東国の常陸ノ浦まで流されてゆき、さらに宗良親王の一船は、駿河湾のほとりに着き、

まもなく、宗良の御子<sup>みこ</sup>は、遠州の井伊城へ入ったことが、後日に知れた。

「なにごとも天意でしょう。こんどの御災難で一行は四散してしまいました。思うにこれも神のおはからい以外なものではございません。すまい」

十二歳の義良親王には、恐ろしい御経験であつたろう。その茫然なお顔へ、白髪のお老将は、こうおなぐさめしぬいていた。結城宗広なのである。

宗広は、親王を奉じて、篠島から一たん伊勢へひつ返した。自然、颱風に吹き返されたような形だった。ところが、その十一月、この老将は伊勢で病んで、ついに帰らぬ人になってしまった。――

—かの亡き將軍あきいえ顯家とともに、みちのくの長い年月から征途の艱苦も、ひとつにして来た宗広なので、親王は、

「じいよ。じいよ」

と、そのなきがらに取りすがって、親に別れるように泣いた。童心まだ十二の御分別には、どうしてこのじいは、こんなくるしい道ばかりあるいてついに死んでしまったのか、自分もそうしなければならぬのか、おわかりになれなかつたに違いない。

宗広も征途の途中でついに亡くなつてしまつたので、親王はあくる年の三月、ともかくと、ふたたび吉野へ歸られた。そしてその年の秋八月には、おもいがけない父のきみ後醍醐の崩御ほうぎよに付き添われたのであつた。

それより前に、よしなが義良にはりつぼう立坊（りつたいし立太子）の議がきまつていたので、崩御の前日、じょうい讓位がおこなわれ、即位は、後日に約された。

すなわち南朝の、

後村上天皇

とは、このきみだった。じいのことばのように、すべては天意であつたものかもしれぬ。

天皇のみまかられた喪もの行宮あんぐうは、ただの悲嘆などというものではなかつた。——しゅうふうらくぼく秋風落莫——とでもいうほかは、南朝衆臣の悲腸をあらわすことばもない。

天下、万事ハ休スキウ

とまで、ここではみな思わざるをえなかつたろう。

さなきだに、吉野朝廷には悲運また悲運ばかりが、たびかさなつていた折である。すでに、みまかられる数日前にも、

こと問はん

人さへ稀まれになりけり

わが世の末の

ほどぞ知らるる

と、詠み出られた一首を、みとり看護のしんたいけんもんいんやすこ新待賢門院廉子へお示し  
になつていたという。

そのお歌にもはや、これまでの後醍醐にはないお心弱いごいん語韻が  
どこやらにながれてはいなかつたか。



おん年は、この秋で、五十二。まだまだ老衰のお年ではなかつた。「正統記」によると、

月の初めより

あきぎり をか  
秋霧に冒され給うて——

とあれば、おそらくは、お風邪かぜが昂こじられた程度ではなかつたろうか。

しかし、それが命ごしゆうえんの御終焉ごしゆうえんとなつたのは、ひとえにこれまでの心身のおつかれによるといつてもよいであろう。即位即位いらい二十一年、およそこれほどみずからのおからだをみずからの理想にえの贄にえとして酷使酷使なされた天皇はほかにない。ためにお心つかを勞つかつたことも、はなはだしい。

不遇で長かつた皇太子時代には、青年らしい奔放な恋もし、また鬱うつを放はなつたためには、後宮の女色漁りも人いちばいな方であつた。しかし学問は終始怠らず、仏法の研鑽けんさんには、わけてなみならぬものがあつた。すべてにむかつて、その御精力は、精力の底までを、かたむけ尽さねば気がすまぬご気性だつた。

が、その本質にかなつていたのは、なんとといっても、政治であつた。人間一代の仕事として何が最も崇高すうこうか。それは政治だといふ信念にもとづいておられたらしい。いかえれば政治好きであつたのだ。——もちろん、みずから全土の朝廷軍を御簾ぎよれんの内からうごかすの御意志は元々なかつたが、しかし諸将を用いること棋盤きばんの駒のごとく、機略縦横な謀略の才なども、ついには御自

身を兵火のうちに投じ、またしばしば、獄窓ごくそうにつながれるなどの、帝王としては、余りにも数奇さつきに過ぎる生涯を必然にしてしまわれたものであった。

しかも、夢はやぶれて、業は半ばというよりは、時も暗澹あんたんなうちに、世を終わられたことである。御無念はいうまでもなかつたろう。

崩御ほうぎよの、つい前日にさえ。

西国にある皇子みこのおひとり懐良親王かねながに、遺勅を送って――

「わがなきのちも、朝敵掃滅そうめつのはかりをおこたるな」と、激励しておられたほどであった。

かえりみれば、たくさんな皇子みこたちも、戦陣うしなに亡わせ、残る幾い

くたり

人かの皇子すら、北や東や西と、ちりぢりに所をへだてて、八月十六日の深夜丑ノ刻、おん息をひきとるときの御枕べにいたのは、悲哭する廷臣をべつとすれば、わずかに、御生涯の艱苦をともにして来た准后阿野廉子と、第七皇子の義良十三歳のおふたりだけであつたのだ。

その御臨終のさまを。

主上 苦しげなる御息を

吐かせ給ひて――

と「太平記」は、こう御記しているのである。

「異国の帝王には、この世の宝玉や愛妃への執念を墳墓にま

で随えていったような人もあるが、じぶんは今、臨命にさいして、

妻子への未練も、王位や珍宝にたいする妄念も、何ら持つてはいない。……ただ生々しやうじやうよよ世々、心のこりなのは、ついに朝敵を亡ぼし終らず、四海の泰平を、この目で見なかつたことである」とし、その下に「これを思ふ故に」と、つづけて。

魂魄こんぱくはつねに

北闕ほくけつの天を望まん

もし命そむに背き

義を軽くせば

君も継けいたい体の君あらに非ず

臣も忠烈の臣に非ず

と、さいごの綸言りんげんを残され、そして左の御手に、法華経ノ第

五巻を持ち、右の御手には御劍ぎよけんを抱いて、おかくれになつたとしている。

これは、すさまじい御遺言の形ぎようそう相で、いかにも、さもあつたらしく思われぬではないが、後醍醐は、古代東洋の学問に深く、宗教の面でも、なまはんなぶつけな仏家よりは、はるかな諦てい観かんを積んでおられたはずである。なんで死にのぞんで、世まい言ごとにひとしい妄念を——苦しい御息の下から吐き給う——などのはずはない。

「太平記」の舞文ぶぶんに過ぎない。

おそらくは、その寛達かんたつで豪毅ごうぎな平常と教養からおしても、これまでか

と、大死一番の死を觀ておられたことと思う。

たとえ、大業ツイニ成ラズ——の御無念はあつたにしろ、死んでも魂魄こんぱくはつねに京都回復を望んでいるとか、自分の命にそむく天子は、天子も天子でないの、臣も忠義の臣ではないなどという、そんな妄想じみた御遺言をなさるはずはない。

さいごの、おん瞼まぶたに、あらゆる人々との別れを、しずかに、ただよわせたときには、後醍醐もただの一個の生命として……

すまなかつた

と、身に併あわせて、生きとし生ける者への御誦念ごずねんをお唇にもつたのであるまいか。

わけても、乱世下においた、無数の民にたいしてである。

身にかへて

思ふとだにも

知らせばや

民の心の

治めがたきを

かつての御製ぎよせいには、そうした歌もみえている。王政一新の理想にしても、民を基盤としてのみあることだ。かならずや死に臨んではお胸にわびておられたにちがいない。

ともあれ、帝王として、また父として良人として、その死は、おおかたの人間とも、さして変ることにはなかつたであろう。ただ天皇のばあいは、その意志による御生涯の波及するところが、余りにも大きかつたのはぜひもない。



吉野山

蔵王堂の良なる  
うしとら

林の奥に

まろをか

円丘を高く築いて

北向きに葬りたてまつる  
はうむ

——かくて、御一代の業は終つた。そしてその土墳は、あとに残つた旧臣后妃の涙に濡れた。  
ここうひ

十月、大葬の営みがすむと、後村上の即位も、かたちばかり執りおこなわれた。

もしこういう時でなかったら、群臣、万歳の声にわいたであらうが、この祝典の日さえ、吉野の上は、うそ寒い秋の風だけだつ

た。

なんといつても、すうじく 枢軸の後醍醐をうしなつた南朝の朝廷は、  
空閣の虚むなしさをどうしようもなく、前途を悲観する人々のあいだ  
では、はやくも、

「がかい 瓦解はのがれえまい。いまのうちに」

と、身の処置を案じたり、余命を山林に隠そうとするうごきな  
ども見えだしていた。

こういうなかに在つて、たれよりも平静でいたのは じゆんごう 准 后の  
やすこ 廉子であつた。

もちろん、幾夜も悲しみの底に泣いて、先帝とのお別れに、女  
の尽きない涙をか 涸らしたであろう容子は、その豊麗にも、げっそ

りと、窶<sup>やつ</sup>れのきわだツてきたことでもわかる。が、日もたつにし  
たがつて、彼女は、童<sup>どうぎ</sup>形<sup>よう</sup>十三歳の新帝後村上を擁<sup>よう</sup>して、

### 国母

そのものになりきっていた。後醍醐のなきのちも、後醍醐のい  
ますが如く、わが子を立てて、いやこの幼帝に仕えて、先帝の遺<sup>い</sup>  
誠<sup>か</sup>にそむくまいと、自己を神格的なものに持ちささえている寡婦<sup>かふ</sup>  
のつよい一心が、その姿までを、氷の中の花みたいに、きびしい  
ものに作っていた。

けれど、衆臣の動揺は、この一寡婦<sup>かふ</sup>と年少の天子に、しよせん、  
大きな頼みはかけられなかつた。時に、それを励ましたのは、公  
卿でなく、吉野ノ執行<sup>しぎよう</sup>、吉水院ノ法印宗信<sup>きつすい いん そうしん</sup>で、

「まだ先帝の七々ノ御忌ぎよきもすまぬのに、もう南山の解体を議せられるなどは、余りにもふがいないではありませんか。諸州の義士は、かえつて、この悲報と遺いし詔しょうによつて、いちばい奮い立ツてくるかもしれず——尊氏が思うつぼにはまつてはなりませんまい。——とまれ吉野大衆は不変のおたすけをいたさんと衆議いちじ一いち定じよういたしました。歴代、朝廷あつての公卿廷臣が、この期ごに、朝ちようの存亡を疑い、身ひとつの去就に迷うなどは、何としたことでしょうか」

と、人々の滅失を、大いに醒さました。

そのうえ、ここにまた、悲腸の廷臣たちを力づけたものがある。それは、亡き楠木河内守正成の嫡ちやく男なん正行まさつらだった。先帝の喪も

と洩れ聞いて、正行は一族の和田和泉守らとほか数百騎をひきつれて馳はせ参じ、

「まずは御陵ごりょうのおん前に」

と、そこへ来てぬかずいたのち、初めて、新帝の行宮あんぐうに参内をとげたのだった。

その正行は、当年十八。その若武者振りは衆目をひいたが、やがて年の暮頃、河内へ帰って行った。

かくて公卿たちの腹もさだまり、喪もは遺詔いしやうの檄げきと共に、全国の宮方へ通達され、あくまで吉野死守の結束を新たにしていた。するうちに、美濃で敗れた脇屋義助も、ここの吉野へ落ちて来るやら、諸国の武士の南朝支持もまだつよく、俄に吉野朝廷が衰え

たとも見えなかつた。

てんりゆうじぶね  
天龍寺船

尊氏が、後醍醐の死を知つたのは、八月十八日の明けがただつた。

これはおそろしく早かつたといつてよい。

吉野の喪は秘されていたらうに、二日後にはもう三条坊門の門へその飛報が入っていた。

「はアて？」

尊氏は、俄にほんともしなかつた。公的な通告でなく、早馬

できた謀者の謀報に過ぎない聞えであつたからだ。

「たしかな沙汰か？」

もいちど、つぶやいた彼の体のうちを何か波のようになねり抜けたものがある。目のまえにあつた泰山たいざんのような邪魔ものが崩れて一ときにべつな視野を見たような感でもあつたが、すぐあとには、われにもあらぬふるえがどうにもとまらなかつた。日ごろにあつた彼の罪悪意識と突然な虚むなしさが、波の通つたあとの砂地みたいになべつたり心の底に定着していた。

まだ暗いうちだつたが、

「錦小路殿にすぐ来いと申せ」

と、使いを走らせ、また一条今出川の高こうノ師直もろなおの家へも、

「即刻、出仕せよ」

と、家臣をやった。

ふたりが御池おいけどの殿の一ト間に顔をそろえたとき、尊氏はまだぶ間つまから出ていかなかった。しかし、三名の密談となつてからは、さして時をおかず、直義ただよしと師直まんどころとは、すぐ政所まんどころのほうへ出て行つた。

そのあと、尊氏はいちど奥へ入つて、鶴姫を見ていた。

登子とうこは、先年、男子もとうじの基氏もとうじを生み、この春には女子の鶴姫を生んでいた。初めての女の子である。尊氏はこの鶴姫が可愛くてならず、朝のいちどは、かならず乳の香のするここを覗く。

だが、この日の朝は、抱きもせず、すぐ去つた。その良人の



翳<sup>かげ</sup>に登子も気づくものはあつたが、だまつていた。訊かないのが、むしろ、武家家庭では慣<sup>なら</sup>いであつた。

鶴姫のあどけない顔までが、今朝の尊氏には、なにか哀<sup>かな</sup>しいものに見えたのだつた。それと後醍醐の死とはなんのかわりもなはいはずなのに、尊氏には不気味な同じ生きものの呼吸に見えた。

そして朝食もとらずにすぐ政<sup>まんどころ</sup>所へ出てゆくと、そこには細川<sup>あきうじ</sup>顯氏<sup>あきうじ</sup>らも出仕して、直義を中心に、異様なまでの緊張と、かくしきれない僥倖感とを、ひそひそ、ささやきあつていた。

「大御所さま。つづいての早打ちがいま入りました」

その声の弾<sup>はず</sup>みでも、師直がいおうとする所は、すぐ分つた。

「やはり虚報でないのか」

「されば崩御ほうぎよは過ぐる十六日の夜と、ただいま、確かくたる報なので」

「そうか」

と、深くうめいたままの尊氏へ、直義もまた言った。

「もう疑う余地はございません。吉野の行宮あんぐうは暗夜にともし灯を失った思いでございましょう。これにて諸国の南党も枢軸すうじくを失い、まずは天下の事も定まったといえましようか」

尊氏は、それに返辞をしなかつた。そして、まったくべつなことを、三名に言い渡した。

「今日から七日の間、幕府の雑訴ざつそ(政務)を停止ちやうじしよう。すべて、つつしんで喪もに服し、深く哀悼あいとうの意を表せ」

幕府は、その日のうちに、喪を布告した。

先帝 吉野ニ於オイテ

崩御ノ才聞エアルニ依ヨツテ

と、七日間の政務の停止を告げ、宴遊鳴物なりものは申すにおよばず、公私とも、一切を謹んで哀悼あいとうすべし、ともつけ加えた。

すると、これに大いな狼狽をしたのは、光明天皇の北朝の朝廷だった。

幕府へ気がねしていたのであろうか。——後醍醐の死にたいしでは何ら哀悼の表示を考えていなかった。で、大いにあわてたらしく、幕府に倣ならつて、朝廷もあとから急に、

ハイテウ  
廃朝ノ令

を出した。

まことに醜態だった、と「中院記」や「玉英記抄」しよも書いてい  
る。北朝の廷臣に人材のなかったことが、この一例でもおおいよ  
うなく世間に見すかされたことだったろう。

これに反して、尊氏の哀傷はむしろ、ちと度が過ぎているほど  
だった。

彼は、後醍醐のために、七々（四十九日）の忌もに服し、さらに  
その百カ日には、等持院へのぞんで、盛大な仏事をいとなんだ。  
そして、満堂の参列者のなかで「——先帝を想う」の追悼文をみ  
ずから読んだ。

文は漢文で、それも自身で書いたものである。謹嚴な辞句だし、

かなり長いものであるが、要は自分の心情を、こう吐露しているものであった。

尊氏のこんにち今日あるのは、一に先帝のおかげでした。まことに、鴻恩こうおんのほかのものではありません。

その温柔なお姿、ありがたい叡慮のお声など、なお耳の底にある想いです。攀慕はんぼの愁腸しゅうちよう、尽し難しとは、このことでしょうか。慚愧ざんきの念ねん、哀傷の感、どういつてみても、いまの私の思いはこれを筆舌ひつぜつにすることもできません……。

北朝の公卿、武臣、参列の大衆は、時々、彼の声を疑うように

眼をうごかした。

追悼の願文は、おおむね、その故人にたいして、美辞麗句たたえの頌を贈るのが世間の慣いではあるにしても、尊氏が、後醍醐の靈へむかって、こうまでいってしまうのは、敵の徳を賞揚するのあまり、自己の悪と背徳を告白しているようなものではないか。

直義の眉には、あきらかに、ちらと、気に食わぬらしい色が見えた。彼にいわせれば、おそらくこうであつたらう。

「いらざることを仰せあるものだ。しかも綿めんめん々と、衆人の中において……。兄者の持ち前だが、弱気といおうか、矛盾といおうか。正直にもほどがある」

しかし、尊氏を見れば、尊氏は自分で書いた弔ちようぶん文にひきず

りこまれているような忘我の境に立つてそれを真剣に読みつづけ  
 ていた。そして読みおわると、ほつと、凄愴せいそうな面色を醒まして、  
 先帝の靈壇に、また長いこと黙拜してしずかに退がった。

後世の水戸学者は、これを評して「彼の狡奸こうかんだ」といった。  
 また「耳を掩おおつて鈴すずを盗む類の芝居だ」と酷評した。しかり、ど  
 んな人間も、純一無垢じゆんいつむくな涙にはなりきれない。だがまた、どん  
 な人物にしろ、一片の真情もないものとはなお言いきれまい。

こんな時、巷ちまたではきまつて、物の怨靈おんりようをいいはやした。

とつぜん、雷が鳴ったといつては、冬なのに、ただごとでない  
 と言ひ、夜は夜で、

「ごらん、南の方に不気味な星が見えるよ」

と、人群れが辻に絶えない。

みな吉野の先帝の怨霊に違いないと恐れおののいているのである。一般の怨霊思想は、まだ根ぶかく、大塔ノ宮のときにも、怨霊怨霊と、言い騒がれたが、こんどもまた、公卿たちの間にさえ、保元の乱に讃岐さぬきの配所で憤死された崇徳上皇すとくの怨念や因果などが、何かにつけ想起されていたものらしく、

諸事、崇徳すとくの例ならに倣う

として、北朝の君臣までひどく気に病んでいるふうだった。そしてそれが、都の昨今を、なんともつかぬ、おもくるしい空気にしていた。



そうした或る朝のことだ。

尊氏は、臨川寺りんせんじの三会院に、夢窓国師を訪ねていた。

むかし、鎌倉にいた頃から深く帰依きえしていたあの禅師（当時、疎石そせき）で、建武元年、尊氏のあつかいで朝廷にまねかれ、後醍醐もまた弟子の礼をとっていた。つまり後醍醐にとつても尊氏にも共に、師たる夢窓国師なのだつた。

「さあもう。御発願の心は分らぬでもないが」

この朝、尊氏が折入つての申し入れに、夢窓はあまり気のないでなかつた。——征夷大將軍大納言尊氏——というゆゆしい客も、この室では、ただの一法弟にすぎなかつた。

「いかがでしょう」

尊氏はかさねて懇願した。

「ぜひに、ご承諾を得たくぞんじます。再三の使者を以ていたしましたが、おきき入れなく、為に今日は自身伺ったことなので

……」

亡き後醍醐の霊をなぐさめるために、このさい、一大寺を建<sup>こんり</sup>立<sup>ゆう</sup>したい。

それには嵐山を望む大堰川<sup>おおいがわ</sup>から太秦<sup>うずまさ</sup>のあたりまでをふくむ  
 亀山上皇の離宮のあとがある。その地域をあてて、寺名も北朝年  
 号をそのまま「曆<sup>りやく</sup>応<sup>おう</sup>禅寺」となし、国師に、その開基<sup>かいき</sup>となつ  
 てもらいたいというのが、尊氏の希望であつた。

が、夢窓は、

「寺をつくるなら、なにもわしでなくともよかろう。天台や真言の律宗がよい。……いずれ、そこもとの発願も、後醍醐の怨霊しずめがその目的であろうでな」

と、尊氏の腹を見すかしているように笑って。

「じたい、禅家では、怨霊などというものは、嬰兒の熱病ほどにも見ておらん。愚昧迷妄な沙汰とわらっておる。ゆえに怨霊鎮めの寺院の建立なら、怨霊信仰を大事にしおる天台や真言の祈祷宗教家のもとへ行っておたのみあるがよろしい」

と、今朝もひどくニベのない国師なのだつた。

尊氏はこれにむつとした。しかし、世上にはその風潮がある折なので、自分の行為もそれに類するものと思惟されてもぜひはな

い。ただ夢窓には分つてもらえるかと思つていたのだ。

自分は、後醍醐を敵としてきた覚えはない。敵としたのは、その人でなく、何としても両立しえない、その人の中のものだ。思想だった。何で、怨霊などを恐れようか。

尊氏は言った。

「自分の一大寺建こんりゆう立の願いは、決して、怨霊恐怖などから出たものではない。国師の仰せは、ちと心外にぞんぜられる」

「しからば何で、一般の暮しさえまだなかなか苦しい今日、俄にそんな願望を抱かれたのか」

「一に、先帝の高徳をしの偲び、その報恩のためと、またみずからの悔悟かいごをなぐさめんとする念も、正直、ないではありません」

「それだけかの」

と、夢窓はややものたらない顔をして。

「まこと、怨靈鎮めなどが目的でなく、正しい仏法の光揚なら、この夢窓も其許そこの建立こんりゆうを手伝わぬわけにはゆかんが」

「では、ご承諾給わるか」

「しかしわしが開基となれば、自然、その発願の趣旨もちと違つてくるかの」

と、夢窓はまず断わつて。

「法の道場に呉越ごえつはない。一視いつしみな御仏みほとけの子じや。しかるに、

そこもとたちがひきおこした戦争のために、殺された者はそのかずも知れん。死者につながる遺族らまでをあわせれば、今日に哭な

く者は幾十万か。これは一人の天子の死といえど物の数ではなく、一人の將軍の追善などでも埋まらんものじゃ。……もしそこもとの発願が、一帝の慰靈や、自己の申しわけのような小乗しょうじょうしん心にとどまらず、心から民に詫びて、尽じんみらい未来、世をよくおさめんと懺悔ざんげしての誓願せいがんであるならば、なんぼうわしもよろこんで、片棒をかつぐ気になるかもしれんが」

「おことは、身にこたえまする。もとより尊氏の心もそこにはい  
のではございません」

尊氏は帰るとさつそく朝廷に奏請して、龜山殿のあとを一大寺とする手つづきをすませ、高こうノ師直もろなおと細川和氏かざうじのふたりを、

曆りやく応おう禪ぜん寺じ造營奉行

に、任命した。

そしてまた、中原親秀や左衛門ノ尉じよう資直じようらが技師となつて、その広大な地域さだめの縄取りとなつた当日には、尊氏は、みずから臨んで、設計に立ち会い、夢窓国師の原案を練つた。

しかし、こうして発足はしたが、それはたちまち、天台の本山、叡山の大反対をよびおこした。

「時もあるうに」

と、叡山側でも、民の塗炭とたんのくるしみを、反対の理由にとつた。

「疫えき病びよう、飢饉ききん、盗賊の横行、民は飢えつかれている。みなこ

れ戦乱のせいだ。しかるに、そのうえにも、戦乱の張本人足利殿へ媚こびて、味噌すり坊主の夢窓が、禅家の権力をひろげんとし、

かつは自己宣伝のため、一大寺を造営せんなどは、言語道断だ」

ごうごうと、こう誹そしる声もあり、また、

「一禪ぜん寺でらに、曆応の年号を謳うたうなども、以てのほかな僭上だ。

ゆらい年号を寺名に冠かんする寺は、国家第一の比叡山えんりやくじ延曆寺のごとき勅願寺のほかは、ゆるさるべきものではない」

と、大岳たいがくの鐘を鳴らして、嗽訴ごうその氣勢をあげるやら、造営奉行の高ノ師直の屋敷へ押しかけて、石を投じたり、落書するなど、物情騒然のうちに年も暮れた。

で、ついに朝廷と幕府でも折れて、寺名を変更し、あらためて天龍寺とよぶことに修正して、彼らをなだめた。

やっと、寺号はここに「天龍寺」ときまつて、叡山のやつかみ



もどうにかなだめられたので、始めてその地曳式じびきしき（地鎮祭）が、  
 広大な亀山離宮跡の敷地でおこなわれた。それは、

暦応四年の七月十三日

で、このあいだ、一年半もたっていた。が、地曳式当日には、  
 勅使ものぞみ、また、

開山の夢窓国師

尊氏、直義ただよし、高ノ師直、細川和氏らの造営奉行

臨川寺の無極禅師、等持院の古先禅師こせん

そのほか檀越だんおちの公卿、武家、数千人が列し、式は盛大をきわ  
 めた。

式は、夢窓が「開山ニ就クノ弁ツ」に始まって、

「ここに尊氏、直義の発願ほつがんによつて、天龍寺を創つ——」  
の一文を読んだ。

そのの文意の中で、夢窓は、後醍醐の生涯を

——戦争の罪悪と不幸とを担になう苦悩の象徴

と見なし、また尊氏兄弟は、それへの悔悟かいごと罪ほろぼしのため  
に、ここに、恒久の平和を祈つて、人類の苦悩迷妄を救うべき一  
大寺の建こんりゆう立を思い立ったものであると、宣誓していた。

終ると。

開山の国師は、沓くつを脱ぬいではだしとなつた。そして法衣の袖を  
うしろにたくし巻いて、みずから鍬くわを把とり、竹の平籠ひらかごに二杯はいの  
土を盛る。これにならつて、尊氏直義の兄弟も、はだしになつて

その竹籠の土をかつぐ。——こうする事三たび、地曳式と、師檀の誓いとが、すんだのだった。

けれど、ほんとの起工はこれからである。

ばくだいな人力と資財と金が要<sup>い</sup>る。

「兵乱はまだやまず、人民は困窮のどん底にあるものを」

とは、叡山が攻撃理由としている第一の声だ。夢窓は、これにも一案を打ち出した。

「むかし、北条氏が建長寺の造営費をつくるために貿易船を出した例があり、かつては、後醍醐のきみも、住吉神社の造営費をまかなうため、住吉船を勅許されたことがある」

この先例をとって、尊氏へ、天龍寺船の計画をすすめた。——

つまり元げんとの交易を官營して、その利益で、一切の工事をまかなうというものだった。

翌年、初めて、第一回の天龍寺船が二艘そう海外へ出た。

ついで、翌々年も、数回にわたる交易がおこなわれ、海の彼方の文物が、俄に、都下をいろどりだした。

当然、海外との交易は、民間の市場にも活況を与え、官に入る利益も大きかったので、さしもの大工事も、いらい難なく進んで行つた。そののみか、連年、戦争と破壊の中にあつた一般のあいだには、かえつて、諸職とも稼ぎがふえ、庶民はこれを、

天龍寺景気

と、よんだりした。

事実、規模きぼの雄大なことは想像を絶していた。——亀山、嵐山、  
 大堰川おおいがわをとりいれて、——その中心に祇園精舎ぎおんしやうじやにならった  
 毘盧遮那仏びるしやなぶつの本堂をすえ、塔、楼閣、講堂、山門、七十七の寮舎、  
 八十四間の外廊けんがいろう、鐘楼、輪蔵りんぞう、池泉ちせん、橋、そのほか、景勝の  
 所には亭や書院を配するなど、これの竣工には、じつに六年の月  
 日がかかった。

しかしついにそれは落成をみた。

さつそく、木の香も新しい天龍寺の大本堂で、仏事始めが、と  
 りおこなわれた。

八月十六日。つまり後醍醐の命日だった。七回忌きであつたので  
 ある。

つづいて、くわしくいえば南朝の興国六年、北朝の貞和元年の、同月二十九日には、いよいよ待望の落慶らっけい（竣工）式が予定され、その前景気はたいへんだった。

光厳上皇の御幸、諸国の大名衆の上洛、またこの平和的盛事を見ようと、近郷近国から集まる男女など。すくなくも当日は何十万人が洛中洛外にあふれることだろうといわれて、町々には棧敷さしきが出来、野には物売り市いちが立つなど、宿も寝る場所もないだろうという評判だった。

しかし、ここにまたぞろ穏やかでなかったのは比叡山で、南都の大衆にもよびかけ、連日の三塔会議でさげんでいた。

「仏法の紊みだれは、国法の紊れ。一禅室の売ばい仏ぶつ者しや、夢窓むすゐごとき者

に、古来からの王法仏法を、思うままにさせてなろうか」

「夢窓を追放し、天龍寺を破却せよ」

「しからずんば、ごうそ嗽訴（大衆の示威運動）あるのみだ。日吉山王ひえの神輿みこしを挙あげて、朝廷へ迫ろう。奈良の興福寺大衆も、春日神かすがしんぼ木くをかついで、われらと同時に、洛内へくり出せ」

こんなさい、或る夜、天龍寺に放火しかけた一法師が捕まったなどの事件もあり、造営奉行の高こうノ師直もろなおのやしきへ、いやがらせの押しかけ面談や石の雨が降ることも毎日だった。——が、尊氏の意をたいしている師直は強硬にそれを突ツぱねつづけて来た。「天龍寺の落慶式はあくまで予定どおりに挙行する。——王法仏法とはひとり天台だけを護ることではない。——しかもこのたび

の建立こんりゆうの趣旨は、先帝の御遺徳をたたえ、億衆の民生福祉ふくしを祈念するにある。——民衆が叡山大衆の示威運動をこのむか、平和の誓願せいがんをよろこぶか、去つて、庶民の声に聞くがよい」

幕府には政策もある。

こんどのことを機会に、五山の禅宗にもいちばいの権威をもたせ、従来の叡山勢力や南都の横暴を抑えようとする一いつ石せき二に鳥ちようの狙いがそこにはないでもない。だから、彼らがいきりたつたのも、当然といえれば当然だった。

しかし朝廷では、幕府のように強くはなれず、天龍寺御幸は、落慶の翌日とし、また決して、勅願ちよくえとか勅会ちよくえの御幸ではないという証言をあたえて、やっと彼らの怒りをなだめた。



さてこうして、いよいよ当日になると、その盛儀は、要するに、天龍寺落成記念の日をかりて、じつは足利將軍幕府の創始と威望とを、あらためて天下に宣伝する一大儀式となっていたといつてもよい。

尊氏、直義の行列は、すべて、建久元年に行われた源頼朝の大仏供養を模もしている。

先駆の一番には、山名時氏がはなやかに鎧よろつた五百余騎で行き、尊氏は、八葉やうの車のすだれを高くかかげて、大納言の衣冠で坐し、くるまでい車副の勇士十六人にかこまれ、以下、二番、三番、七番と二列縦隊でつづき、直義もまた、まきえ蒔絵の細太刀、衣冠すがたで、中頃の美々しい牛車に乗って、随兵十二番までの将兵を従えていた。

晴れの盛儀になるとたれの顔もみなよそゆきになって、衆目の環視かんしがその自意識を過剰にさせる。自己の粧かい、自己の存在、他人との序列にせよ、少しでも不当な下風かふうにおかれるのは、ゆるせない心理になる。

人間の心にひそむ権力の魔魅まみのあやしい作用が、こんなところにも複雑な仮面のもとにうごくのだった。

かつての、頼朝の東大寺大仏供養のばあいでも、

——天下の大名武臣の功ある者を選集して、順序、その行装の随兵となす

と称揚され、随行の一番から十二番までの諸将は、家々の面目として序列を誇り、尊卑そんびぶんみやく分脈系図ぶんみやくにさえそれが注記された

ほどだったから、この日、天龍寺落慶式らっけいしきに、尊氏と直義の車に  
 附随して行った諸大名も、みな列をかざり身を粧まい、今日の参加  
 を、一代のほまれかのように気負きおっていた。

だから、列の順序が、ひとつ間違まちがつても、すぐ喧嘩けんかとなりかね  
 ない緊張きんじやうぶりと、また混雑こんさつで、時刻はおくれ、しかも道筋では、  
 見物の棧敷さしきやら人波ひとなみでしばしば停頓ていとんを見、ために、尊氏直義の車  
 が天龍寺についたのは夕がたになってしまい、全山の僧侶は、八  
 十四間けんの山門廊やまもんらうから、これを松明たいまつで迎えたような有様ようさまだった。

劍持けんもち役の南遠江守なんえんがしゅをうしろに、八葉ようの車から降りて入場する  
 大納言尊氏、また、副將軍直義のすがたに、人々は一せいに乱らんじ  
 声こゑ（ときの声に合わせて急テンポに楽がくを奏そうす）を発はした。

式は夜になつて、終りの舞樂ぶがくがすんだのは、子ノ刻ねこく（深夜十二時）だつた。

あくる日はまた、上皇の御幸みゆきで、式事すべて、前日のごとく、便殿べんでんで上皇から尊氏兄弟へ、親しく賜酒ししゆのことがあり、夜に入つて、還御かんぎよになつた。

それからも毎日一般の参詣人さんぎで織るが如き人出である。さらには、御池殿おいけどのの御所や錦小路殿にしんこうじどのの内でも、奉行人たちへの慰労だの諸大名の招待が連夜のように催され、洛内の灯は、建武以来初めて、昔の都にもまさる夜景をちりばめだした。

世はまさに、天龍寺の建こんりゆう立たてにかけた祈願きがんにこたえて、久遠くおんの華嚴法相けこんほつそう四海平和が地に降りてきたかのような観がある。――

けれど、眸を転じて。

都のそとをみればここ六年のあいだも、地方では、ほとんど一日とて、小さい合戦は熄やむまもなかつた。

さきに遠州灘の遭難から常陸ひたちへただよいついた北畠親房は、そのご筑波の小田城や関城に拠つて、大いに東国を攪かく乱らんしていたが、ことしついに関城も破られたため、またひそかに吉野へ歸つて来て、ちかごろでは、南朝朝廷の帷幕いばくにあり、少年天皇の後ごむら村上かみをたすけて、全国的な戦略戦争の再構想に、着々、手を打っているという聞えがある。

いわば京都の平和は、京都の中だけの小しょう康こうだった。——そ

れもしいて天龍寺造営の名で醸かもされていた表面的な景気にすぎない——。むしろ累卵るいらんの危うさに似るものだったともいえる。

それにこの年の暮には、妙な咳せきの病が大流行して、死ぬ者が多かった。そしてこの奇病は「遣唐船けんとうせんが海の外から持って帰った  
 “天龍寺風邪かぜ”だ」と世間はいつた。これなどもまたいい兆候とはみられない世態であつた。

好色こうしよく 「師直草子もろなおぞうし」

一条今出川の高こうノ師直の家は、いつのまにか、尊氏の高倉邸や、直ただよし義の三条邸に次いで、大第館だいていかんとなつていた。

附近には一族家臣らのやしきも衛星のごとく、自然、新しい一ト町さえできてきたので、

「えらい開けかたよ。やがてここもむかしの西八条（平家時代清盛のいた所）のような繁華になろうか」

と、いわれるほどで、およそ師直の門に、客の車や輿こしが絶えたことはない。それもひところは、

「ご政道はみな、錦小路殿（直義）の御可ご否かにある」

と人も知っていたので、彼の門もさびれていたが、ここ数年前からは、やはり將軍家執事のこうけ高家によらねば、公辺のらちはあかぬとあつて、政務、雑訴、幕府の内許ないきよごと事など、さまざまな訴願はみなここへもちこまれていた。そして、あらそつて、彼の鼻息びそく

に媚<sup>こ</sup>び、賄<sup>わいろ</sup>賂をはこぶなど、浅ましいばかりな繁栄なのだった。

なにしろ、朝廷はあつても、北朝には、人がない。すこし気概のある公卿は、みな

「武家の傀<sup>かい</sup>儡<sup>らい</sup>となり、武家の頤<sup>い</sup>使<sup>し</sup>に従っているには忍びぬ」

として、吉野の南朝方へ奔<sup>はし</sup>つてしまひ、あとにのこつていた公卿といえは、無能か、でなければ、底<sup>そこ</sup>冷<sup>せき</sup>めた忍<sup>しの</sup>従<sup>じゆ</sup>だけの者だった。

それに、北朝の光明天皇は、まだ二十歳をやや出たばかり。兄ぎみの光厳上皇とて、これまた、ふかく尊氏直義をおそれて、

「何<sup>ご</sup>ごとも、ただ無事なるように」

と、その日その日を、はらはら祈つておられるようなお方としかみられなかつた。



もつとも、時人じじんの言葉には、こんな呖ささやきまであつた。

「およそ、光明天皇ほど、お倅せなきみはあるまい。いちどの戦争も経験せずに、將軍家から天皇の位を受けたのだから——」と。北朝の權威を、人がどの程度に見ていたかは、この一事でもおよそ分かる。

虚位きよゐは、どうしても、虚位でしかない。

尊氏もこれまでは、「朝敵」の名をはばかり、本心、皇室には大事をとり、また形式的にも、自分のたてた天皇をうやまつてはいたが、しだいに、その形式すらも公卿の無能と共に、持てあましていた。そして今では、無精卵を抱いて雛ひなを待つひなの愚をすて、はつきりと、前幕府の北条氏以上な武断政体へと、かたむき

だしていたのだった。

しかも、その北条氏はなお、公卿に公卿威張りの虚栄と虚位官職をあたえていた。しかし尊氏は、それもほとんど武家の手にとつてしまった。

——すなわち自身は、三位ノ大納言征夷大將軍となり、直義を副將軍従四位となし、一族四十三人それぞれに官位をさずけ、一切の政治的中心力を、新幕府のうちにおいた。

が、尊氏はまだどこか、生来の大ざっぱなふうでそれをやっている。——しかるに、この人の腹中にまで入つて万端をきりまわしていた將軍家執事の師直だった。がぜん彼の門に、媚態びたいの客や贈賄ぞうわいの使いが群れをなしたのは、奇異な現象でも何でもない。

贈賄の寄る門には、その贈品に主人の好癖があらわれる。先の好まぬ物は運んでも意味がない。贈賄者はみな腐心ふしんする。

なによりも正味の金がおすきらしいと分れば、金を。

書画骨董がすきと知ればあらそつて宋元そげんの名品だの、雨過天晴うかてんせいの佳品やらを。

また、或る時代に時めいた一宰相は、

「鶉うずらがおすき」

という評判を得、邸内はまたたくうちに、天下の稀種きしゆを入れた鶉うずら籠かごやら黄金や銀しろがねの鳥籠で足のふみばもなくなつたなどという話もある。

だが、師直はやや違う。すくなくも尊氏から、

## 「この男」

と、信じられているほどなものはあつた。何を持って行つても、あらまはそれをしりぞけて受けつけなかつた。しいて押しつけてみたところで彼には「置いて行き損」でしかないと分つて、その点、

「高こうの殿どのは、きつい御ご潔けつ癖ぺきだの。ニガ手な殿よ」

という定評が、定評となつていた。尊氏もこれは知つている。家宰かさいとしての師直の縦横な才腕をのぞいても、そこだけは高く彼を買つている所以ゆえんだつた。

けれどこの師直にも「好き」はあつた。女色である。「われにはゆるせ——」で、彼はこれを隠そうとしていない。

ゆらい彼は醜男ぶおとこだった。木像蟹の名さえあつたほどである。女にもてたことのない醜男の胸中には、若年から人知れぬ鬱積うつせきがあるらしく、師直の胸中にも多年「……時をえたら」とする念がひそんでいた。時をえたら俺でも女にもててみせるぞ、という女への復讐にも似た悲壮なる欲念だった。そして今日こんにちの彼は、その時に会し、その権勢をもち、また多少の閑かんをえていた。

そこでこの小康しょうこう時代に、彼は露骨にあたりの女界を観て、思うさまな女色をなめずり出した。それも下姪げいんは問題でない。彼が渴かわいていたのは、いわゆる上姪の女性で、貴種でなければならなかった。

時しも、といつてよい。

どんな深窓の女性も、彼の目からみればみな手のとどく所にあつた。ちまたには、名ある亡家の息女や後家がたつきにこまつてただよいあふれている状だつたし、以前は、やんごとなき宮すじの姫が六条の妓家ぎかに養われていたり、また、元は院ノ少将なにかしの想おもい妾ものが、今は夜ごと武者の酌しやくに出て、無残に搔かき撈むしられてゐるなどの例も、世間ばなしにはもう珍しくもない近頃のことでもあつた。

「……ときに、御執事ごしつじ」

と、もう抜け目のない今出川通いの客は、彼の「好き」はそこと見つけて、

「世にもあわれな身の上の女によしやう性せうがここにありますかなあ。し

かも容色は絶世の美、高貴の出で、気品はあり、申し分はございません。ひとつ、助けてやるおつもりでお世話なされてみるお心はございませぬか」

などといういろいろもちかけてくる。

が、師直は、これも贈賄の代物だな、と知るとなかなかその手にも乗らなかつた。すでに彼は彼の實力で、思うさま幾人でも、欲しい女は手に入れており、近来はやや飽満気味なところでもあつた。

なぜか師直といえ、古来、好色漢の代名詞みたい、すぐ連想されがちである。

われにはゆるせ――

とその好色を隠そうともしなかつたらしいこと、またもつぱら、その野性で醜ぶおとこ男おとこな身をもつて、高貴の女性を選び漁あさつたこと、さらには、尊氏に代つて、軍政の両方面にわたり、憎まれがちな敵かたきやく役やくはみなひきうけていたなどに起因するのではあるまいか。近ごろ、彼が手にいれて、昼夜、愛あい寵ちよう愛あい撫ぶ、措おくところを知らない二条家の姫ぎみなどにも、彼のやりくちはよく出ている。その佳人は、二条前さきノ閨白せきの妹むすめだった。どこで見たのか、師直は恋をした。いや恋とはいえない。猛獸の食欲ともさして違うものではなかつた。

「ぜひほしい。正妻はある身だが、すでに老妻。正室の待遇をあたえて大事にしよう」



率直に、申し入れた。

が、二条家では当然、えんきよく婉曲にことわった。

いわゆるせつかんけ撰関家につらなる名門だ。その深窓の姫はいつの世でもによごじゆだい女御入内の候補者であり、時をえればちゆうぐう中宮の位に即つく。……いかに世とはいえ、東国のあらえびす、尊氏の家宰かさい、いわば陪臣ではないか。

世間ていからも、二条家では、あやまるしかなかつたろう。よろしい、と師直はそれに怒るふりでもなかつた。

「そうか、なるほど公卿は見得坊なものだつたな。二条家の体面そこを損ねぬようにすればよいのであろう」

独り合点がてんにうなずいた。——前年、甥おいの師秋もろあきがやってのけた

或る前例が、彼には思い出されていたのである。

その師秋は、菊亭殿の息女に目をつけて、言いよっていたが、備前佐々木党の信胤のぶたねもまた、同じ美果を狙っていた。で、菊亭殿ではそれを理由にうまく断わった。——すると師秋は一夜、菊亭家へ忍び入り、うむをいわせず、女を攫さらつて来てしまった。——師直は、これを聞いている。甥のやったその手に限ると、兵をやつて、姫を奪い、さる女院の古館ふるやかたへ匿かくまつて、夜ごと夜ごと、通い初めていたのだった。

ところが、この女性には、前々からの愛人があった。

師直は感づいて、大いに嫉妬し、女を責めただして見たところ、相手は大炊おおいノ大納言冬信とわかった。

ここに醜男ぶおとこの彼の面目がある。

「大炊の家を焼き払え！」

師直のいいつけで、若党ばら一群の者が、一夜、大炊の邸に火をつけて焼き払ってしまった。そのさい、冬信の七歳の娘が焼け死んだ。それらもまた、話題にからんで、

「いやもう、女のこととなるとおそろしい御執事殿だ」

と、京中の評判になった。

が、師直は、評判など気にもしない。そのご女は今出川の館に入れて、側室のひとりにおさめてしまった。二条家でも泣き寝入りのほかはない。

彼のこんな行状はすぐ尊氏にも聞えていたろう。しかし師直は、

自己の実務的才腕と誠意にかけて、主君の信頼には、ぜったい自信をもっていた。だから彼の好色行状もすこぶる派手で、それがその道だけの達人みたいに喧伝された理由であろう。

彼と、塩冶判官高貞の妻との艶話なども、ひどく市井しせいに喧伝されたものである。

高貞の妻室が、当時、著名な美人であつたことが、師直の好色癖にむすびつけられ、好箇な好色談となつていったものらしい。

わさた早田ノ宮の妹で、こきでん弘徽殿の西にしのだい台といわれた佳人かじんがある。

後醍醐天皇が、隠岐から凱旋がいせんされたさいは、名和長年をはじめ、勲功の臣には、かつてそれぞれ恩賞が下されたが、出雲の守護、塩冶高貞えんやへは、宮中のその一美人を賜わつた。

これが高貞の妻である。

いつ見たのか。師直はこの人妻に懸想けそうして、さまざま言い寄つてみたが、いつも柳に風とうけ流され、煩悩ぼんのうもんもん悶々もんもんと、やるかたもない想いでいた。或る折などは、塩冶しほじの館やかたの客となつて、西にしのしののだい台だいが湯殿にあるのを知り、覗き見までやつたという。

また、彼女の歡心をえんためには、兼好法師に恋文の代筆をさせて、彼女の袂へ忍ばすなどの腐心ふしんまでこころみたが、ついには彼女の良人高貞を亡き者とするに如しかずと考え、將軍家に讒ざんして、討手うつけを向け、

「西にしののだい台だいをとらえて来い」

と、命じたとある。

しかし高貞は、寸前に、一族郎党をひきつれて、自領の出雲へ落ちのびた。

ところが途中、幕府の討手に追いつかれて、西台は、播磨のほとりで自害し、また高貞も、失望の極、自刃してしまったというのである。

これは「太平記」だけにみえる師直ひぼう誹謗の一話で他書にはない。どうも罪なさくい作為をしたもので、つまりこれが後世の「忠臣蔵」の中に戯作化され、いよいよ好色漢師直の名を、百代に高からしめる所以ゆえんとなったものである。

すべて、師直にとって濡れ衣ぎぬぬであることは、どこからでも指摘できる。

けれど半分は事実でもあろう。——塩冶高貞えんやは、一たん後醍醐に忠仕し、後に武家方へ降参していた大名なので、そのごも、ひそかには吉野朝廷の方へ心を通わせていたあとがある。

真相は、それが露見したので、俄に、出雲へ帰国したのだった。その証拠には、彼の出奔を幕府へ密告した者は、彼の弟の塩冶四郎左衛門だった。また討手も、幕将の山名時氏と、桃井直常とが追撃して行つたのだ。ほとんど色事には関係がない。

ただ、ここでも考えさせられることは、新田義貞における勾こうと当うノ内侍ないしのように、高貞も宮中の女子を恩賞にもらつていたことである。女性を一種の物品や動産のように見なしている風習が、宮廷だけでなく一般にもあつたことがいなまねぬ。

とすれば、女性自体も、自体の貞操を、どんなに観ていたか。

——元来、女に飢えていた奔放な野獣武士の本能と相俟つて、そこには想像外な性社会の醜醇が都の夜の底をびらんさせていたのではあるまいか。

わけて、好色者の師直であつてみれば、いや師直ならずともである。おそらくここ小康時代の平和をむさぼり偷んでいた武家権門の輩は、勝者の誇りを駆つて、恣に、京女の撫で切りをやつていたかとも思われる。

その罪と、岡やきの羨望とは、みな師直がかぶつてしまつた形であり、師直にはまだまだいろんな濡れ衣や艶話も多い。

中でもひどいのは「塵塚物語」という本である。



それによると。——近ごろ或る武士が秘蔵しているおかしき草子を見せてくれたが、それはみな師直が一生に犯した女人との秘戯を書いたものであった。いちいち名まで記してあるが、さすが品は言いがたく著し難しとのみしてある。しかし、これらは師直一代の淫事としては十のものなら二、三に過ぎまい。師直の破倫はりん、淫欲ときては、なかなかこんな程度のものではなかった。彼がいかに乱淫無頼ぶらひな男であるかは、次の一例でも分ろうと、書いているのだ。

高家こうけには、特命をもっている老女がいる。

老女は師直の命で、ひまあるごとに、家臣のやしきを訪れ、眉み目めよい女房があると、ひそかにこれを師直へ耳打ちしておく。

事を設けて、師直はそれらの妻女をひとまとめに今出川の邸に呼ぶ。——主命、何事ならんかと、彼女らの良人は化粧も念入りに着飾らせて出してやる。

しかるところ、それらの女房は、家に帰ってきてても、口をつぐんで、なんらその日のお招きのもようについては、語るところがほとんど少ない。

事、再々に及ぶので、亭主どもがへんに思つて、だんだんと探つてみるに、当日、主君の師直は、女房連があゆむ細殿れんの簾しなの蔭れんにいて、つぶさに彼女らの品さだめを味わい、やがて遊宴のあいだには、お名ざしで、別殿の奥へ引き抜いてゆく。はなはだしいときは、それが三名にもおよぶことすらある、というてんまつが

やつこのことで判明した。

やれ、こいつめが。

なんで今日まで黙りおった。

いかに、ご主君たりといえ。

さても怪けしからぬ沙汰かな。さて、どうする。女房めを追い出

すか。俺どもの方から主家を追ン出るか。

亭主どもは、いきまいて、寄り寄り、亭主会議をひらいたが、  
 扶持ふち取りのかなしき、女房未練みれん、かつは時めく高家の門こうけを、われ  
 から追ン出る勇氣もなく、ついつい泣き寝入りに終ったというの  
 である。

「塵塚物語ちりづか」は、史書でもなければ風俗書でもない。もちろん

嘘談は知れきつてゐるが、しかしこのうちにも、いかに当時の女子が物品視されているかがうかがわれる。さらには、師直の婦女掠奪にむすびつけて、楠木正行との情話に仕立てあげてある「弁べんノ内侍ないし」のことなどもまた、話は優雅にできているが、それも女子を一個の品とみている時代の女性観を知る以外には、さしての価値もないものといつていい。

なにしろ師直の不人望たるや、かくの如しであつた。けれど彼も時代の一人物だつたにはちがいない。なぜならば、とかくの不評判もあり、巷ちまたでは、

夜ごと夜ごとの忍び興ごし

執事しつじの殿の宮めぐり

かしこごへい  
 畏む御幣ふとやかに

手向けを受けぬ神もなし

と、彼の女おんながよ通いが、童謡にまで歌われているのを知つても、

いぜん尊氏が、將軍家執事の権を、彼にまかせていたのでそれ  
 は知れる。彼にかわるほどな才幹さいかんは、他になかつたものである  
 う。

むしろ、尊氏から見て、警戒されていたのは、勝者の立場に驕おご  
 り、旧文化や貴族を侮辱することに惨酷なよろこびすら持つてい  
 るほかの婆娑羅ばさら大名や武士どもではなかつたらうか。師直の肉親、  
もろやす  
 師泰などというのもいる。

毒どくの爛漫らんまん

強いが強くないかだけ長いこと人間を評価してきた。乱世の出世番付はそれを今日に結果して来ている。だから新幕府下の権勢家でも、かいてもく無学なのが少なくなかった。山名時氏などは目に一丁字もなかったという。そうした中では、師直は、何しろ群を抜いていた。

彼は、將軍家執事職として恥かしくないほどの学識をもっている。公卿との交渉にもひけめはとらない。その風貌にも似ひつつせせ筆蹟きは美しい。歌もよく詠よむ。彼の作歌は「風雅和歌集」にまで選ばれている。

だが、弟の高こうノ師もろやす泰やすとなると、だいぶ品がちがう。

これも当世流行の婆娑羅ばさらがた型の人物のひとりではあるが、師直の婆娑羅、道誉の婆娑羅、個性さまざまな婆娑羅ぶりの中で、師泰ときては、ひどく単純な——いわば伝統無視の露骨な快樂主義者といったような男だった。

一、二の例でいえば。

前さきノ宰相すがわらざいとう菅原いとう在登いとうの山莊が東山の好位置にあつた。

「下屋敷にいい。あの家を接收しろ」

まもなく、一片の通達が菅原家へとどいたのみで、はや土木どぼくの工が始められていた。

在登は大いに怨んだ。園内には道真みちざねいらいの菅原家代々の墓

所がある。五輪、白骨まで掘りちらされ、惨状、目もあてられぬ暴状と聞いたからである。

「なに、おれを恨んでいるというのか」

師泰はかえって怒った。「しよツ曳いて来い」と郎党をやったのである。すると郎党どもは、在登が命に応じなかつたといつて、在登を首にして帰つて来た。

また、同じ工事場でのこと。

真夏のさかり、四条大納言隆たかかげ蔭かげの青侍が二人、近くを通りかけて、木蔭から炎天下の土木の工を見ていたが、つい実感に余つてか、しやべりしやべり立ち去りかけた。

「やれやれ、下人げにんどももかわいそうに。ああ無慈悲なムチに追い



使われてはたまるまい」

「思いやりのカケラも武士にはないのだ。公卿の世なら何ぼなんでも、あんな苦役はさせておくまいて」

すると、これを小耳にした工事奉行が大いに立腹して、その青侍二人を部下につかまえさせて衣服をぬがせ、代りに人夫の仕事着物をムリにきせて、

「さあ、働け。きさまらに思いやりがあるなら、人夫に手伝って、思いやりを見せてやれ」

と、終日、土かつぎや石運びにこき使つて、たそがれ、追ッ放して帰したという。

さらにこんなこともある。

天王寺の常明燈御料の田を、師泰は自己の領に加えてしまった。ために油の料にも事を欠いて天王寺は貧窮をきわめた。——のみならず師泰は、天王寺塔の九輪の宝鈴ほうれいを一つ鑄いつぶして、ころみに酒の罐子かんす（ちろり）に造らせてみるに、玲々れいれいたる金味かなあじがあり、これで爛かんをすると何ともいえぬ芳味があつた。

上ならを做う下で、われもわれもと、ほかの武士どもがまたこれを真似、またたくうちに、河内和泉の古寺の塔は、塔の簷花さんかたる飾りを失い、宝鈴ほうれいはみんな武士の酒瓶ちろりに化けてしまったという。かつてのもの。

文化、風習、宗教、公家貴族のもつていたすべてのもの。

武士たちはそれへの侮辱と蹂躪じゅうりんを一種の快とし、随所では

しいままを振舞った。ひとり前述の高ノ師泰だけにかぎっていたわけではない。

近来、ひんぴんと、宮中に盗難があつた。朝、皇居の深殿に土足のあとが残っていたり、内侍ノ局の衣裳がごっそり失くなつていたりする。

そこで幕府が探訪のすえ、ひとりの下手人を召捕えた。

ところが、これが歴乎れつきたる武家の子飼こいだった。小俣右衛門ノ尉じょうの家来で、御所の門衛と狎なれ合いでの仕業しわざとわかり、即日、首をはねられた。

だいがくのかみ

大学頭 紀ノ行親の家にも、近ごろ覆面の武士三名が押入つ

た。妻女を暴行しようとしたのに行親は手むかつて、斬り殺され

た。——儒家じゆかの良師範といわれていた行親だけにその死はいたく惜しまれた。

同様な目にあつた公卿の家は枚まい拳きよにいとまがない。これらの下手人はもちろん武士でも下級武士の輩だった。主人がやっていることを見て、自分らもやってみたくなるのであろう。だが、人はみな勝者の府の実力者だ。何を公々然とやってもつかまらない。だが彼らはまま打首になった。

公卿侮辱に出るだけでなく、武士たちはしばしば宗教へも擲や揄ゆと驕きよう慢まんを故意にした。梶とが尾のおの僧坊へ放火した乱暴者があつたのも最近のことで、貴人の車を見ても、礼をしないなどは、もう通り相場になっている。

そのうちに、はしなく、ここに一椿事ちんじがおこつた。

九月六日のことである。

光厳上皇はその日、持明院の八講会からのお還りの途中で、五条樋口の東ノ洞院とういんにさしかかられた頃は、はや日も暮れて、道は暗かつた。

すると、一団十数騎の武士が先の方から駈けて来た。どこかの馬場で笠懸かさがけの競技のすえ、芝居酒に時をうつし、洛内の灯をみてあてに急ぎ帰つて来たものらしく、上皇の御車と知つても、駒を止めそうにもしない。

そこで、先駆の隨身たちが、

「下馬せよ！」

「無礼すな」

と、大声で叱ツた。

一団の影は立ちよどんだ。そのうちには、土岐ノ弾正少とき だんじょうしょうひ彌つ頼よりとお遠とほ、二階堂下野ノ判官行春などという者がいた。どつちも歴々な武家だった。

「あつ」

行春は、反射的に馬を下りてひざまずいたが、頼遠のほうは大いに酔っていた。のみならず、師直や道誉とならんで、洛中の三婆娑羅ばさらといわれていた男だけに、かえつて、車副くるまぞいの人々へ、こう威たけ高に呶喝どかつした。

「道は暗いが目はあるだろう。おれは土岐ノ頼遠だ。この頼遠に

下馬せよとは、何奴がいうのか」

「やあ、推参すいさんな。これは院の御車みくるま、院の御幸ごこうなるぞ」

「なに、院だと。院か犬か。犬ならば追物射おいものいの的まとでしかない。一つ射てくれようか」

とたんに、頼遠のたずさえていた笠懸射かさかけいの弓が、発矢はつしと唸うなるものを放った。矢は御車の廂ひさしに立った。——ひやと隨身たちが道をよけたすきに、「わはははは」「あはははは」と一団は風のごとく駈け去ってしまった。

武士の乱暴沙汰も極きわまれりというものである。こんなふうでは、上皇の御外出もめつたにできぬと、院の西園寺大納言公重きんしげは、そのご幕府へきびしく注意を求めていた。

すでに事件は、直ただよし義の耳にも入っていた。捨ておかれぬことと、内々、処置を考えていたところだったので、

「すぐ兵をやつて、土岐、二階堂の両名を彼らの家からから搦め捕とつて来い」

となつた。

ところが、二階堂行春はやしきにいたが、土岐の弾だんじょう正より頼

お遠のほうは、はや居ない。危険を感じて、自国の美濃へ逃げ帰

つてしまつたのである。のみならず国元では兵を挙げんとする風聞さえあつたので、直義は、頼遠の兄頼清へ御教書みぎようしょを送つて

「一族の運命を過るな」と、それに達し、

「頼遠を出せ。頼遠一人だに出兵して来れば相すむものを」



と、諭告ゆこくした。

おそらく一族兄弟に諭されたあげくであろう。十一月の末、頼遠は軍兵をつれて堂々と上京してきた。名だたる三婆娑羅の一人といわれるだけあつてさすが太々ふてぶてしく、一戦も辞せずのつらごまえであり、幕府も大事をとつてか、この日には何らの沙汰もしていない。しかし充分不気味な空気は頼遠に感知される。そこで頼遠ものがれ難きを知ったか。あくる朝、とつぜん、嵯峨の夢窓国師のもとへ出かけて行つた。詫びのあつかいを頼みに行つたものである。

と、まもなく。

幕兵千余騎が殺到して寺坊をとりかこんだ。——鼓噪コサウ、終日二

及ぶ（中院記）——とあるから頼遠はなかなか出て来なかつたものだろう。しかし夢窓が彼を庇うはずもない。やがてのこと、内から出て来たところを搦め捕られた。そして十二月二日、壬生の六角で、斬罪に処せられた。

それいぜんに、共犯の二階堂行春のほうは、讃岐へ流されていて、これで院（上皇）を犬と呼んだり矢を射るなどの大不敬を酔興の余にやった武士どもの御車暴行事件はひとまずかたがついたようなものだった。

だが、これらの下剋上を急にし出した原因の一つには、北朝に仕えていた公卿の卑屈ということもある。

伝来の荘園（領地）は細り、宮廷はさびれ、かねもなければ

実力も欠いてきたそれいぜんに、自分たちの心からしておちぶれていた。武士におもねる余りにである。——彼らは本来の優雅みやびを捨て、立ち歩きから烏帽子えぼしの振りまで武家風をまね、しいて馴ねぬ坂ばんどう東言葉をつかい、いわば「公卿ニモ非アラズ、武家ニモ似ヌ」妙なものになってしまった。

そんな時じせい世粧せそうである。庶民の皮肉には、時に秀逸なものがあつた。

「オヤ、向うからやって来るのは、蛙かえるかね？ 河鹿かしかかね？」

自体、こうまでの風潮とすれば、武士の驕慢は、公卿にも一半の罪があつたといえよう。だから権勢第一の師もろなお直ちかが病むとでも聞きえると、今出川界かいわい隈かいは見舞みまひいの公卿輿くげんしや牛車で埋うまつたとい

う。

事実、師直は、天龍寺落慶らっけいの翌年の夏、二カ月ほど寝こんで出仕しゅっしも欠いた。病名は「蚊触かぶれ」だとある。蚊触とはつまり発疹はっしんのことらしい。「園太曆えんたいりやく」では瘡疾そうしつに罹かかつたのだと書いている。

病後の秋であつた。師直は一夕いつせき、佐女牛さめうしの佐々木道誉ささきみちのぶの招きでその邸へおもむいた。

——何の用意もないが、ご病後の鬱散うつさんじに、という軽い意味で、誘いには、御舎弟も共にとあつたが、その師泰もろやすは、「いや道誉みちのぶの客となるのは苦手にくがてだ。鬪茶とうちやか、立花りっか（生け花）か。やれ香道こうどうの、連歌れんがのとくる。まずは兄上おひとりで」

と、逃げてしまった。

師直も夜は例の女の許への「宮廻り」がいそがしい。だからたいして気もむいていないが、道誉には妙な魅力にひかれていた。彼ほど諸家の裏面に通じている男はない。執事の自分ですら知ってないような機密まで彼の口からはまま聞かされる。かたがた、何かのばあいのためにも自家薬籠中の物にしておかねばならぬ人間と、思うのだった。

「ひとくちに、婆婆羅婆婆羅とよくいうが、這奴はそれだけのものではない」

今も夕風の巷ちまたを行く輿こしのうちで、師直は、道誉のつらだましいにつれて、かつての一事事件などを思い出していた。

それはもうだいぶ前。——天龍寺造営が着手される前年のことだつたが。

秋は十月の頃で紅葉のさかりだつた。例の、人目を驚かすばかりな風流行装いでたちで、小鷹狩りこたかがの帰りを、佐々木道誉、秀綱の父子が、従者大勢と共に東山の妙法院のそとを通りかけた。

みな酔つていたにちがいあるまい。でなければ酔狂すぎる。供わかとうばらの若党輩の数名が、その築土つじじにのぼつて南庭のみごとな紅葉を折りちらした。

当然、坊官はだまつていない。列を追ツかけて来て「——狼ろうぜ藉者きものを渡せ」と罵り「ここをどこと思う。もつたいなくも御連ごれ枝んしの宮、すなわち天台座主ざすの亮りょう性法親王のお住居なるを」と、

その乱暴をたしなめた。

こう聞くと、道誉以下、武士どもはかえつてよけいからか擲な擲らつてみ  
たくなるらしい。坊官たちをなぐ撲りつけてさかんにちようろう嘲弄した。  
すると寺門の侍や法師らはさらにその数を挙げて加勢に出て来た。  
ために大乱闘となり、はては妙法院御所へ無謀な焼討ちを仕かけ  
てしまった。

——ルキダイモンゼキ累代門跡ノ重宝モ、コノ夜、一クワイジン灰クワイジン燼クワイジンニ帰キシタリ、  
と公卿日記はみな痛記している。

翌年四月。

道誉と秀綱は、このことでるさい流罪るさいになった。

処罰は叡山と幕府のあいだで長いふんきゆう紛糾ふんきゆうを見、尊氏としては、

道譽をかばい抜いたのだが、山門大衆の嗾訴ごうそに押されて、ついに流罪のほかなくなつたものだつた。

ところが。

いよいよ道譽が配流はいりゅうされて行く日を見れば、その行装など、日ごろの物見遊山とも変るところはなく、従者三百騎は、例の伊達だてすがたに猿皮の鞆うつつぼをかけたたり、鶯籠うぐいすかごやら酒肴しゅこうの重箱じゅうばこをたずさえたりして、宿々しゆくしゆくのやどに着けば、ところの傾城けいせいを総揚げにして騒ぐなど、人もなげな大行樂で立つて行つた。

こうして、ほんとの配流地、出羽へは行かずじまいで、しばらくは上総に遊んでいたらしい。そして一兩年のうちにもまた、いつのまにか都へ歸つて居、依然、足利將軍の下に重きをなしていた



道誉であつた。——このような魔術的手腕のみは、ほとほと自分にも真似ができぬものと、師直も彼には一いちもく目おいていた。

それのみでない。師直は自分の不人望を知っている。

だが一般に、道誉は自分ほどには不評でない。むしろ一部には好感さえもたれている。配流はいりゅうから帰つた後も、以前にまさる華奢かしや風流を振舞っているが、

「底知れぬ悪党よ」

とは、誰もいわないのだ。また、彼の豪勢な生活の財源がどこから出てくるのかなども怪しんでみる者はない。

師直は、ひそかに思う。

「——天龍寺船の交易物こうえきもつのさばきは彼の手にまかされている。

これは大きい。そのほかの収入は博奕ぼくちのハネだろう。近ごろ大流あたら行ちやよりあいの茶寄合とうちや、つまり鬪茶とうちや、あれは茶の銘めいを飲みわけて、中あたつた外はずれたと、一夜に数千貫のかねやら賭物かけものをうごかす博奕だ。

——そんな寄合やら、立花りっか、聞香ぶんこう、田楽でんがくの会などが、彼の邸ほくらでは月々何回も開かれているという。……遊び仲間はおなじ放ほうら埒つ仲間を決して悪くはいわぬものだ」

いつか道は六条らしい。

彼の輿こしは、ほどなく佐女牛さめうしの宏壯な邸内へ入っていた。師直は、みずみずと打水された前栽せんざいを見、家臣一同の色代しきたい（出迎え）をうけ、のっしのっしと、奥殿へ通つて行つた。

意外だった。

通されたのは一亭の釣つり殿どので、かたのごとく酒肴しゅこは出たが、道誉好みの茶を強しいるでもなく立花りつか自慢まや田楽舞でんがくまいの馳走ちしゆでもないらしい。いつまでもそこはあるじの道誉とただ二人だけの秋の静夜だった。

「たまには、こんな夜もおよろしかろうと存じましてな」  
道誉は言った。

あいかわらずこの若入道なまめは艶あまかしい。あまり女によしよく色の外聞あひかは聞かぬが、さぞ女にもてることであろうと、師直は身にひきくらべて羨望せんぼうを禁じえない。いずれ唐物からものであろうが、師直すら知らないような綺麗きれいな織物の袖なし羽織はねおりを、桔梗ききよう梗えいぼかしの白綾しろあやの上へ、すずやかに羽織はねおりっていた。

「いや、まことに」

師直も苦笑した。

「こよい初めて、沁しみ々しみと、虫の音ねの秋を、耳の底に覚えたわえ。何せい、昼は、やれ朝廷の、やれ政まんどころ所の、また將軍家直々のお召のと、いやどうも執事職とは忙しいものでの」

「それに、夜は夜ごとの宮廻りでしょう。よくお体がおつづきになる」

「わはははは」と、師直はてれかくしな豪笑を発して、大きな蜘蛛くが糸からすべり落ちたようにその手を振った。「痛いことは仰せられな。おたがいさまだ。それ、人には七癖ななくせとか。ひと癖は執事にもゆるされい」

「ちと冗談がすぎましたかな。御執事は正直でいらせられる」

「そうだ。御辺はずるい」

「これはさっそくな御返報。いかにも道誉にはそういわれても仕方がないところがある。しかし御執事、それがしは陽性のつもりでいます。ご存知のいっけつ一穴のむじな貉のごとき陰性な者とは御同視なきように」

「貉むじな？」

「さればあれは仲のよい貉のような者たちでしょうが」

「とは、誰をいうのか」

「なんの御執事にはとうにおわかりになっっているはずだ」

「いや、存ぜぬ。一穴の貉とは誰をさして？」

「では、まったく御存知ないのですか」

そこで道誉は半身をのり出して肩をおとした。誠意の見せかたもこの男がすると妙に相手の心をぬんめりと捉とらえて離さない。

はてさて。

と、まず彼はいう。

——御執事ほどな方でも、ご自身の周囲にはかえつてお晦くらいものともみえる。すでに“打倒師直”をもくろむ一派がみすみす画策の秘をえがいているのに、御本人が何も知っていないとは、どうも意外というしかない。

このさいなれば、あえて齒はに衣着きぬきせず、実じつを申しあげてしまうならば。

師直横暴、師直驕慢、すべてそれらの悪声は、御権勢をおそれるあまり、あなたの失脚をはか図る者が為ひぼうにしている誹謗で、一部の反感にすぎぬなどと、なかなか見くびつてよいものではありませんまい。

じたい御政令はいま、將軍家（尊氏）と錦小路殿（直義）との二途にとから出て、いわゆる二頭政治のかっこう恰好です。

そこで御執事には、ぜひなく、それを一本に締めくくる。が、結果では御教書みぎようしょも下くだしづみ文ぶんも恩賞から雑訴までも、みな御一手で可否を決しているようなかたちになる。そして勢い御門へのみ、公卿武士のごきげんとりが集まってゆく。自然、これを他家からみれば、白眼視ともなりましょう。

為にいいいよ、師直ざんぼう讒ざんぼう謗ぼうが、ささやかれ出す。

じたい、関白家の妹いもとぎみ君ぎみを、室に入れるなども、師直に大野

心があるからだ。おそらく彼は他日、その勢威をか駆かツて、錦小路殿をも蹴おとし、副將軍の座をうかがっているのではないか。

いやいや、もつと大それた腹だろう。高家こうけの或る縁辺えんぺんが、知行を失つて、頼み込みにいったところ、師直はその者へ、こう語つたという噂もある。

「——知行はいくらでも困る者には分けてやりたいが、都には朝廷があつて、諸国の領地も数多あまたその御料に塞ふさがれてさいる。われらにしても、内裏の院のいんというものがあるため、道で会つてもいちいち馬から降りねばならぬ。まことにやつかい極まるものだ。



どうしても国に王というものがなくてならないなら、木か金で造つて、生きている上皇や天皇などはどこかへ流し捨ててしまったらよいのだが」と。

よもや、こんな暴言を、御執事が放談なされるはずはない。為にする者の悪質な捏造談ねつぞうだんではありましよう。けれど師直がそう言つたと、まことしやかに伝えられ、師直の暴慢不遜、すえも思いやられると、その蔭口には、聞くにたえぬものがある。

いまにして、御執事の方こそ、御警戒に心せねば、後に、臍ほぞを噛んでもおよばぬのではあるまいか。ひとごとながら——と、道誉はここで急にふつと口をつぐんだ。語尾は、嘆声を曳いていた。

「……………」

師直の眼はそういう道誉の面をらんと見すえたまま一語も聞きのがしていなかった。どす<sup>あか</sup>緒い<sup>にし</sup>滲みを巨大な鼻の辺に吹き出して、しかもなおいつまでも黙っていた。ぶすつと、言い出したのは間をおいてからだった。

「むむ、およその見当はついたが。……しかし道誉どの。そこま  
で申しながらなぜいわんのだ。相手の名を。相手をよ」

「その主謀は」

と、口をにごしながら道誉は言った。

「僧の<sup>みょうきつ</sup>妙吉、あれにご油断なされますな」

「妙吉？」

師直は、笑いかけた。

「ちかごろ錦小路殿の御帰依ごきえで、一条戻り橋に新寺を建こんりゆう立りゆうしたあの一僧か。あんな禅坊主ならとるにもたらん」

「が、副將軍に深くとりいつているなかなかな奴。そのうえ、その妙吉に箔をつけて、持仏じぶつのごとく高家讒訴こうけざんその脇役をつとめている御一族が二家もある。あなどれません」

二家とは、ほかならぬ上杉伊豆守重能しげよし、畠山大蔵少輔直宗。

それと僧妙吉とが結託して、打倒高家こうけの要を、事あるごとに直義へ使喚しそくし、直義もまた、それに傾いていると、道誉はすべてを吐いたように話した。

この晩――

師直が佐女牛を辞したのは深更だった。それから道誉との  
なしはいろいろあつたとみえる。とまれ彼の病後をなぐさめる一  
夕の招きとはこれが主眼であつたらしい。

いらい師直の夜の“宮廻り”はだいぶ減つた。

木像蟹がにの本来の眼まなこは、暗黙のうちに、自己警戒を油断なくしだ  
していた。政務、嚴令、いよいよ執事の職しよくへい柄を把つてうごか  
ぬものがみえる。

直義が自分にこころよくないことは前々から察知されていたこ  
とだ。しかし直義に気がねしていたら、尊氏の意志や命はおこな  
われない。

また上杉や畠山が、直義へおもねって、自分を図ろうとするの

も、その気もちは分らぬでもない。対等者の門の繁栄ぶりを見て、おだやかでいられないあの人間心理なのだ。とはいえ衆望とか権力とかいうものは、たれへもそう平等に満足を配分しない。寄るところへ片寄って来る。

「人間の相違、力の相違。また衆が見る魅力のちがいというものだ。それをやつかむなどは身のほどを知らず、何も、俺の知ったことではない」

師直は、うそぶ嘯いた。

けれど内心は強固な警戒によろい鎧はぬぐわけにゆかなかつた。——  
どれも將軍家一族のゆゆしい者が相手だし、僧の妙吉にしても、  
そのこの調べだと、軽くは見ていられなかつた。直義を深く心服

させているだけでなく、宮中にまで隠然たる勢力をもち、夢窓を追つて、やがては天龍寺の主座すざに坐ろうとしている野望の怪僧かとも考えられた。

が、この危険な関係は、師直の胸にたたまれていただけで、秋、また翌年の正月までは、すくなくも表面には、何らかたちには現れなかつた。

というよりも、都は、外に忙しくなり出していたのである。

八月、細川あきうじ顕あきうじ氏は、河内の池尻へ出陣し、九月、藤井寺で戦い、十月には、山名時氏もまた発向した。

すべて故正成の遺わすれがたみ子くすのきまさつら、楠木正行の行動にあたるためだ

つた。しかも山名、細川の大軍も、天王寺附近で大敗北を喫し、

都の年暮くれは騒然たるものに変っていた。で、高ノ師直もまた自身、諸大名の軍勢をひきいて、時も正月というのに、河内の戦野に立つ身となつてしまつていた。

正行まさつら

そのごの吉野御所は、いいようもない淋しさだった。

後村上も二十一の帝みかどらしい帝にはなつていたが、それでも廉子は、ただの母性愛と重たい国母の保育とを身一つにしていた。そして塔ノ尾（後醍醐の御陵）へもよく詣まいつて――

みよし野は

見しにもあらず

荒れにけり

あだなる花は

なほ残れども

と、そんな氣の弱い歌も時には詠よまれるほど、何もかもがあじけないはかな儂あしさに映るひとみにもなる彼女だったが、しかし東から北畠のあし相しようがこれへ歸つてからは、廷臣たちの意氣もとみに揚がり、廉子も今なお少しのおとろえもみせぬその人に、

「まだ、親房がいたものを」

と、希望をあらたにさせられていた。

親房に接すると、彼女は、先帝の大どかさやよけいな肉をすべ



て削ぎ去った知性と信念の凝りかたまりを見るようで、いつも一種のきびしさに打たれる。

後醍醐にたいしてはずいぶん俗にいう「姉さん女房」であつた廉子も、親房へは、かりそめにも異議はおろか戯れ一ついえなかつた。そして往々に「先帝の御遺志は不肖わたくしのうちに在る」と言い、「わたくしを通して先帝の御遺志はそのままかど（後村上）へおつたえ申し奉るつもりであります」とも言っている親房だつた。

従一位准三后じゆさんごうという身分も廷臣最高だし、先帝の信任もたれより厚かつたひとである。廉子でさえ、こわいのである。

自分が養父となつてお預りしていた皇子が病死したときに、頭

をまるめて、はやくに政治のおもてからは退いていたが、しかし、後醍醐生前のおもなる画策はみなこの亜相の禅門から出ていたといわれ、その眼界のひろさや智謀神算の尽きないことでは南朝朝廷のうちこのひとの右に出る者はない。

いや北畠親房の真骨頂しんこつちようは、もつとべつな面だといえよう。学識だった。

彼は同時代の武士や権門のほとんどが欲望のために戦うだけで、無理論、無反省であったのとちがって、この乱世にむかっても自己の処し方とつよい理念をもっていた。

ちようこくろん  
肇国論

皇室論

## 万民論

にわたつて、その思想を系譜的に著述ちよじゆつした彼の「神皇正統記」うとうきは彼の精神の結晶といつてよい。

しかもそれは、遠州灘の難破後、常陸にただよいついて、筑波の小田城にたてこもり、四面敵中という境界で書いた陣中の著述である。

剣を筆に代えるでなく、親房は剣と筆を双手にした。

それほどな彼なので、吉野でも、親房はその「正統記」を教科書として少年の天皇に時折の進講を申しあげ、廉子や廷臣たちもまま側で聴講していたことであろう。

それはまた複写もされ、その複本は、九州から奥州の宮方へま

でわたっていたらうとも考えられる。しげしげ御所に見える河内の正まさ行ぎつらなども、親房からじかにその熱烈な思想、哲学、歴史観、戦略、経世などを聞かされては、武家のまわりには知らないこの一偉人につよい景けい仰こうを禁じえなかつたにちがいない。

彼の「正統記」は、国粹主義の一原典といわれている。日本は神国であるから日嗣ひつぎの御子は易かわることがない、変るべからず、というのが論の骨子だが、

“——神は人をやすくすることを本誓ちかひとす。天下の万民はみな神の物なり。君は尊くましまして、一人を楽しませ、万民を苦しむことは天もゆるさず”

と、農本の倫理をのべ、労働の尊重も説いている。

また。

“代、下れりとて、みづからを賤しむべからず。天地の始め

は、今日を始めとする理あり”

ともいつて、人間は創造者だ、いつも現実の非に屈せず、今日を以て始めとするほどの情熱がなければ、新しい歴史は生まれな  
い、と力説する。

すべて、大義を一義におく。

国のためには一切を捨てよという。それは虚無でない。犠牲と愛情に生きることだ。滅私奉公だ。と親房はそこをわけて強調する。——それはあたかも革命をこころざす今日の行動主義者の口吻ともどこか似かよふところがあつた。右から出て左から

発足しても、まろい環わの或る接合点では、究極、ひとつに合致してしまふ。人の理論や歩みとは関係なく、なにかどうにもならない人類社会の原則の環みたいな道理がほかにあるのかもしれない。とにかくそんな北畠親房であつたから、吉野にいても全国に目をくばつて、とくに京都奪回には、一念をそそいでいた。

「やれうれし、都のさまは案あんの定じよう、だんだんと我が思うつぼにはまつてくる」

新幕府下の武士のおごり、奢侈しゃしいんらく淫楽ふかうの風、また勝者同士の軋あなど、どれ一つといえ、彼の眼からはほくそ笑まれるものではない。

それに彼が吉野へ来てから着々とすすめていた南党再起ふせきの布石

もとのい、熊野海賊の洋上勢力も傘下さんかに加え、また近くには、河内の東条に前衛本陣をきずいて、そこには、正成のわすれがたみ楠木正行を、檢非違使けびいしノ尉帶じょうたてわき刀に任官させて、

「父にもおとらぬよう一ばい忠誠に励まれよ」

と、近畿きんきの一大將に配すなど手順も万端できていた。

かつ、親房は得意の第五列を都へたくさんに忍びこませた。――

――この秋から冬じゆう、洛中諸所に、えたいの知れぬ火災がひんぴんと起っていたのは、あらましそれによる乱波らんぱの仕事だったのだ。

「機は熟す」

と、そこで彼は積極戦略へと移行しだした。――まず正行を激

励して紀州の隅田城すだじょうを打たせ、その余勢で、細川頭あきうじ氏を堺ノ浦に撃破させた。——正行の純で少壮気鋭なこと、北畠頭あきいえ家の再さいらい来らいを偲しのばせるものがあつた。

やがて、山名時氏は天王寺から逃げしりぞき、藤井寺の戦いも幕軍の破れに歸し、ようやく足利がたの驚愕は、師直、師泰までが陣頭に出てきたことにもうかがわれる。

そして十二月二十七日のことだった。

正行は、とつぜん、吉野の御所にあらわれた。

「正成の一子、河内の帯刀たてわきまさつら正行事、ちかく敵の大軍にまみえる覚悟のほどをほの見せて、ただいま行宮あんぐうの坪つぼノ屋やへ来てひかえております。おそらくは、それとなくお別れにまいったもので



「ごぞいましょうか」

伝奏てんそうの公卿が、奏した。

侍側の親房はこの日、おもなる公卿と共に別院にはいったきりで見えなかつたが、廉子やすこにはその協議のなみならぬこともわかつていたので、

「亜相あしょうはいまおいででないが苦しゅうあるまい。謁えつをとらせてやりましょう。階きざしの下に待たせておおきなさい」

と、伝奏へ言つた。

そして、四、五の近臣と共に、後村上をうながして、出座した。

正行まさつらはぬかずいていた。

「簾れんを上げたがいい」

と、後村上はとくに簾を捲かせて正行を見た。

正行のはたらきはたびたび上聞に入っている。後村上は、いつも北畠あきいえ家をおもい出され、さぞ顕家にもまさるたくましい若武者かと想像されていたが、いまみると公卿の顕家よりはずっと小柄で痩せてもいた。

そして年もご自分とあまりちがわぬようなと眺めながら、こんな弱小な身で、どうしてしばしば足利勢のきもを寒からしめるような戦功を剋かちとるのであろうかと不審のようなお顔であった。

「正行とは其そこ許か」

「はい」

「いつも聞いておる」

「かたじけのう存じまする」

「父の正成もえらかったのだな。まろは顕家とみちのくに長くいて正成とは会うていぬが、いまでも、ここの旧臣たちは、寄り寄り、正成の死を悼んでやまぬようだ」

「泉下の父も、さぞ冥みよう加がに思うておりましたよ」

「さあ、どうかな？」と、後村上は青年らしく率直だった。

「——ひとつも正成の心のようにはない。おなくなりになった先帝も地下の正成にはわびておられるかもしれん」

と、なかば母の新待賢門院を見て仰つしやった。

廉子も、それをしおに、

「帯たてわき刀（正行）どの」

と、ことばをかけて。

「そなたもまた、親まさりのものと、みかどをはじめ、北畠の亜相もみな頼もしゆう望みをかけているのです。どうぞ命をいとしんで給もい。はやり気を出してあたら可憐な討死などいそがぬように」

「ありがとうございます。仰せまでもなく滅多にあだな死はとげませぬ。しかしやがてまみゆるこのたびの正面の敵は、かつてない大軍のよし。またたかならいの慣い、露の命はいつともはかり知れません。……折ふし年のさかい、東条の本営まで所用あつて帰りましたので、ほど近い在所にある母とも一夜会つてまいりました。かたがたと申してはおそ畏れあれど、またいつという時もあるやなしやわかりませぬので、かくはよそながらごきげんを拝しに

参内いたした次第にございます。しかるに、はからずも親しくおことばをいただき、いちばい、心をふるって戦陣へのぞまれます」  
「……………」

みかどは、またしても忘れがたい顕家と、正行とがお胸に見くらべられていた。やがて賜酒ししゆが終ると、正行はすぐ退がった。しかしその後ろ姿もどこか弱々と見えて、みかどは密ひそかに、顕家あきいえには似ぬ者と、傷いたいた々々しく思われた。

御所を出た正行は、すぐ先帝の御陵へ向い、やがて吉野を去りかけていた。

すると、一名の青侍が来て告げた。

「おそれいるが、帯たてわき刀殿御一名だけ、もいちど御所の別院まで

お立返りくだされまいか」

たつたいま、からだがあいたから会おうという北畠親房の旨だむねとある。

ここにはいても全国南朝方への令はみなその人から出ている総帥の禅門だ。正行は供の同勢をそとにおいて、実城院の一門を入つた。

方丈の庭であろう。縁の低い草堂風な一房に親房は坐っていた。くちばいろ朽葉色の法衣の上にもし腹巻をあてていなかったらそのまま庵主として見てもふさわしい人だった。当年五十五、六か。そうしん瘦身の優しい目つきともとれるのに、正行はいつもこのひとに会うとかたくなつた。亡き父にはまだどこかあまえられるところもあつ

だが、親房にはみじんもそんなゆとりは持てなかった。

「帯刀」

「はっ」

「このところ転戦また転戦、ものぐ物具を解くひまもなからう。したがよく諸方で軍功をあげた。さすが父の名を恥かしめぬ者。お上かみの御嘉賞もひとかたでないぞ」

「先刻も親しくおことばまで賜わり、身にあまる冥みようが加です」

「よかった。親房もあとで聞いてうれしく思った。泉下せんかの正成の心も思いやられてな。いや正成もだが、そちの母も、優すぐれた女によし性ようとみえるな」

「……………」

「そちの父が湊川で逝ゆいてからちようど今年は十年になる。その間には内々、足利方からもずいぶん誘惑もあつたらうに、幾人もわすれがたみの遺子を守り育てて、今日こんにち、吉野のみかどへ、それらのわが子をささげてまいるなどは、よほどな女性でなければできぬことだ。そのような母、あのような父、正行が群ぐんを抜いた戦陣ぶりも理由なきことではなかつた。だがの、正行」

「はっ」

「なぜ、このたびのような大事なたたかいを前にして、大将たる身が、かりそめにも数日陣地をむなしくあけて、たとえ一夜にせよ、母の許へ帰つたのか。また、これへも参つたのじゃ。親房にはそこのところが、どうも心に染まんのだが」



「はい……」と、正行は神妙にわびて。「この冬は、とかく体のすぐれぬ母と聞いており、また、次こそは、ゆゆしい大決戦になるうと、ひそかな覚悟も持ちましたので、よそながら吉野の御所へも」

「それがいかん。武者の心がけでない！」

と、親房の霜のような声は、ふいに正行の全身を打った。

「そちも聞いてはいよう。いまもよく人々が語り草にいう北畠顕家をちと鑑かがみともしたがいい。わが子のことゆえ、この口からはほめ難いが、かつて顕家は、千里の遠くからこれへ駈けつけ、大和、河内の賊軍を追いしりぞけ、よく先帝のみ心を安めたが、ついで伊勢にありしこの父へも、会いには来ず、吉野の御所へも、京都

奪回を見る日まではと、いちどの伺候もしていなかった。そしてついに安倍野であのような忠烈な戦死をとげたのだ。……それとくらべて、楠木帯たてわき刀正行はどうかの？」

親房の心にはいつも子の顕家の死があつた。親心の痛惜と、親ながらその子を鑑ともつねに言っているほどな子自慢のほこりがあつた。

はしなくも、その気持ちが正行と自分の子との比較になつて出たのだろうか、——比較された正行はつらかった。辱はじないではいられない。どう考えても自分はおとる。

「悪うございました」

素直に彼はそれをみとめて言った。どういつてみても、このひ

とに釈明する余地はないように思われているのである。正行はその弱小な体をいよいよ地へ小さくして。

「身に大任を蒙りながら、たとえ幾日にせよ、前線を空けて来たなどは、まったく、正行の不覚でした。さつそく駆けもどります。面目しいもございません」

「いや、わかつたらそれでいい。せつかく武勲かんばしい楠木廷尉の子なればこそ、その子の名をも惜しむのだ。わしの言は、父正成がいうものとして聞くがよい。……な。親房のこの姿も目に入るであろうが」

と、法衣のうえの黒革の腹巻を、たたくように示して。

「わが身すら、きょうの軍議の決で、すぐ武装いたしたのだ。親

房が身を鎧よろうなどはめつたにはないことぞ。——したが聞えによれば、尊氏はこんどの出兵をもつて、南朝絶滅の総ざらいのいくさと称となえ、高こうノ師直もろなお、師泰もろやすを二大将とする軍のほか、さらに仁木、今川、細川、あがた県、宇都宮、武田、佐々木（道誉）などの諸将をも、なおぞくぞく戰場へそそぎこんでいるという。——そして直ただよし義おとこやまは男山おとこやまに陣し、師直は河内へ入つて東条を突き、また師泰は和泉へ攻め入る戦法とか。——これはゆゆしい。和泉のお味方はほとんど手薄だ。それゆえ親房自身、明日はここを立つて、和泉へ向うつもりでおる」

「……………」

「さような時も時なる折に、敵の真正面にあたるべき帯たてわき刀正行

が、一夜を母のふところへ帰つて寝、また一日を悠々と、ここの行宮あんぐうになど罷り出まかて来てよいものか。あまりと申せば敵を知らなすぎる。また君命のおもさをかろんじ過ぎようがの。——父の正成が湊川へ行くにあたつて、先帝に御諫言をして行つたのとはわけがちがう。——いまにして思えば正成には大処なげうから全局を觀る大きな眼があつたのだ。しかも君命なればとそれも抛なげうち、あのいさぎよい一期いちごを完全に戦い終つた」

「……………」

「その正成の子ではないか、どうしたものだ、正行は」

「……………」

正行は、しきりに肱ひじを顔にあてていた。いつかふるえ泣いてい

たのである。親房の峻しゅん烈れつなことばの鞭むちもそれに気づくと一た  
んは口をつぐんでしまった。が、なおまだ足らぬようにさいごの  
激励を彼の唇がふくみかけたときである。地に伏していた正行は、  
すつくと体をのぼして立ち上がっていた。

「早そう々そうに駈いけもどつて軍いくさの手当てをいそぎます。いちいちの  
おことばは肺腑はいふを刺し、これ以上の辱には座にも耐えられません。  
これにて、おいとまを」

わざとおちついて、親房への一礼はていねいにしたつもりであ  
った。が、正行の姿は一転、駈けるような速さで門のそとへ出て  
行った。親房はまたそれを、自分の言が充分な功を奏したものと  
して見送っていた。

門のそとには百四、五十人。——正行の弟の正時まさとき、和田新発しんぱつ意ぼち、同新兵衛、紀ノ六左衛門、楠木将監らのほか、正成の代からの旧臣、八木ノ入道法達だの、安間了現なども、

「はて、遅い御退出、どうなされたのか」

と、みな待ちびさしげに地にすわりこんで、待っていた。

そこへ、

「やあ、すぐ行こう」

と、正行の姿だった。

声の調子には変りもなかったが、泣いたあのような正行の臉がたれにも気にかかった。しかしたれも訊かない。そうでなくても正行をよく知る彼らにはその人の馬上の薄い背を見るだけでも

傷々しかつた。

正行の小柄なのは、幼少からだだが、とかくいつ頃からか薬餌くすりになじみがちだった。病名といつては彼らも的確に知っていないが、きわだつて痩せの見えてきたのを家臣たちが気にし出したのは、正行が二十歳の頃をさかいに一族や四隣から、その族長的な在り方を注目されだした時にあつたといつてよい。

その青春もさかりにかかつて、薄いそうしん身を揉もんでくるしそうに咳せきを喘せいている姿などを見かけると、家臣は胸を傷めただけでなく暗然としたものだった。やつと咳せきを懐紙かいしにつつんで鎮しずまつたあとの正行のおもては、その懐紙よりも白く、見るにしのびないものがあつた。



家臣の彼らの思いにしてすらそうだった。正行の母、今では御後室と一族からよばれている久子の長年にわたるものは世間なみの後家の苦勞といったようなものではなかった。

外にはたえず時乱の圧迫が良人の死後も依然この家をかこんでいたのである。それも足利方に降れば或る平安は保証されたかもしれなかった。だが久子の心操はそれをゆるさなかったし、さらに朝廷が吉野へ移って来てからは、附近の東条は、吉野の前衛地となつて、楠木家の好位置はしぜん常駐の守備をいなみなく任じられてもいた。

「これでこそ、菊水旗の御遺志は、いよいよ御後室と御遺子にかけてまで<sup>かがや</sup>耀かしい」

と、いちばい奮う一族もあつたが、また中には、

「いや湊川の御遺志とは、本来、こうなることではない。一日もはやく戦をやめ、ふたたび相剋そうこくの白骨を野にさらすなどなきようにと、天地の神明と朝廷に祈つてあのごさいごをとげられたものだ……。それが、あるときよりもさらに烈しい南北両朝の分裂を見るとはまたどうしたことか。もし正成さまをもちど今にあらしめば、どんなことをしても、両朝の和解をとげることにより身をささげられたにちがいない」

と、これが表面の意見にも出て、内輪の議論となつたことも一再でない。しかし嘆く者は去るしかなかつた。そして南河内の一角は、いやおうなく吉野の重臣、四条中納言隆資たかすけの指揮下にか

ため直され、久子はそのいきぐるしい中であつた。彼女の思いは、ともかく病弱な正行を静かな病養か出家の身にさせ、そしておもむろに両朝の和睦をはかるようなことに献身させたいと願うのであつたが、一後家の意志などは、しよせん、おこなわれもせず、ついに今日にいたつたのであつた。

同勢のうちの安間了現や八木法達らは、かつての湊川の生き残りである。正成のさいごの真意がわかつていない者ではない。

だが、以後の郷土事情や大勢は彼らの力ではどうにもならないものだった。彼ら湊川の生き残りとして故殿ことこのへの申しわけになしうることは、正行まさつらを奉じて行くところまで行く、それ一つしか残されていなかった。

列はいま、蔵王堂の北をだらだら下がりに降りて行く。みな、かぶとの眉まびさし廂をうつむけ、そして正行の冬日にかすむ姿を時々には先頭の遠くに見ていた。

「おい、八木ノ入道」

了現は、駒横にならんでいる法達を見て小声をかけた。

「正行さまの瞼をみたか」

「む、最前だろう」

「おれは思うのだが、あれはきつとお叱りをうけたのだ。それもかなり厳しいお叱りをな」

「たれから？」

「もとより北畠親房卿のほかではない。わざわざ呼び返してお

招き入れ。正行さまの御退出もおそかった。どうも前後をおもいあわせてみると……」

「なるほど、正行さまが、次の大決戦をひかえて、母ぎみを他所へ移す御処置のために、水分みくまりへ一夜お帰りあつたなどのことが、もし親房卿のお耳に入っていたとすれば、あの亜相のことだ、どんな苦にがい御叱咤ごしったをもつて、若年の大将を励まそうとしたかそこはわからぬ」

「いずれにいたせ、よい御首尾ではなかつたとみえる。あのときのお顔いろでは」

「や。……呼んでいらつしやる。道をかえてどこへお立寄りになるつもりか？」

騎馬の者はみな小キザミに駒を駈けさせて、正行のまわりに黒いかたまりを見せ出していた。法達と了現とは、そこへだけでなく、なおそれから先も駈けとおした。正行の姿はもう下山の道とは逆な吉水院きつすいいんの谷を東へ下がって、彼方の如意輪堂にょいりんどうの方へいそいでいるのだった。

みなあとから追っかけた。しかしそこへ急ぐ正行の何か一途いちずな姿がなにを思っているのかはわからなかった。なぜならばさつき親房の使いに呼び返されたとき、すでにそのの御陵には詣もつで、かたわらの如意輪堂にも詣まつて、備え付けの堂の記帳に名までしるしていたのである。なんでまたそこへ返って行くのか。

しかし、まもなく人々は、如意輪堂の内へ入った正行が、筆を

とつてその壁になにか書いたのを息をつめて見まもりあつた。そして筆を僧へ返すと、正行はすぐ出て来て、もう馬上にもどつていた。

「なにをお書きか？」

と、諸将は入れ代りに堂の内へこみ入つて壁をにらむように幾たびも一首の歌をくちずさんだ。——かへらじとかねておもへばあづさ弓、亡きかずに入る名をぞとどむる——、あきらかに辞世だつた。

からだの弱かつたせいか、今に残っている正行のわずかな書状の筆蹟でも、文字にはどこか弱い病影があり墨色もおおかた淡いうすといわれている。

しかし如意輪堂の壁へ残して去つた和歌の文字には、優しかるべきはずの仮名かななのに、何か、やるかたない思いをそこへぶつけたような筆勢と墨の気があつた。いちばんあとから入つてその前に立つた了現と八木ノ入道とは、顔見合せて、思わず目に熱いものを沸たぎらせずにいられなかつた。

正行が戦死したのは、それからわずか八日後の、明けて正平三年正月の五日だつた。

しじょうなわて

四 条 躰、終日のたたかいは、壮烈をきわめ、彼の死も花々しいものではあつたが、それはたれの目からも「——みずから死を求めて突つ込んで行つたような無謀な戦」と、評され、その気短な死に方は、



「なぜか？」

と、彼を惜しむ余りに人はいぶかつた。

なにしろ、不可解なる「死に急ぎ」よと衆目は見たのだった。

これを戦略上からいっても、敵將の高ノ師直は、正月三日から  
 四条畷をまえに重厚な陣をしき、武田伊豆守の先鋒はすすんで田  
 の畔くろから平野の湿地帯にまですきまもない兵を充て、あ県下あがたしもつけ野  
のかみ守の一陣は飯盛山に、また佐々木入道道誉は生駒山の南に――  
 といったふうには、無慮むりよ三、四万の大軍を霞かすむばかりにしていたの  
 である。

そのほかにも。

遠い林間、はるかな丘の起伏にも、仁木、今川、宇都宮、山名、

細川などの旗が、変通自由な遊軍として伏せていたのは、正行の眼にもしかと映つていたはずだった。

だのに、なぜか。その日の正行は、深重な策をめぐらすでもなく、全軍数千にもたりない小勢で、それも一角へ当たるといふようなこころみでなく、まっ向、敵の師直のふところ深い本陣へむかつて猛然斬り込んで行つたのだった。

つまり初手から玉砕を期していたものとしか見え、正行のおおわらわの大童なすがたを中心に、一とき、わあツと、どよみを揚げた武者どもの叫びは、喊声というよりも、一種凄愴な気をおびた哭き声のようにさえ聞えたと、あとで言つた者があつたほど、とにかくそれは異常としかいいようのない猛突入をあえておこな

つたものらしい。

もちろん、南朝方には、正行の楠木勢以外にも、四条隆資たかすけを大将とする「——和泉、紀伊などの野のぶせり伏ども二万余人」と、太平記もいう後ろ備えはあつたのである。けれどこれ以外には、南朝方の布陣や、また名ある武将の在り方あなどもあきらかでない。要するに、まったく正行一個の双肩にかかつていた戦といえよう。それがすべて玉碎してしまい、正行、正時、和田新発意しんぼち、そのほか附き従う一族旗本、正成いらいの旧臣たちも、すべて雲霞うんかのごとき敵中に没し去つたきりふたたび帰つて来なかつたのだ。

正行、死す

の報に、その夜、京都は万歳の声にわいたという。

それほど彼の存在は短くはあったが足利方には大きな脅威きょういであつたのだろう。

まして南朝方のうけた落胆と衝撃は決して小さなものではなかつた。わけて北畠親房が、正行まさつらの死と聞いたときの胸はどうだつたらうか。

彼のことだ。おそらく何の感情もおもてには出してまい。その親房は和泉にいたのである。そして正行が亡いあとは、正行の弟まさのり正儀を起用し、さらに次の楠木家を負つて起たたせた。しかし正儀は以来もう親房のいうことには従わなくなつていた。

正行の弟、その正儀は、長いこと、史上疑問の人物といわれている。

正行が亡きあともすすんで南朝に仕え、南軍の一将として吉野朝廷の回復につくしながら、ときには北朝方へ款かんを通じたり、ときにはあいまいな中立的偽態にかくれて、生涯、自分の信ずる歩みをつらぬき通したからだった。

酷評する者は、正儀をさして、その政略的な才はみとめるが、彼だけが楠木家には異端な子だった、父正成の誠忠、兄正行の純忠をけがした不肖な者である、とまで蔑さげすんで言った。でなければ、謎の人物と疑ってきた。

しかし、正成が湊川にこめた最期の祈りは、やっと正儀のすがたにそれを見ることができると。正儀は兄の正行が、何であのような「死に急ぎ」をしたか、たれよりもその心情を知つてもいる。

——兄が生来の病身から常に花々しい死所を求めていたことはたしかだが、しかし親房の非情な言が兄の感傷に拍車をかけて四条なわてへ行かせたのも疑いないこととしていたのである。で、それからは親房のいうことも余りきかなくなつた正儀であつたようだ。

また、正成の妻の久子も、正行の死には、世もまつ暗な思いになり共に血を吐くほどな悲しみに打たれたろうが、正儀の代にいたつて、ようやく、良人の願ひも自分の悲心も、その子に託しえたかとして、髪をおろした一尼の余生を、水みくまり分の奥なる山中の一庵において静かに朝夕することができていたのであるまいか。

……、ちと前後した。

それらは、今の急ではない。四条なわての直後にうつろう。

師<sup>もろやす</sup>泰の軍は、堺から石川河原へすすみ、正月の十四日には、もう東条へせまつて、楠木氏の根拠地をついていた。

一方、師直は。

大和国平田ノ庄へ攻め入り、<sup>たちばなでら</sup>橘寺に陣して、西大寺の長老を招き、吉野へ和談の交渉をさせようとしたが、時すでに、南朝の天皇は、はやそこにはお在<sup>わ</sup>さぬとの聞えだつた。

「どこへとて、奥は知れている。落ち行かれた先の先まで、追いまいらせろ」

二十四日、師<sup>もろなお</sup>直指揮下の<sup>ほうひよう</sup>暴豹のような軍兵は、われがちに吉野の山上へ<sup>こ</sup>込み入つた。

行<sup>あんぐう</sup>宮はすぐ火を放たれ、蔵王堂以下の坊舎から山門すべても

炎となつた。それは何の抵抗もなく燃えるがままに燃える不気味な寂土じやくどの狂炎だつた。

すでに吉野大衆の影さえなく、後村上天皇もまた、紀州天の川の奥地、賀名生あのうへ逃げ落ちられたあとなのだ。

賀名生あのうは古くは穴生あのうともいい、十津川、天河の郷民はなお純朴そのものだつた。かねてから南朝に心をよせていたそれらの山党は、天皇の捜査に深く分け入つた師直勢をいたる所に奇襲してなやませた。佐々木道誉の子秀宗が討たれるなどのみじめを見たのもこのさいである。——まるで猿ましらと人間のたたかいだつた。——そこで師直もついにあぐねてしまい、あと一步の肉薄をのこして、急に、京都へひきあげた。



ひとつには、京都の留守が気がかりだったものである。直義、  
 上杉、畠山などの、いわゆる道誉のいう一穴いっけつの者のうごきが、  
 彼には以後、忘れえぬ警戒心となっていた。

反噬はんぜい

師直の凱旋軍は、誇りを歩武ほぶに鳴らして入洛した。

私邸に入らず、師直はすぐその身なりのままで、御池おいけどの殿の門  
 に馬をつなぎ、尊氏に会って、以来の報告を先にしていた。

「えらかったろう」

尊氏は、彼の越年の労と戦功を大いにたたえた。しかし四しじょう条

なわて

睨から吉野焼打ちまでの経過は、あらまし先に帰っていた直義からきいていたらしく、

「惜しむらく、一つ残念なことをしたな。吉野の奥はまだ雪とやら、ぜひもないが、追捕ついぶのもう一步では、南朝がたの君臣を、このさい一挙に捕えることもできたらうに」

と、それだけは画龍がりように点睛てんせいを欠いたものと嘆じるのだった。  
「……いや何とも」

と、師直は、あたまをたたいて、あやまつた。

不案内な山地の苦戦とか、兵糧の欠乏とか、そんな平凡ないわけに、努めたあとで「しかし——」と、彼はまた、彼らしく陳ち弁べんした。

「その賀名生あのをうと申す地は、まったく猿しか住まぬような山奥きわの極みでおざる。さような人外境より、俄に再起をはかるなどは、もはや思いもよらぬこと。されば吉野朝廷の名も実も、はやなきにひとしいものと見てよろしいかと存じまする」

「む、む」

そうには違いないと尊氏も思った。師直はいうまでもなく、もつとそれを確信した。

しかし、これははなはだしい誤算だった。

そのご、賀名生の南朝方は、意外にはやく瀕死ひんしの頽勢たいせいをもらかえしてきたのである。

しかもなお皮肉なのは、その原因が、勝者の側がわから瀕死の敵へ、

起死回生のよろこびと絶好なすきとを与えていたことにある。――すなわち、足利方の内証ないこうがそれで、直義と師直との軋轢あつれきは、両者の凱旋を機としていよいよ激化し出して来たかの様相がこの春は一ばい濃こかった。

かねて、直義の手にひきとられていた養子の左兵衛佐直冬さひようえのすけたただふゆ（幼名、不知哉丸いさや）は、この一月ごろ、西国探題の名目をうけて、こつねんと都を去り、備後の鞆ともノ津辺つへんにとどまって、しきりに、従前からの師直がしていた下知状やら曲事くせごとを洗いだてて、これを直義へ報告していた。

「怪けしからぬお手廻しよ」

師直もろなおがこれに憤慨したことはひと通りでない。

「たたけば、ほこりは、どこにも出よう。師直の沙汰とは申せ、すべては將軍家の御意志によるもの。これを師直の曲事となすは心得がたい。——察するに、錦小路どの（直義）こそ、直冬を西国へやって、自己の外援勢力を西にかためておく用心であろう。よろしい、そう正面切つて、師直に挑いどんで来るなら、師直にも覺悟はある」

彼は、生来の鬪志を大きな唇にむすんで、いらい寸分の油断はないつもりでいた。

ところが、ほどなく、師直は突如、罷免ひめんされて、屏居へいきよ謹慎を仰せつかつてしまった。

——直ただよし義から内々みっそうつよく密奏するところがあり、尊氏の意

も度外視されて、ついにこの上命をみたものらしいがと、諸人はどうなることかと、この噂で一時もちきりだった。

事の断行をとる前に、直義は、一般の師直にたいする不人気という点を、かなり計算づくめに考慮していたには違いない。

ところが、いざ、

師直の罷免<sup>ひめん</sup>、屏居<sup>へいきよ</sup>

という思いきった人事改革の断をみると、一般の表情は予期に反して、師直の失脚を小気味よしとするよりも、

「あの、木像蟹<sup>もくぞうがに</sup>どのが、このままだまっているだろうか」

とする、恐れの方が、衆を大きく支配しだしていた。そして、  
「何か始まる」

「なくてはすむまい」

と、危惧に揺れた人心は、たちまち、不気味な流言や浮説を作つて、直義の当初の考えとはまったく逆な現象をよびおこしていたのだつた。

しかし、一方の――

一条今出川の師直の邸宅といえは、その日いらい、静かに門を閉じたままではかない。人出入りもまったく絶え、いかにも閉門謹慎のていである。

だがその物音もない奥まった所では、あの木像蟹殿が、どんなくつたくがお屈託顔くつたくがおに頬杖をついていることか。またはこんなときこそ心ゆくまで閑かんを愉たのしむべきだとして、側室の二条関白家の妹君でも昼

夜なく愛撫していることでもあるか。そのへんはたれにも想像がつかなかった。

けれど彼が悪足掻わるあがきな妄動をしていないことだけはたしかであり、夜ともなれば、墨を流したような今出川一帯の大屋根が、それだけになお気味わるい夜気を都の隅すみに濃くしてはいた。

この無抵抗ぶりもまた、直義には意外だった。

こう、おとなしく命に服したものを、性急に武力的な拘束を加えることも出来ないし、それはまたかえって危険を呼ぶものとも考えられる。——徐々には、兄の尊氏にせまって、これまでの師直の罪科をかぞえ上げ、将来のためをも説いて、このさい彼を流罪に処すか、いつそのこと、死を賜うとして、切腹を命じるかの、



いずれかの決断をせまるのを目的としてその方にもつぱら力をそそいでいたのである。

しかし、これがまた容易にらちはあかなかつた。

尊氏がそれに「うん」という気色はどうも見取れない。そこで兄弟の複雑なもつれは、或る限界を置いて口に出さないまま、冷却の日をおくことを余儀なくしていた。——もし師直の罷免理由を、短気に兄へつきすすめてゆけば、勢い、それは直義対師直でなく、直義対尊氏の兄弟喧嘩とならないわけにゆかないのである。そもそもは、尊氏が「諸政、何事も、弟のおまえに委せる」として来たものを、一面では自分の意志を師直に代行させて、二頭政治の弊を<sup>へい</sup>あえて深めてきたことが、およそこんどの重大原因で

あるからなのだ。「——兄の狡ずるさよ」と、これまでも直義は、たびたび腹にすえかねていたものの、兄との衝突は、極力これを避けずにはいられない。

しかし、その是正ぜせいと鬱憤うっぴんとを師直に向け、あわせて、一気に高家一族の勢力を根こそぎ排除しようと計ったのは、どうしても直義の誤算であった。またその時期も過っていた。

いつのばあいでも、内訌ないこうは敵をよろこばすだけのものだが、直義対師直の軋轢あつれきほど、「待っていたもの」と、南朝方を勇気づけたものはあるまい。そのごも謀將北畠親房が、さかんに第五列を都へ送つて、後方攪乱かくらんの実じつを上げていた折でもあった。

もつとも、乱波らっぱ（便衣隊）の暗躍は、こんどに限ったわけでは

ない。足利家が幕府を都にすえてからは、のべつそれらの形なきものの口から巷ちまたに怪異かいゐが撒まかれていた。

たとえば。

直義の妻（渋川貞頼の女）は、四十一歳で初めて男の子を産んだが、するとすぐ、

「これは稀さかんれなお産さんだ。大塔ノ宮の怨おんりよう霊りようが憑ついて、直義夫妻の仲に出たものに相違ちがない」

と、いう者が多かつた。

また、あるときは、

「たそがれ、緋ひの袴はかまをはいた女官が、院の檜皮屋根ひわだの上に見えたが、そのうちに御池殿おいけどの（尊氏の住居）のうちへ消えた」

などという流言も立ち、無知な民心は、そんなことにもすぐ暗い不安にゆすぶられた。

しかし、ことしに入ってからの変異は、ただの怪奇な流言だけでなく、目にもわかるような乱波活動が頻々ひんぴんだった。その多くは放火であり、なかでも顕著けんちよなのは、三月十四日の夜半、尊氏の御池殿の全館が、焼亡したことである。まったくの怪あやし火びで、出火の原因も不明だった。

それいぜんには、清水寺の焼失があり、持明院の一角からも火が出、そのほかの小火災と来ては、毎晩のようだった。

けれど、それらの変異に馴れツ子なれつこになっていた人心も、六月十一日の四条河原の勸進かんじん田楽でんがくの大椿事だいちんじにはきもをつぶして、

これはただ事ではないぞとみなおぞけをふるツた。

この勸進田楽には、將軍家の尊氏夫妻をはじめ、北朝の歴々、女院、宮、いわゆる月卿雲客げつけいんかくから市中の男女数万という見物が群れ集まっていたのである。——勸進元は、祇園ぎおんの僧行ぎやうえ恵という者で、四条大橋を架すための浄財をあつめるのが主目的であり、役者も新座本座の一流をよりすぐった大興行であつたのだ。

そして、八人法師の拍子打ちひょうしうに始まつて、鯨踊さざらおどりは本座の阿古あこ、乱どり舞らんは新座の彦夜叉かたな、刀玉取りかたなは道一どういちと、おのおの妙技をつくして、猿楽ざるかくの一と幕も佳境に入り、やがて將軍家の棧敷さしきわきの橋がかりから、練貫ねりぬきの褌つまを高くとつた美貌な女役者が、半開きの扇を眉にかざして出でにかかつたとたん、どうした

のか、上下、二百四十九軒けん（組）のさじき 棧敷が、ごうぜんと凄**い**物音をたてて、諸もろ 仆だおれに、河原へ崩れ落ちたのだった。

さじき 棧敷、六十余間けん

俄つひに潰えて落ち重なり

死者百余人

傷者は数も知れず

とは諸書の実録だが、この事件なども、原因は分らず仕舞いで終り、おまけに当夜は風雨、翌日は洪水になったりしたので、ましわざ たも「天狗の仕業か」ということになってしまった。

ところで、師もろ 直なおの処罰は、こんな大事件後のわずか二十日ほ

どのちに断行されていたのである。それやこれやで、一ばい人心

が騒いだのもむりではなかつた。

乾ききつた残暑照りの日中だつた。一ト筋の旗も持たず、黙々と気むずかしい顔をした騎馬の一群が、南の方から洛中へはいつて来た。

一度、それは跡絶とだえた。

が、次には、足なみを早めた騎歩兵五、六千にもものぼる汗の顔が、一隊また一隊とつづき、みるみる法成寺址あとの森へかくれた。

「おや？」

あとの白い埃ほこりのうちに立ち迷いながら市民たちはその六感で怪しみあつた。

「越後守（高ノ師泰）もろやす）どのに相違ない大將が中に見えたが」

「では今のは、越後どのの軍兵か？」

「としたら、旗も見せずに、法成寺の森へ入ったなど、ただ事ではあるまいぞ」

彼らの予感にあたっていた。一ときのままに異常な恐慌状態が洛内中に地鳴りをおこしていたのである。その震源地とみなされたのは、当然、高ノ師直のやかたがある一条今出川のいっかく一郭であり、衆目がそれと、そこへ寄ったときには、すでに驚くべき変貌が今出川には起っていた。

つい午前中までは、おとなしく閉門謹慎のままかに見えた師直の邸を中心に、附近の武者屋敷はみな、ものものしい戦時態勢に



かためられ、辻々には兵が立つて往来もまったく遮断されていた。そして忙しげに行く騎馬の影があれば、それはここと法成寺との間を連絡か何かに駈ける相互の早馬だけだった。

思うに、師直と師泰とのあいだには、とうからもう今日のための打合せが交わされていたにちがいはあるまい。

師泰は、吉野攻めの後も、和泉の北畠親房や河内の南軍にそなえて、戦場にとどまり、春いらい一度も都に帰還してはず、兄師直の失脚は、つまり自分の留守中でのことだったのだ。

おそらく彼は、この変を知ると同時に「——高家こうけ一族の浮沈」とかくど赫怒して、すぐにも戦場を去ってここへ駈けつけようとしたのではなかったか。

けれど、それをとどめて、きょうまで、鳴りをひそめさせていたのは、師直がほかに期するところがあつたからにほかならない。——師直はその閉門中もただ安閑あんかんとしていたわけではなかつたのだ。師泰との打合せだけでなく、在京在国の武家仲間へも極秘に款かんを通つうじて、きょうという日を、充分な用意のもとに待機させていたのである。

その証明は、やがて、夜に入るや、ぞくぞくと、諸方から駆け集まって来たおびただしい諸家の兵馬に見ることができ、法成寺の兵をあわせれば、それは一万五、六千の一陣營をなしていた。もつとも、この半日半夜、洛内の路上にあふれた兵馬が、みな師直がたへばかり殺到していたわけではない。中には「——すわ」

とばかり迷いもなく、錦小路殿（直義ただよしの邸）の方へ駆けつけてゆくのもあり、そこにはすでに、上杉重能、畠山直宗、その他、日ごろ称して、副將軍直参じきさんの宗徒むねとといっている面々がひしひし、附近をかためていた。

とはいえ、直義の許に駆けつけた者と、師直方に応じた武士とをくらべれば、直義方は、はるかに少なく、一方の半分以下にもたりなかった。日ごろの人気とはあてにならないものである。決票の数は逆な現れを見せたのだった。

「後手ごてを食った。飼犬に手を咬かまれた！」

直義は地だんだをふんだ。準備、兵力、すべてに抗しえぬことも明白でありすぎる。

刻々、險悪の度は濃い。敵の師泰は、法成寺址あとを。師直の軍勢も一条今出川を離れて――

「両勢一万五、六千人。鉦かねも打たず旗も振らず、音なき波の歩みのように、しゆくしゆく肅々しゆくしゆくとこれへ向つてまいります」

との、声々だった。

「木像蟹めが」

どうしても、家来筋の師直となす思惟しゐいが直義には抜けきれない。そんな男がしかも堂々とこのような反噬はんぜいに出て来たことが、何とも心外だし堪忍ならぬものに憤られる。

だがこの非常事態がそんな感情でいささかも形を変えるものではない。事は急であった。直義は急遽、土御門つちみかど高倉の兄尊氏の

新邸へ逃げこんだ。よもやそこへはと、一時の難を避けるつもりであつたのだらう。

ところが、それを偵知した師直、師泰の軍は、進路をかえて、やがてひたひたと土御門高倉のまわりを厚くとりかこみはじめたのだつた。そしてそれまでの声なき波濤は、ここで初めてわああツと物凄い咆ほうこう哮を揚げ出した。——もしそれに釣られて、内へはいった直義方の将士が武者声に応じたら即座に合戦の火ぶたは切られていただらう。が、諸門をかたくしたまま、邸内の兵はまったく口を緘かんしていた。おそらく尊氏の嚴命だつたに違いあるまい。

するうちに、師直方から一使者が邸内へ入り、まもなくまた、

邸内からも、尊氏の使者が来て、師直に告げるところがあつた。

「——いかなる憤激にせよ、主人の家をとりかこむ法やある。所よぞん存しりぞあらば退いて申し出る。それとも目的は他にあつて、事を幸いに天下を奪わんとでもするのなら問答は一切無用だ。しかと腹を割つて申せ」と。

それに答えて、師もろなお直は再度の使者を出し、「師直が本心は、君の御存知でないはずはない。讒ざんしや者の張本ども一類を悉く繩ことごとしてお下げ渡しねがいたい」と、今は尊氏へ対してさえ傲岸ごうがん、引く色もない。尊氏も、かさねての使者を以て「家僕の恫喝どうかつに会つて下手人を出したとあつては天下の嘲りあざけ、そのような前例をひらくことは罷りまかならん。さらば待て。畜生を相手とするのは哀しかな

いが一戦もぜひあるまい。尊氏も鎧よろつて起たとう。なんじ師直、よく我いっしに一矢を放はつてみせ得るか」と、きつく叱しかる。——ここで一時、交渉は絶え、両軍ともに寂せきと、不気味な真夜半を睨ねめあつていた。

が、まもないうちである。師直方から三度目の使者が邸内へ入った。そしてこんどは書面とした物を差出し「これが最後のいっさ一札いっさでござる」と捨て言葉をおいて引きさがつた。

師直の一札は、執拗に、自分を陥れた一類五人の引渡しをかさねて求めたものだった。もし、おきき入れなくば、ぜひもない儀と、暗に実力に出る旨もほのめかしている。

すなわち、その五人とは。

上杉伊豆守重能、畠山直宗、大休寺の僧妙吉みょうきつ。それに直義の奉行人齋藤利康としやす、同修理之進しゆりのしんのふたりの名をも加えていた。塀を境とした君臣両勢の対峙のあらしは、遠い所のものようではない。そこは真空のような一いちでん殿の室だった。

一通の奉書の状が、あらしの眼みたいにおいてある。

「……………」

決裂か、要求をいれるか、交渉再三のあげくに、たつたいま師直方から最後のものと提示してきた切札のごとき要求だった。――それを中においての、尊氏と直義とは、はてしない、無言の膝をじつと硬めあっていた。野中の二箇の石かのように冷たいのである。どんな他人といってもこんな隔絶感は持てまいほどな深い



割れ目がふたりのあいだに穴をあけていた。しかも哀しい骨肉の本能はかえって沸たぎりに沸たぎって体を離れた見えぬ虚空こくうで兄と弟のつかみあいをどうしようもなくしている長い沈黙なのだった。

が、その沈黙にも疲れてきたに違いない。やがて、静かに、

「どうする？」

尊氏のほうから言った。

この「どうする？」は二度目なのである。こんども直義はすぐ口を開かなかつた。こつちから訊きたいのだ。こんなせつぱつまつた心外な決定を弟にいわせようとするのは兄の卑怯ではないか。「御意にまかせます。直義としてはそれしかお答えのしようはない

い」

「ちがう！」尊氏は逃すまいとするものを抑えるように。「——師直がつきつけてきたこの最後の箇条に、何と最後の一言をくれてやるか、その返辞をそちらの胸に叩くのだ。わしの答えでは意味をなさん」

「心外でたまりません。かりにも主人が家来にこんな箇条をつきつけられ、しかも這奴しゃつの武力にここで屈するなどは」

「無念は無念だが、ひとつ悔やみを、わしとそちとで、何度いつても始まらぬ。すでにここを囲んだからには、師直も腹をすえてのことだろう。その求めを蹴れば、四門を破って、討ち入つて来るにきまつている。さもあらば、主人として、それに応戦せざるを得ぬ。そちとわしとが家来をあいにて斬り死にすることが、

さあ、どうかな？ …… 征夷大將軍尊氏と、副將軍直義とが、焼けあとに枕をならべて死んだとなった明日あしたを考えてみるがいい。分に合ぶわん。また世の笑いぐさだ。かつは野州やしゅう足利ノ庄から志を立ててここまで来ながら、きょうまでの苦心功業もすべて水の泡あわでしかあるまいが」

「ですから、ぜひありません。直義に腹を切れとなら、腹を切るまでのことです」

「ばかな。たれがそちに腹を切れと仕向けたか。師直も、そちを渡せとは言っていない」

「が、腑ぶにおちぬのは、兄者の御態度だ」

「どこが、どう？」

「かくまでの師直の暴悪を、兄者は真底しんそこでは憎んではおられぬように見える。お口では強い返事を使者にいわせておられるが」  
「それよ、師直は尊氏の家僕かぼくだ。家僕の悪業は主人の落度。たれを恨もう」

「では、家来のこのような暴挙も、お心ではゆるしておいでなのですか」

「ゆるされぬ無道と怒いかればこそ、万一の一戦も覚悟はしておる。それが尊氏の立場なのだ。自嘲するしかないわしなのだ」

灯は細まっているのに、たたみの上の奉書は、紙の白さをなお白く見せていた。いつか夜明けていたのである。遠い堀のそとからは師直の軍勢が波騒なみさいの中に似るここへ、最後の返答をうなが

すようななどよめきを朝と共に性急にしていた。

最少な犠牲の下に最良な切抜け策をと尊氏は考えている——。それには師直の要求の一部を容れ彼をなだめることでしかないが、直義はいぜん岩みたいな姿にみえるだけである。自分からそうしようといつて妥協に出るふうはない。それが哀しい性かなを形さがに見せつけられているようで尊氏にはつらかった。

「……直義。観念のしどころだ。そちも師直を憎むのはよせ。憎悪は何の解決にもならん。それよりは、ちと反省してみないか」  
「これは」

逆に、直義は色をなした。

「私への、御批判ですか」

「そちにも、行き過ぎがなかったとは申せまい」

「条々、実例をあげて、仰つしやつて下さい。足利家のために悪しかれと思つてしたことは一度たりともないつもりだ」

「そこが過信だ。悪意でない害も往々おうおうにある」

「わかりました」——直義は冷ややかになりきつて。「そこまで御大切な師直とあるなら、もはや何をか申しませう。ですがこの春、養子直冬ただふゆが中国へ赴任して、自然、調べ上げた機密によれば、師直が地方武士のあいだに自己勢力を扶植しようとして、いる諸沙汰しよざたには将来恐るべき下心がはつきり見える。いまに臍ほぞをお噛みなさらねばよいが」

「ふむ、直冬がの」

まったくこの場には無関係な感傷が尊氏の胸をふと墨すみのようにした。——藤夜叉が生んだ不知哉丸いさやである。いちども膝ひざに抱いたこともない子だった。不愾ふびんな生れ性ではあった。けれど直義ただよしの養子となり一方の若大将となつてからの直冬ただふゆの眼はつねに尊氏を冷たく刺した。非情な実父と恨んでいるのか、何か責めてやまない白眼びやくがんにみえる。それが尊氏にはたまらなかつた。棘とげのつらさの余り嫌けん厭えんになつた。

その直冬の西国下向こそ、直義の異心の準備だと、師直は進言している。また直冬自身が、やがては養父の直義が天下に君臨することを望んでいるとも、他から尊氏の耳には入っている。

もちろん尊氏は信じない。けれど直冬のひがみといい、母の藤

夜叉へ自分が過去にしたことといい、充分、彼には罪の意識があった。拭いがたい呵責かしゃくをわれとわが身みにしているのである。そのうえに、つい先頃は、身の毛をよだてるような一事もあつた。

なにかといえば。

それは二十日ほど前に遭遇そうぐうした四条勧進かんじん田楽でんがくの大椿事だいちんじのときである。——幸いに、尊氏夫妻のいた棧敷さしきはすこし傾いたのみで難もなかつたのだが、あの折、舞台がかりの出でから半開きの扇を眉みえに見得みえを見せた女役者のおもざしが「あつ、藤夜叉か？」と尊氏の眸まゆをはつと怪しませ、ときも同時に、ごうぜんと、あなたの棧敷けん百十間ひゃくじゅうかんがくずれ落ちて、死傷数百人という阿鼻叫喚あびきようかんが、刹那せつなにおこつていたのであつた。



「……………」

尊氏は妄想を追うように、意識をかえた。今はそんなことを思つてみる時ではない。また、この場所でもなかつた。

ついにさいごまで、直義は尊氏がいうところの反省もせず、師直との妥協にも、自分からは口をあかずにしまった。だが尊氏がやがて彼に諮<sup>はか</sup>つた最終案には、

「こうなつては、いたし方もございますまい」

と、冷静に澄みきつて、それに逆らいもしなかつた。

そこで、師直との交渉が次の提示のもとにはこぼれ出した。

——上杉重能、畠山直宗の二名は、流罪に処する。また直義の奉行人斎藤利康<sup>としやす</sup>、修理之進、僧妙<sup>みょうきつ</sup>、吉の三名は、すぐ邸内か

ら師直方へ引きわたす。

さらに当とうの直義は、今後、政治の面からは一切身を退く。そして鎌倉から尊氏の嫡男よしあきら義詮よしあきら（幼名、千寿王）を呼んで直義の後任にすえる、という条じょうこう項こうだった。

「ふ、ふ」

と、直義はこの交渉を、兄と師直との芝居であつたもののように心中では冷笑していた。

「やはり兄の本心は義よしあきら詮あきらを自分のあとめに正しく据すえねば安心できなくなつて来たのだらう。……この直義にも一子如意丸があり、直冬という養子もいる。また一族や武士の腹を疑えばみな一つでない。そこで将来をおそれ、次代の將軍家の座をいまのう

ちに固めておこうとして打った手ではないのか。いや、義詮の一条項を、これへ持ち出したのでもそれは読めるといふものだ」

兄のそんな偏愛と師直の奸策とが結ばれて、自分のこれまでに尽してきた半生の功も、副將軍の地位も、いっちょよう一朝どきにいま、剥はぎ取られたのかと思うと、直義は煮えるような怒気と淋しさとにくるまれた。蒼白な自分の顔が自分でわかるほどだった。

やがて邸外には万雷のような歡かんせい声せいがわいていた。それも直義を口惜しさに齒がみさせた。目的を達した師直方は、ほこらしげなどよめきをくり返しつつ引揚げて行つたのだった。合戦にはならずにすんだが、不吉な朝の太陽に思われた。そのうえ、このさい嫌なことがまた一つあつた。

僧の妙みょうきつ吉きちがいつのまにか逐ちくてん電でんしていたのである。ために妙吉だけは、この朝、師直方へ引渡されずに終っていた。のみならず以後も長くこの怪僧はついに姿を現すことがなかった。本来は、直義に深くとり入って、こんどの事件を醸かもし出した元兇であったはずの者だった。奇怪というほかはない。後に説をなす者は、彼も北畠親房のあやつる五列の一人ではなかったかとも言ったりしたが、しかし後の南朝方にも、ついぞこの怪僧らしい人物は見えてない。

いずれにせよ、南朝方のよろこぶ足利家の内ないこう証しょうは、これによつて大きな肉の裂け目を、白はくじつ日にさらしてしまった。すでに曝さらされた以上はなお果断に果断をとつてその根絶を計ろうとするの

が当事者の常道である。師直はそれへつきすすんだ。

越後へ流された上杉重能と畠山直宗は、そのご流刑地で暗殺されてしまった。もちろん師直のさしずである。

噂は噂を生じ、直義の身近にも暗い翳かげがさしてきた。いつとも知れぬ危険を直義自身も感じずにいられない。で彼は、一切の権力から身を引いたのみでなく、頭をまるめて、名も恵源えげんとあらためた。そして錦小路の門に蟄居ちつきよしていたが、もちろんこの謹慎は心からなものではなかった。

むごがわしまつ  
武庫川始末

あくる年の四月ごろ。

「あの、おかしげな法師も、とうとう亡くなったそうだよ」

と、町で噂する者があつた。

おかしげな法師とは、吉田兼好けんこうのことであつた。当年六十八

であつたという。

ならば双ヶ岡おかの草庵で長く病んででもいたのか、旅先で果てたのか、

よくもわからず、またその死を悼いたむ者もない。

ただひとつ想像できるのは、きつとあの幼少からの一弟子が、

もう雀をふところに飼う寝小便小僧ではなく、りっぱに成人して、

師の枕元に死ぬまで侍かしずいでいたであろうことである。そしてその

めいし命松丸ようまるは、

「なむあみだぶつ……。ああ、お師匠さんはえらかったな。一代、こんな世の中だった人が人も害めず自分も殺さず、けっこう毎日を楽しんで暮しなすった。修羅六道しゆらろくどうの地獄の世を、あの深い目で見物しに生れてきたようなお人だったが……。もうあの意地のわるげな笑い顔、慈悲と憐れみを交まぜた皮肉なおことば、そしていつも権力気狂いの人間たちを哀かなしんでいるようなおすがたも、ふつと、どこにも見えなくなったのだ。ああ、淋ひよしい」

と、また元の孤児に返って、師のあとを、飄ひよとうらぶれ歩いて  
 いるにはちがいなかろう。

ずっと後のことになるが。

この命松丸に行き会った今川了俊りようしゆんが、

「なにか兼好のかたみでも残っていないか。あの法師のことだ。書き残した物でもあれば、それはさぞ面白かろうに」

と、訊ねたところ、命松丸はそれに答えて。

「はい、お師匠さまは、筆まめではいらつしやいました、一つも世に残そうなんていうおつもりはなかつたようで、反古ほごはそばから紙衣かみこや何かかみこに使はつてしまひ、残のこっている物といへば、旧もとの草庵くさあんの壁かべやら襖紙ふすまに貼はつた古反古ふるほごがあるぐらいでしかございませぬ」

「ほうそれだけでもそれは見つけものだ。費用は出すから、ひとつその壁かべや襖ふすまに貼はられた反古ほごを剥はがして来て、わしに見せてくれんかの」

命松丸もそれはよい俵しのぐさ草ぐさともなり、またあれほどなお人の文



字をもつたいないことだとも考えて、ならび双ヶ岡おかや吉田山の旧草庵の物をていねいに剥がして、やがて今川了俊の手もとへとどけた。

それは分厚い一ト束たばにもなる反古かさの量だったので、ふたりしてこれを整理ほんどく翻読したすえ、帖に編集したものが、すなわち後世に長く読みつたえられてきた古典「徒然草」つれづれぐさになったのだった。

ふしぎな宇宙の識別というしかない。不壊ふえの権力とみえる物も、時の怒濤の一波のあとには、あとかたもなくなり、反古に貼られた一法師の徒つれづれ然な筆でも、残るいのちのある物は、いつの世までも持ちささえてゆく。

だが、兼好の逝った正平五年（南朝）はまだまだ足利家の内争が真二つにわかれた直後で、彼の死などは、一片の枯葉こしょうとも見る者

はない。

同年の十月。

蟄居ちつきよ中の足利直義ただよし——頭を剃えげんつて恵源えげんといつていた直義は

——とつぜん京都から姿を消した。

石堂頼房をつれて河内へ奔はしり、河内の石川城にいる同族の畠山

国清の許にかくれ、南朝の朝廷へ、帰降ききょう（降伏）を申し出たので

あつた。

直義のとつた行動はじつに思いきつている。

いうならば足利系総氏族の大分裂を自身からしたものにはかならない。しかし彼によるこの大爆発の降こうかい灰かいを浴びても、その外輪や裾野をなしている一族諸武士は、

「やったか、ついに！」

と、さまで震駭しんがいの色でもなく、後の南朝への投降も、半ば必然に來た休火山の噴煙みたいに見ていたのはふしぎといつてよい現象だった。

それに反して、さつそく、活気のある朝議となっていたのは賀あ名生のうの山村の朝廷である。暗澹あんたんたる前途に一道いちどうの光明をここに見たのだ。

しかし、飢えの手が物にとびつくようではない。北畠親房は充分こんどのことには疑いをもっている。——彼は疑惑と利用の両面を胸に用意して、ひそかに某所で直義と会った。その結果、直義の降こうは容れられた。

直義は、帰降の誓文せいもんをさしだした。それには北朝の年号を用いず、南朝年号の「正平五年十二月」と書いた。そしてただちに挙兵にかかった。いまは師直のみが相手ではない。兄と戦うのだ。兄と戦うには名分がなくてはならない。「——南北両朝の対立を解消して、正しい一つの朝廷に帰一する」。それを名分にとつたのである。

ときに、尊氏とはといえば。

彼が弟の豹ひょうへん変を知つたのは、備前福岡城にいたときだった。つまり京都をあけていた留守中の出来事だったのだ。

それ以前に。

高こうノ師もろやす泰いは石見いわみへ出陣していた。つづいて尊氏も師直と共に

自身中国へ下向げこうしていたのである。——直義の失権に憤慨した養子直冬ただふゆが、西国の叛意をかきあつめて、すてておけば大挙、京都へ攻めのぼつて来そうな氣勢に見えたからだった。

ここでも尊氏は、実の親を怨む子を戦野せんやに捕えねばならない破目になつていた。尊氏は、直冬をとらえて、出家を命じようぐらいな考えでいたのだが、叛逆の子は猛つて親の軍へさんざんに抗あらがつた。——そして戦いに破れると九州へ逃げ落ちてゆき、直義と仲のよい少弐しょうに頼尚よりひさのふところへ拠よつてしまった。のみならず、西海の反師直がたも、みなその一幕下に凝集ぎようしゆうされ、尊氏の意図は、かえつて思いもしなかつた自分からの離反者を漠々ばくばくたる彼方に見出だす結果となつていた。

そんな軍旅の出先で、

「なに、直義が？」

と、彼は留守中の変に耳を打たれたのだった。「どんな事に会つても物に動じたことのない人」と夢窓国師も言つた尊氏だが、はたしてこのさいどうだったか。子は親の敵をあつめて西に大敵国をつくり、弟は奔つて南朝に降り、南朝の旗をかりて兄へ弓を引いて来たのだ。しかもいまや彼は出先の孤軍でしかない。

「義詮よしあきらは都にいる」

残してきた最愛の嫡男ちやくなんだけがひたすら彼の心配であつた。

——年を越えつつ尊氏は備前から京都へ急いで引つ返した。——  
だが途中で、もうその義詮は父に出会つた。直義方の桃井直常に

追われて京都を逃げ出して来たのである。

ある大事なものが、人間社会からいつか失くなっていた。それは曲りなりにもまだ護持しあっていた道徳というものだが、一た<sup>いっ</sup>んこれを無視し出して、無視する方が、世の勝利者だとなつて来れば、いたるところでこの約束の破棄<sup>はき</sup>は始まつてくる。悪が悪でなくなり勝利者だけがいくらでもあとから自己を正当づけ得る。

こんなでたらめな状態が自分の理想した幕府の劈頭<sup>へきとう</sup>にやつて来たかとおもうと、尊氏は慚愧<sup>ざんき</sup>と怒りに燃やされた。わけて京都を追われて逃げ出して来た義詮のみじめな姿は、我慢がならないものだった。

「懲<sup>こ</sup>らさねばならん。懲らしに懲らす、それだけが、秩序を回<sup>かえ</sup>す

道でしかない」

彼はただちに義詮をつれ、師直を先鋒せんぽうに、京都へ入った。

直義に应じて、北国から洛中へ攻めこんだ桃井直常の七千人は、もう師直一族の第館ていかんなども焼き払い、北朝の御所をさえおびやかしていた。

尊氏はさしずめ洛内の留守においた佐々木道誉らの兵が、それに应じて苦戦中かと察していたが、その道誉の軍はどこにも見えない。

「すでに近江へ帰ってしまったらしい」との沙汰がある。

ぜひなく、急使をやって、叡山へよびかけた。

近江三箇荘を与えようという好餌こうじのもとに、協力を求めたので



ある。だが叡山はその前日、直義ただよしの墨付すみつきで、すでに近江三箇莊をもらつていた。当然、あいまいな態度でしかない。

しかし、尊氏の手兵は、二条三条の辺で、揚言どおり桃井勢を二日にわたつて打ち懲らした。桃井勢は破れて、法勝寺から白河のおくへ逃げ退いた。——尊氏はその夜、ひとまず二条千手堂の吉良邸を陣營とし、そして、諸所の山野に分散して旗色を見ているらしい一族家臣の徒とへ教書きょうしょを触ふれまわした。

「このさい去きよしゆう就しゆうを過るな。おれはここに帰つてゐるぞ。一人はぜひなく直義についた者といえ、前非を知つて戻つて来るなら、おれはその非を追求しない。幕府は成りその功業を約しよして緒しよについたばかりではないか。みんな帰つて来い！ 尊氏を信じて

元の列へ戻つて来い！」

しかし、教書の反応はほとんどなかつた。この論告はかえつて尊氏の窮地をまぎと響かせたものとみえ、逆に、直義の方へ奔る者が多かつた。斯波高経、今川範国、二階堂時綱、小笠原政長、上杉朝定、同朝房。

そのほか、南流して去る兵旗ばかりである。

山名時氏のごときは、きのうまで尊氏の下にいたのに、この趨勢を見ると、尊氏を離れ、一夜、とつぜん直義方の八幡の陣へ投じてしまった。

「こんなものか？」

泡のような眩きが尊氏の胸に消えた。これまでにしてきたこと、

見つけていた人間の顔、すべてが信じられなくなった。いや洛中にいることすらがすでに危険になっていた。

「ぜひもない」

一時、都を退いて、陣容をたて直すときめ、よしあきら義詮や師直と共に、尊氏は丹波へ走った。そしてまた播磨の書写山へ移り、そこで石見から馳せつけて来た高ノ師泰ころうもろやすの一軍とひとつになった。

細川あきこうじ顕そむ氏が反いて窮地の尊氏をさらに窮地におとし入れたのは二月十四日だった。四国もついに彼から離れたのである。

「顕氏までがか？」

尊氏は耳を疑った。師直、師泰にたいする反感が、顕氏までを

敵側に走らせたものであると分つていたが、それにせよ今はどこも四面楚歌である。腹をすえる時だと思つた。

「道は一途。このうへは直義と話がつくか、さなくば、一戦もせひあるまい」

書写山のかこみを破つて、十七日、師直、師泰の兵を先手に、兵庫へ出、さらに御影街道へと、怒りの奔流を見せていた。

が、それあるを予期していた畠山国清、石堂頼房、小笠原政長らの軍に待たれて、尊氏以下は、打出ヶ浜でさんざんな苦戦にまみれた。——師直、師泰もこの日に負傷し、疲労困憊のかたまりのような残軍を湊川まで引いて、残る将士をかぞえてみると、寥々、一千にも足りなかつた。

尊氏が、自決をかくごしたといわれたのは、このときではなかつたか。

彼はいくども死地に陥った経験をもち、同様な噂を何度もこれまでの経歴には持つて来ている。だが彼は本心から自刃を考えたことは一度もない。彼は物の終りという考えを知らないのだ。追いつめられた運命のどたん場にはなおその活機が働くのである。禅がものをいうのかもしれない。自意識でなく現実の自己は突つ放している。そしてほかに何か寸秒の転機でも待つかのような無表情をただその顔に持つだけだった。

すでにどこかで、この晩あたりは、夢窓国師の和解の<sup>あっせん</sup>斡旋が、おこなわれていたのである。が、尊氏は知っていない。しかし彼

の考えついたことも、直義との和睦であった。——夜半、旗本の饗庭氏直は、彼のむねをおびて、直義のいる八幡へ馬をとばして行つた。あとの尊氏は、魚見堂で眠りについた。

なぜか、この魚見堂で眠るときは、いつも彼の運命は巖頭にあつた。筑紫落ちの前夜、また九州から再東上の日、そして今夜――

「真光寺の墓は、どうしたろうな？」

自分の手で吊つてやつた正成の首が彼の臉をたゆたわせていた。すがすがしい一個の生命は眠りの中で思つても寂かな池の花でも見ているようで気もちがいい。いまだに地獄の火坑から脱け出られない自分にかえりみて羨ましかつた。

「おう、そういえば、右馬介もあれきりわしの許へ戻つて来ぬ」  
 むしろ彼のためには、それがよかつた気さえして来る。幼少から自分の傅人役として仕えてくれた右馬介がもしここにいて、この君臣相剋そうこくの乱脈やら父子兄弟の戦いなどを見ていたら、彼は身をおくに所もなく、発狂していたかもしれぬ。

——饗庭あえばは一日おいて帰つて来た。講和はいれましようかと直義は言っているという。

当然、条件が提示されて来た。師直、師泰の引渡しだった。それが主である。だが、尊氏にはこれが呑めない。そのため、相互の使者の往返おうへんが三、四度にもおよんだ。結局、師直、師泰は高野山へのぼらせて生涯を出家遁世しゅつげとんせいに終らせる。これなら尊氏

は二人へ告げて観念させることができるとしたのである。

直義は容れた。

「さつそく、御自身、両名を伴つて、連れ上つていただきたい」と。

直義との再三な交渉のすえに見た和解の条件を、親しく尊氏から聞かされると、師直は、不敵な日ごろの顔も失くして、その温情に泣いた。

「それがわが君にとって残されたただ一つの活路とあるなれば、何で私に異存ございましょう。よろこんで頭をまるめ、いつの日か、ふたたび出て来いとお召がかかるまでは、きつと遁世とんせいをよそおつてよき日をお待ち申しております」



そして彼は彼で、弟の師泰を切になだめた。ここは辱も我慢も  
 忍ばねばなるまい、死一等を減じられただけでもぎようこつ僥倖とせね  
 ばならぬ、と。

師泰もまたいまはあきらめきつたふうである。すぐ連れだつて  
 近くの真光寺へ入り、髪をおろし、法衣に着がえ、笠、きやはん脚絆な  
 どまでこ請うけて、

「さて、有為ういてんぺん転変。おかしな姿をお互いに見たものすな」  
 と、相見て笑つた。

すると一族の薬師寺公きんよし義がそれへ来てしきりにいさ諫めた。

「約束はどうでも、先へ行けば結局、敵手にお身をまかせるしか  
 ない。はたして直義の禅門が心から憎しみを解いているかどうか。

さらには越後の流刑先で横死おうしした畠山直宗や上杉重能の家来どももいることです。彼らが怨みをすてるとは思われません。……むしろここには、まだ千余のお味方は残っていること。花々しく一戦をとげ、武士は武士らしく、御運命を決すべきではないでしようか。そして大御所は、そのあいだにお姿を変えて、中国の赤松をたよつてお落ちになるがよいかと存じまする」

だが、師直は容れず、師泰もまた、一笑に附して言った。

「公きんよし義、名よりは実だよ、当世ではな。向うに二重の腹があるなら、こつちも三重じゅぼら腹になって、幾変化でもして見せるわさ。生き抜いた方がさいごの勝ちというものだ」

「……………」

公義は、何もいわず、悄然と退がって行つた。晩になると、こまかい雨になり、明朝はここを立つのかと思うと、師直師泰も、さすが心はおだやかでなく、剃りこぼった頭を寒げに、一穂いっすいの灯を無口に見合つていた。

そこへ寺僧が来て、ただいま、昼見えたお武家が、この一通を殿へとばかり言いおいて、暗い雨の中を、どこへともなく駈け去つて行かれましたとのことに、開いてみると、それは薬師寺公義の筆で、ぶつりと切つた髻もとどりと共に、文言はなく、一首の歌だけが収めてあつた。

とれば憂うれし

取らねば

人の数かずならぬ

捨つべきものは

弓矢なりけり

後に、この公義は、高野こうやへ入つて、僧になつていたことが世にわかつた。けれど師直師泰のふたりにはもうこの歌が誘う眞実なさけびもまにあわなかつた。……まもなく、二月二十六日の春寒い小糠こぬかあめ雨の朝は明けていた。

尊氏は魚見堂を出、敗残の兵千ばかりが、その前後にしたがつた。——師直師泰も馬には乗つたが、いわば敵人へささげられる体であつた。沿道の人目を恥じてか、蓮はすの葉笠はがさを眉深まぶかにふせて、悄悄しおしお々と列の中に交じつた。

蓮の葉笠とはどんな笠か。網代あじろより深いわんなり椀形の紙の塗笠ぬりがさか  
 もしれない。ともかく、師直も師泰もよほど人目をきらつたとみ  
 える。意識的に馬混みの間を行き、いつも尊氏の背が見えるぐら  
 いな所にいた。

兵庫を出はなれると、はたして道の両側には敵兵の顔がたくさ  
 ん並んでいる。「あれが執事だ」「あれが越後よ」という呟きが  
 耳を刺す。尊氏の姿をさえ笑って見物している雑兵らなのだ。こ  
 のみじめな敗北感すねは馬も知るのか、ぬかるみを行く無数の長い脛すね  
 にも力がなかつた。

武庫川むこがわの辺まで来ると、春の小糠雨こぬかあめは急に山からと海からと  
 の風に掻きまわされて、痛いような水粒すいりゅうが笠の下へも吹きつ

けてくる。——師直の馬はしばしば物驚きをしてあと退去ずさつた。

——「途中、お迎への者どもでござる」「お送りに加わり申す！」などと口々に列の横から割り込んで来たとびいろ鳶色一揆きの騎馬隊があり、それらの者が立ちふさがって、尊氏と師直とのあいだをいつか十数町も隔へだててしまった。

すると土手の片側から、徒士かちの中間ちゆうげん者がふたり這い上つて来て、やにわに槍をつきつけ、

「顔を隠してゆく奴は誰だ」

と、言った。いや、すぐもう一人の方は、

「笠をとれ。とらんか」

と、槍の石突きを逆に上げてぱつと蓮の葉笠を下から払った。

笠は飛んで、頭巾だけのまるい頭がのけ反ぞった。

「執事だ」

二人がともに叫ぶと、師直のうしろへ馬を寄せていた彼らの主人三浦左衛門が、

「やはり執事か」

と、長なが刀なたの振幅なぎなたいッぱい師直を斜はすに薙なぎ上げた。が、それは顎あごをかすめ、師直は馬と共に匆はげね躍はッて次の刹せつ那なに肩から胸へ長刀の光を唾くわえ込こむやいな絶叫を吐いて落馬していた。

「あら、うれし」

三浦は首を搔かッ切きつて、長刀のさきにつき刺し、大声で後ろの仲間へ触れ廻まわつて行いつた。仲間はほかにも多おほかつたのである。さ

きに越後で殺された上杉重能の子、上杉能憲よしのりの部下と、畠山直宗の遺臣たちであつたのだ。

「や、や？」

師泰は、半町ほどおくれたが、白い糠ぬか雨あめの異様などよめき立ちに、あわてて馬を返しかけた。そこを、吉江小四郎の槍のために、

「思い知れ、越後」

とばかり背から乳下まで突き抜かれていた。この首もすぐ中ちゆう間げんどもの手で寄つてたかつて掻ツ切られる。さらに、ずっと後方の鷺林寺しゅうりんじ門前では、高こうノ一族の師兼、師世、師夏、師幸もろゆき、師景など、みな武装は解かれていた身なので、ほとんど抵抗らし



い抵抗もなしえず、すべて、みなごろしにされてしまった。

中でもあわれだったのは、師直すらがああの目を細めて可愛がつていた師夏である。母は二条前関白の妹いもとぎみ君だった。十三歳であつたという。

復讐の血に酔つた上杉、畠山の両党は、凱歌のような雑言を揚げて、はるか後方から尊氏の列をさらに追い立てていた。尊氏の官能はほぼ後ろの変を知っていたろう。もちろん彼らの暴挙は、その計画的であつた点からみても、直義が黙許の下に行われたことだつたにちがいない。

あんでんこくち  
暗天黒地

「今が満開だな」

と、尊氏がつぶやく。

答えるでもなく、直義ただよしは、ぽつんと言った。

「嵐山もむかしはただの山だった。こんな見事な花の山でなかった。昔といつても、人の半生にも足りないほどな歳月のうちだが」

よしあきら  
義詮もそばにいた。

だが義詮はだまって酒杯さかずきをふくんでいた。二十二歳である。

自身、自分を花と誇っている年頃である。

花見にしてはしめやかな宴であった。どちら側がわの臣もこの席に

は一人もいない。所は洛外の西方寺で花の廂ひさしから花の山が望まれ

る。——世良親王の河端かわばたノ宮の遺跡いせきに植え出したさくらがいつか花時には大堰川おおいがわの水も小紋にして見せるほどな名所となつて来た始まりであるという。

三月二十一日で、この前日には、三条河原で武家一般の犬追いぬお物が賑やかに興行され、二日つづきの盛事であつた。

尊氏と直義との和解を、ひろく世間に知らせる意味と、大きな亀裂きれつを表面化した武士どもの心を溶とけ合せようという目的もこれにはあつた。

順序としていえば、前月の二月二十六日、尊氏は降人こうじんとして、終日のぬかるみと小糠雨こぬかあめにまみれた姿で京都につき、夜、上杉朝定ともさだのやしきに入った。「——あたかも流人るにんのようであつた」

とは、当時の状を目撃した路傍の人の声だった。

直義はそうでない。

彼はいまや兄の上にいる。執事の師直以下、高家一族を葬り去った快を満喫している勝者だった。彼は、尊氏より一日おそく八幡から入洛して、錦小路の自邸に入り、斯波、石堂、山名、桃井の諸将に囲繞され、なんととしても、威風りんりんたるものがある。

すぐ時局收拾の相談もすすめられた。しかしいまは直義が主体で、尊氏は従でしかない。

尊氏は、希望した。

「政務の主権は義詮におき、直義はそれを扶ける地位にあつ

て欲しい」と。

直義は承認した。

尊氏は、もひとつ求めた。

「自分に附随ふずいして今日までひとつに來た將士へも、直義へ附いた將士と同様、すべてに平等な恩賞を授与じゅよしてやりたい」

それも、直義は受け入れた。その代りに直義もまた一条件を尊氏に吞ませた。このさい正式に、直ただ冬ふゆを九州探題にするということだった。

これで一おう和解は円満にまとまったといえる。内ない証こうは一時的な紛ふん糾きゆうにすぎない。幕府は微動もしない。今日の西方寺の花見の宴はよく世上にそれを映す意味においても心からな人と花

との融和ゆうわでなければならなかった。だが、尊氏の見る花、直義の見る花、義詮が見る花、みな違う。三者三様だった。杯も冷えがちに、ともすれば、どうしようもない白々しさが寒々とそこらに漂ただよう。

「こんな日には」

尊氏は直義の横顔を見た。

「やはりあいつがないのは淋しいな。そうは思わぬか」

「あいつとは」

「道誉だ」

「道誉。なるほど」

「それに師直もろなおなども、無事でいれば、今日など賑やかに振舞う

やつだ。思えば武庫川の日から今日はちょうど二十五日目だな」

挑むものへ挑みを以て返すように、直義の眸は光った。

ふれたくない。思い出したくもない。尊氏にはよく分っているはずだ。それを何でこんな席で言い出したのか。

「ご催促とみえますな」

直義は、兄の底意に腹が立って、わざと自分から話を露骨にした。

「師直、師泰の死から早や二十日の余もたっている。だのになぜ、下手人の上杉能憲よしのりを依然そのままにしておくか。それがお気に食わんのでしょうか」

「いや、そんなつもりでもないが、しかし処置は早いに越したこ

とはなからう。和解の実を衆に納得なつとくさせる上にも」

「ですが、あの日、武庫川に待つて、師直以下の眷属けんぞくを襲殺したのは、能憲よしのりの下知げちではなく、さきに師直のために越後で殺された上杉、畠山の遺臣どもが、主の恨みをふくんで勝手にやったことだとか。事実、能憲はなにも知っていないのだ。罰しようはありませんまい」

「なくはない」

尊氏の眸は、そう言う直義の卑劣さをあきらかに突き刺していた。

「師直師泰の一命は保障する。出家遁世とんせいの条件のもとに——と。それがこの尊氏と直義との間に結ばれた協定の一つではなかった



か。——しかるに、能憲はわしとそちとの和睦わぼくに先だつ約束をま  
 ず第一に破ツた。そちがこれを不問にしておくのさえ心得がたい。  
 あらぬ取沙汰がいつまで根を絶たぬのも道理。ここは賢明にその  
 処理をとらぬと、すべてが嘘の始まりになる」

「よく考えておきましょう」

「む、考えてくれい」

西方寺の花見は味気ない散会をつけて昏くれた。もちろん扈從こじゆう  
 の臣や公卿などはけつこうはしやいでひきあげたが、なんといつ  
 ても尊氏、直義、義詮よしあきらの心から溶けきれない容子ようすは、衆目しゆうめ  
 も映つて、その一抹まつな危惧は、夕霞ゆうがすみと共に都の内まで尾を曳  
 いて行つた。

まもなく。

上杉能憲よしのりは流刑になった。同時に、直義の厳命で、師直師泰の余党検挙が、各地の国元や洛内でその日から開始された。

すると、そのまた反動だろうか。

覆面の刺客しかくなる者がやたらに跳ちようりよう梁し出してきた。一、二を

いえば、直義が院参の帰り道を襲撃され、直義は難もなかったが、随身のひとりが斬られた。

桃井直常も同様な目にあつた。彼は直義の邸を訪問して深夜を帰る途中だった。すべて何者のしわざとも知れないのである。

こういうふうで、直義と義詮との一体政治も、空念仏に過ぎず、むしろ両者は疎隔するばかりであつた。六月の或る夕、直義が義

詮を訪ねたが、なぜか時も措かず、すぐ門を辞し去ったことなどもあり、その不和はもう公々然な悪気流を呈していた。

都もこうだし、九州では、新探題の直冬ただふゆと、旧探題の一色範りうじ氏とが、以後、九州を二分して、大合戦に入っている。

また信濃では、尊氏の党と称する小笠原と、直義方の諏訪すわとが、勝手な戦争をはじめてしまった。すべてたれの意志でもなく宇宙の雲間で振る魔のムチにうごかされてでもいるような憑つかれた人々の妄動と不安にみえる。

その疑心暗鬼を、日がたつほど、いよいよ深めていたのは、尊氏でなく、なぜか直義ただよしと、その周囲の者たちだった。

それには、こういう例などもあったのである。

細川あきこうじ顕氏は、さきに尊氏を去つて、直義方へ付いた一將だが、嫌いな執事の師直ものぞかれたので、尊氏の許へ、お詫びにと、会いに行った。

すると、尊氏は、

「降参人が旧臣の伺候を受けるのは畏おそれがある」

と言つて、会わなかつた。

顕氏は、ふるえあがつて退きさがつたということが、とういんきん洞院

かた公賢の日記にみえる。公卿にさえ聞えたことなので、一般の武士間にもひろまった話なのであろう。いかに彼らが心底ではなお尊氏を恐れ、そして直義との実力差を、暗に見くらべていたかわかる。

直義は焦躁し出した。自分の位置の不安定感が日と共に事実化されてくるのが分り出してきたのである。

重荷もあつた。

南朝方への帰順と降伏条件の交渉だつた。その懸案も苦しかつた。

だが直義は主張をかえない。

「両朝合体のうへは、どんなお望みも容れましようが、ただ政権だけは従来どおり、武家へお委せねがいたい」と。

もしこの一箇条をくずしたら全武士の支持は幕府から去るだろう。直義個人の存立もおぼつかない。

もとより南朝側の欲するところも、後醍醐いらい変らないそれ

にあつた。もつれるだけで成立のはずはなかつた。

尊氏は、この交渉を、黙つて見ていた——。

北朝の朝廷でも、内々この合体はよろこんでいない。武士に不人気なのはいうまでもなく、直義の姿にはようやく孤立の翳かげがさしかけていた。

そんな時も時だつたのである。尊氏は俄に、

「あれいらい、佐々木道誉は、近江にこもつて、よしあきら義詮めしの召めしにも応ぜず、ひそかに款かんを南朝に通つうじて、事をたくらむとの噂もある。奇ツ怪な二た股者」

と、呼号して、とつぜん、近江へ向つて出陣した。兵はそう多くもなかつた。しかし、兵を石山寺にとどめて、伊吹の道誉と、

即日、何やらしきりと使者を交わしており、どうも事態はただのけんせき譴責や合戦に入るもようではないとある。

それいぜんに、また。

義詮のそばにいた土岐頼康、細川頼春、仁木義長、義氏、赤松さだのり貞範なども、帰国ととなえて、次々と都のそとへ去っていた。

——つづいて当とうの足利義詮も、陣装して、何の故か、

「播磨へ行く」

と号し、播磨へは行かず、洛外の東寺に陣取った。

いってみれば、尊氏よしあきら義詮よしあきらの父子が東西にわかれて、都の出

口をふさいだ形でないこともない。——七月二十七日から三十日朝までの急変だった。——直義にぞくする諸将の党が、俄然、大

動揺をみせたのはむりもない。

彼らはぞくぞく錦小路殿へ駈け集まった。斯波、桃井、上杉、山名、畠山、諏訪、宇都宮など名だたる武将どもである。度を失つてはいなかった。むしろ望むところと今日の驚愕を受けとつた風でもある。そして即刻にと、直義へ北国落ちの勇をすすめた。深夜の丑満うしみつ（午前二時）、直義はついに大原路から京都の外へ落ちて行つた。——いや、それらの叛骨と野望しかない武将どもに、拉致らちされて行つたとも見える急だった。

直義の脱走を、尊氏は石山寺の出先で聞いた。そのとき彼は多少の閑かんでも心にあつたのか。短冊たんざくを手に何か書きかけていたが、立騒ぐ周囲を見て「すべては運命というもの。俄に何の用心やあ



る」と、慌てた風もなかったという。すでに予期していたのかもしれなかった。

それで麾下きかの将士はおちついたが、ただ佐々木道誉と尊氏がこの数日交わしていた懸合けんあい事は何だったのか。むずかしいわだかまりにもみえ、なんの苦もなく解決されたことにも思われ、たれにもそれのみは分らなかった。だが元々、鶴ぬえの道誉の本性は尊氏がよく見抜いてい、尊氏の矛盾だらけな気の弱さや大ざっぱな特質も道誉にすればむかしからつきあい好き男として来たものである。あるいは両者の八百長かと、この交渉を感じとっていた者もないではない。

疑えばそうとも取れよう。尊氏は報を知ると、

「都はガラ空きか」

と、苦笑して、

「すぐ引き揚げずばなるまい。直義をかつぐ大名どもにも困ったものだ」

と、すぐ洛中へ帰つたのだつた。直義がとはいわず、直義をかつぐ大名ども——と彼はいう。弟を敵とみるのが嫌なのだ。

「おそらく直義の本心ではあるまい。直義に会つてよく話せ。何が不平か、何が不安か」

帰京第一に彼が打つた手は、細川顕氏を直義のところへ使いにやつたことだつた。

が、これはもう遅すぎた。

フクスエボシ  
覆 水盆ニ返ラズ、というものである。

どう憎んでも別れても骨肉同士はなお絆きずなと本能の苦悶を持つが、周囲には生木なまきの裂けた苦痛はなかった。与党の大名らにすればこゝろは自分らの一生も賭けた決裂なのである。いちど割れたものが寄つて、しいて和解してみても、一たん敵味方と睨ねめあつた人間の心に入つたヒビは、しよせん、そう一いっちょ朝には元のひとつになれないものだという経験もしてきたあげくの再分裂であつたのだ。

「おくちに乗つてはなりません。諸政はまかせると仰せられながら、執事師直をあのように利用されたことでもわかる。まして今は、義詮殿がいます。何で最愛なものをさしおいて、弟のあな

たに、政務や後事こうじを以後お託しになりましたか」

桃井直常をはじめ、斯波高経も上杉定朝も、口をきわめて、直た義だよしを諫止かんしした。——直義も帰る気はない。すでに越前の金ヶ崎城に入つて、自分の行動は遠近にひびいている。また、響きに応じて、加賀の富樫とがし、能登のとの吉見、信濃の諏訪すわ、そのほか、事を好む豪族は、みな彼が尊氏から離れたことを惜しむよりは歓迎していた。

車軸はもう廻り出している。直義にも制御せいぎよのつかない勢いだつた。氣勢は正面を切つて、尊氏を敵とし、あらゆる布陣と手を打ちはじめた。

朝廷をそそのかして叡山へ動座をうながし、北朝のみかどを越

前へ迎え取つてしまおうなどの策もすすめられたが、しかしこれは尊氏の阻止そしで失敗に終つた。——尊氏もまたもう状勢を坐視してはいられない。彼は彼のうごきに出ていた。

八月七日。

尊氏は、法勝寺の恵鎮えちんを賀名生あのうへやつた。南朝へ降を申し入れた重大な使いであつた。

「こは？」

と、南朝方でも一驚を喫した。尊氏は困っている。内も破れ外も乱脈だ。弟にさえそむかれて絶体絶命な窮地にあると、ここでも観ていたところだが、

「それにせよ、尊氏が？」

と、この申し出では、賀名生の朝議も、慎重をきわめた。そして朝議はこれを「拒絶」と決めた。もちろん北畠親房が主唱である。ここにはまだ統率の制が厳として生きていた。親房の手のうちもまた細かい。親房は言ったのである。

「先には直義が兄へ弓を引く名分上、偽って南朝へ降<sup>くだ</sup>つた。そのまずさを見ながら尊氏までがまた帰順を申し出てくるとは、よくよくか。または、さしも彼ほどな男だが、そろそろやきが廻つて来たか。……いずれにせよ、突つ返してもまた、再三申し入れしてくるだろう。断<sup>だん</sup>は、そのときにしても遅くない」

使<sup>えちん</sup>いの恵鎮は、事成らず、都へ帰つたが、もうそのとき、尊氏は京都にいなかった。

地方は地方で、中央の分裂にこたえる<sup>こた</sup>る<sup>ま</sup>の<sup>よう</sup>に、諸所で小合戦を起している。丹波、但馬<sup>たしま</sup>、伊勢ざかい。——その伊勢から甲賀へ打って出た石堂、仁木の党は、直義の党と合<sup>が</sup>して、佐々木一族の六角信<sup>のぶあきら</sup>詮<sup>せん</sup>を観音寺城に攻めて殺した。——この<sup>き</sup>狂<sup>きやう</sup>瀾<sup>らん</sup>に尊氏もじつとしていられず、自身、近江へ駈け向っていたものだった。

八相山（浅井郡）の二日間は、尊氏対直義の骨肉戦が、その皮を切り血を見せだした序戦の衝突として最も凄惨なくさであり、両軍ともに大きく傷<sup>きず</sup>ついたが、結局、直義の党はやぶれて北へ逃げ退いた。

この機<sup>しお</sup>に、また和議の声が、いずれからともなく呼びかけられ

た。

その声の出どころは、たとえば細川伊予守元氏のごとき侍の声  
だったろう。伊予守は、

「ばかな血みどろだ。戦場に出てくる顔は、みんな多年の友人で  
はないか。親しいほどでなくても足利家という大きな屋根の下で  
一つ釜の飯を食ってきた奴らばかりだ。どうしてそいつらと戦わ  
ねばならぬのか。意味はない。畜生の喧嘩だ。おれにはそんな弓  
は持てぬ」

と、単独で西へ帰ってしまったのである。そんな武士も居たに  
は居たのであり、しぜん講和の兆きざしもあつたのだった。

しかし、概がいしては両軍共に「諸将、コレヲ欲ホッセス」だった。で、



細川あきうじ顯氏や畠山国清らの奔走で、せつかく直義が敦賀つるがから近江の新照寺大御堂まで出て来て、親しく尊氏と和談をとげるまでの運びになつても、それはまた冷たい物別れを見てしまつた。——直義のそばに付いて離れぬ桃井直常や強硬なるほかの猛者もさどもが、和議をよろこばず、事ごとに話をくつがえしてしまつたものである。

顯氏と国清とは、それに怒つて、以後は尊氏方へ、はつきり寝返つてしまつた。元々、同身の分裂である、つねに離合りごうの定まりもない。

ことし七十七の夢窓国師が、この九月三十日入寂にゆうじやくした。

尊氏はそれも近江の陣で知つた。半生の導師、直義にとつても

貴重な師。

ひとつの緩衝地帯であつた師直が亡くなつてからの尊氏と直義の間は、何事もすぐ直接な火花や事の激突となりやすかつた。ただ毎々、夢窓国師の幹あつせん旋ふたりが兄弟のあらそいを解いてくれた。が、そのひとも今はいない。

「……………」

尊氏は救われざる愚昧ぐまいな弟子の身を、陣中で、師の計ふに詫わびたことであろう。あんなにも師の鉗けん錘つゐにたたかれてきた禪。毛穴の一つにもそれが体悟たいごされていたらうか。恥かしい。

もう何もかも捨てよう。何もいらぬ。そう思う。

業の深いこの一個の凡身などは山林に余生をかくして末は鴉からすに

食わせてしまふがいい。

深夜、尊氏はうなされるほどそう思う。だが、昼の陣座は彼を  
 まったくべつな人間にした。むしろ時々彼の胸に忍び入る彼の真ほ  
 実んどのたましいを、その人間の両脚は摩利支天まりしてんみたいに踏ふまえて  
 いる姿だった。それが征夷大將軍大納言尊氏であり、それに付き  
 したがっている眷属けんぞくたちはまた決して彼の独自の生きようはゆ  
 るさない。彼によつて死に彼によつて生きていた。さらにはまた、  
 世の中をこんなかたちにまで荒した張本人は尊氏ではないかと、  
 彼の虫のいい隠棲いんせいのねがいなどは、山林の松しょうはく 柏はくもゆるさじ  
 と吠え拒こばむもののように見えた。そしていつも尊氏の官能にはそ  
 の怒いかれる山林の音が蕭しょう々しょうと背に聞えているのであつた。

十月の末である。

尊氏の願い出た降伏は、吉野朝廷に容れられた。

三度目の請い<sup>こ</sup>だった。彼は直義のように武家政権を固執せず、天皇親政に服すべしと申し出ている。けだしそれが尊氏の本心とは、南朝方でも信じなかつた。尊氏もまたこれは窮極の窮策にほかならなかつた。こうした無恥な仮面でも仮面を持つほか今はあがきのつかない破目に彼はあつたのだ。

一方。

そのごも直義との和談には、つねに心の揺れうごいていた尊氏でもある。

だが直義は、いよいよ、尊氏の足もとを見くびつた。いかにと

はいえ、いまさら親政を仰いで南朝の天子に降くだるなどは、頭がどうかしたものである。自分の立てた北朝の天子はどうするのか。第一当初から謳うたつて来た武家統治の自己の理想は一体どこへしまい込むのか。

「血迷われたか。はや大御所も昔せきじつ日の大御所ではない」

こう観る直義ただよし方の驕慢は日につのつて、仲に立って、なお和わ睦ぼくに望みをかけて奔命していた細川顕あきうじ氏や畠山国清のはからいなども冷視しながら、徐々に、北陸の大軍を、何の目的か、東国方面へ移動させ始めていた。そして直義もまた敦賀つるがを発して、信濃に入り、ひがしへ向つたとの風説が高い。

「ああ、もうだめだ。百事これで終つた」

顕氏と国清のふたりは、和睦の不成功に辱<sup>は</sup>じて、尊氏に暇<sup>いとま</sup>を願った。国元へ引つ込んで、剃髪したいというのである。

尊氏は、二人へ言った、

「羨ましいなあ。そちたちにはそれも出来るか。だが尊氏には、口に出すこともできぬ」と。

尊氏は一たん京都へ戻った。

東国への発向を急がねばならない。直義が北陸からひがしへ移動した目的は明白である。鎌倉に恒<sup>こうきゆう</sup>久<sup>きゆう</sup>的な地盤を固めようとするにあらう。もし関東一円が直義方となつたら尊氏の中央の位置は浮いてしまう。一大事である。尊氏はめずらしく慌てたのだ。

いちどは暇いとまを願っていた細川顕氏も畠山国清も、このさいの窮状を見てはつい去りも得ず、尊氏と共にその日から難局の打開にあたり出した。

時に、吉野からは南朝の勅使も入京している。

勅には。「一切を聖断に仰ぎ、親政に服すとの申し出で、神妙である。一日もはやく時局の騒乱を治めて、忠節の実を挙げよ」と、ある。

なおまた、直義討とうげつ伐の綸旨りんじもあわせて降下された。後村上のおん名である。

しかし勅の裏には、北畠親房の智謀の匂いがこもっている。尊氏はつつしんで請うけぶみ文をたてまつった。親房は尊氏を読み、尊氏

は親房を読んでいた。

「義詮よしあきらは都の留守せよ」

十一月十四日、尊氏は、ひがしへ立つた。

細川顕氏と仁木頼章よりあきを義詮のため都に残し、あとにも兵をおいたので、その軍勢は多くなかった。今川の入道心省、畠山阿波守兄弟、武田陸奥守、二階堂山城ノ判官、千葉ノ介など七、八千をこえていず、とうてい、勝算があるものとは見えなかつた。

しかし伊吹では、佐々木道誉が兵五千を擁ようして加わつた。がぜん、万を超えたのである。尊氏に次いで道誉の姿は精彩を放つた。海道の日和見武士のうちには、道誉の参陣を見てから寄つて来たものもある。彼の向背こうはいにさえ注意していればおのずから勝目の



孰れかが分ると自己の去就のトとしてゐる武族も近ごろは多かつたのだ。

一面、信濃方面では。

信濃の小笠原政長が、直義の鎌倉入りを途上に妨げ、もう合戦に入っていた。

その政長の軍は、吉良満貞を討つて海道へ伸び、佐夜の中山でもまた、直義の先手上杉憲顕を打ち破つた。

「よしつ、幸先は上々！」

尊氏は言つた。敵は弟である。どうして昂然とよろこべるのか。しかしもう自己を疑うゆとりはない。勝つことだけがすべてであつた。陣は駿河の手越に入った。すると駅路での噂だつた。

——直義はまだ越前にいて動いていない。京都が危ないという風説なのである。

「嘘だ。るげん流言にすぎぬ」

尊氏は後ろ向きをしなかった。それがほんとなら引つ返しても間に合わぬ。彼は、敵の術策を裏返しに、岡本坊の良円を、はるか東北へ密使に放った。

常陸の佐竹、野州の小山、白河の結城ゆうき、宇都宮などへ、出兵をうながし、北方からの攻囲を命じたものである。

事実、直義はもう鎌倉に入っていた。そして管かんり領りょうの基氏

(尊氏の次子、十歳)を追い出してそのあとに拠よっていたのである。

しかし彼の軍は、由比、蒲原で破れ、富士川でも全敗した。直義はついに鎌倉を出、足柄山の險に立った。彼の形相ももう以前の直義ではまったくない。

直義の敗因は、東国の情勢を中央とおなじように自己の意志で動くものとみていた誤算にある。

だが、関東諸豪の間では、まだ何といつても、大御所尊氏の声望はそう失墜していない。

それにひきかえ錦小路殿といつても、惠源禅門とか前ノ副將軍といつても、直義の名はどうてい尊氏を凌ぐほどの声威にはなりえなかつた。

これを彼がさとつた時は、宇都宮、小山、高麗などの思わぬ敵

襲をうしろに聞き、また甲斐方面や海道筋には、富士川からこつち支離滅裂となつた味方のなだれと、それを押して来る尊氏の本軍を見るなど、三方敵の重圍にあつたのだつた。

それに、いちど鎌倉を追われたかんりようぜい管領勢も盛りかえして来たり、直義方がいたる所でやぶれたのは当然といつてよい。——直義は足柄あしがらを駈けくだつて海道の救援に向つたが、しよせん、味方の收拾はつかなかつた。

「このうゑは箱根に拠よつて」

いまはみじめな敗走をつづけ、さいごの拠きよてん点を必死にさがし廻る一法師武者直義だつた。しかし桃井直常、石堂頼房、上杉憲の頭りあき、そのほか、味方は四散したままで、すでに箱根は敵にふさ

がれていた。

ぜひなく、直義はわずかな残軍にかこまれて、伊豆へ逃げた。

伊豆口の三島みしまには尊氏方の仁木義長の軍勢が混み入っていたので、箱根の西にし裾すそをたどって北条の里さとへ落ちのび、小寺や民家にわかれて匿かくれ込んだのである。しかしすぐこれが尊氏方へ知らされたことはいうまでもない。

自刃か。斬り死か。

観念のほかはない。直義は妄動の愚を知った。

だが、ここの遠くをとりかこんだ大軍の気配は充分しているのに、急にこれへ襲つて来るふうでもなかった。——年暮くれの十二月二十九日からのことですぐ正月をまたいでいたのである。——生

殺しの三日だった。仁木義長が尊氏に処置を仰いでいるものだろうとの想像はつく。

はたして、正月の四日。

畠山国清が尊氏の使いとしてみえた。尊氏の親書を持っていた。和談の名目で来たのである。

「何はあれ、連れて来いと、先に鎌倉へ入って、お待ちなされておられます」

と、彼は尊氏に代ってその口吻のままをつたえ、

「これが根からのあだがたきとでもいうなれば知らず、御兄弟ではありませぬか。お話し合いのつかぬことはありますまい。国清がお供いたしましょう」

と、切になだめた。

兄弟とは何だったのか。直義はふとその常識的な意味のあり方に引きもどされた自分を強<sup>し</sup>いてまた硬<sup>ば</sup>ったものにしていった。自分から両手を後ろに廻<sup>うそぶ</sup>して嘯<sup>うそぶ</sup>くように言ったのである。

「連れて行け。国清」

「いやお縄などは打てません。またそんな御意ではない」

「わしは負けたのだ。だが断<sup>つ</sup>わっておく、降人として行くのではないぞ」

「わかっておりまする」

直義が鎌倉に着いたのは六日である。身柄はすぐ鎌倉の延福寺へ入れられた。

## 血の糸

ただ事の京都ではない。この年暮くれから正月——。

両朝合一で賀名生あのうの後村上天皇が還幸かんこうとなれば、さしずめ、

北朝は解消のほかはあるまい。

そのの前触れのように、南朝方の全権をになつて乗り込んで  
ちゆういんのともただ  
 た中 院 具 忠 は、

「三種の神器、壺切つぼきりの御劍みつるぎ、代々の文書もんじよ、すべてを差出され  
 よ」

と、北朝の洞院公賢とういんきんかたへ要請して、ことごとく、それらを取



上げてしまった。

元々、ここにあつた三種の神器は偽物と知れているので、扱いてもぞんざいをきわめ、駕輿<sup>かちよう</sup>丁の小者や武士らが鳳輦<sup>ほうれん</sup>で無造作にかついで行つた——と公賢自身の日記にも書かれている。

しかし、北朝祇候<sup>しこう</sup>の公卿たちの狼狽は目もあてられない。かれらは同時代の武士のように、変節や裏切り<sup>あした</sup>を朝に夕べにするほどな胆<sup>きもふと</sup>太い厚顔無恥ではなかつたが、事、こうなるとじつとしてはいられず。

「いまは」

と保身にあわてて、年暮<sup>くれ</sup>から初春<sup>はる</sup>の極寒を、賀名生<sup>あのう</sup>の奥へ、そして、みかどの御母新待賢門院<sup>しんたいけんもんいん</sup>へ、とくにまた、北畠親房な

どへ、ごきげんをとり結ぶべく、われがちに上つて行つた。

ために、賀名生の山中は、にわかじゅらくに聚落をなして、そこらの辻堂しずや賤の小屋まで幔幕まんまくを引き、はや一統の朝廷と群臣の綺羅きら星ぼしはここに在りとばかりな盛観であつたという。

自然、親房の声望は一ばい高く、彼みずからは法衣の宰相で剣も帯たいしていないが、つねに鬢びんづら頬ほに花を簪かざした大童子を左右にめしつれ、宮中の出入には輦てぐるまを用い、日夜、軍議のていに見える。

もとより彼は尊氏の恭きよう順じゆんなどにすこしでも本来の戦意を鈍にぶらせているものではない。相手の偽装降伏は百も知つてのうえの戦略だつた。つまり尊氏を東国に、義よし詮あきらを京都に、それぞれ分断して同時に誅ちゆうばつ伐ばつする両刃りやうばのはかりごとを考えていたの

であつた。

いわば尊氏と親房とは、どつちも腹を読み合つて嘘と嘘との駈引を天下の機動に託しあつていたものである。品はちがうが、それは情痴の世界の男女が、女は男を、男は女を、あやに取つて、しかも知りつつその間かんの嘘も小唄の絃いとにのせて、秘術と手くだの粹を極めている境地とも似るといへばいえましょうか。

だまされて

あるのが遊び

なかなかに

だますおまへの

手の巧さ

水鷄啼く夜の  
くひなな

酒の味

けだしそれは人生の夕明りみたいな近世花街の小戯。もちろん親房のは、もっと大時代な兵法の手くだである。虚空の軍鼓と地の波濤を、坐ながら呼ぶような彼の作戦構想は、例によつてすこぶる大きい。

宗良親王むねながはいま信濃にあり、新田義貞の遺子や脇屋義助の遺臣も、坂東ばんとうの野に伏して、時節を待つこと、すでに久しいものがある。

一令、みちのくの兵も起ち、南下して、尊氏を関東の野につつむ。

留守の義詮は、畿内きなの兵で充分討てる。それに先だつて、後村上天皇は賀名生あのうの行宮あんぐうを立たれ、都へ還幸の鳳輦ほうれんをすすめる。等々、親房の指令は、九州にまでおよんでいた。

二月に入ると。南朝方の畿内の兵馬が急にそよめき出していった。伊勢の北畠あきよし顕能の軍は大和の五条に着き、楠木正儀まさのりは東条に拠つて、八幡やわた、天王寺あたりの動きもただではない。

後村上天皇は、賀名生あのうを発輦はつれんされたとも、まだともいわれ、いずれにせよその親衛軍を前駆に、近く都門へ還幸あるにはちがいない――

当然、足利義詮は、尊氏の心をうけて、都の留守にあたつているが、降参恭順の臣である。つつしんでそれをお迎えせねばなる

まい。だが南朝の軍勢が、とくに親房が、はたして、それをそつとしておくかどうか。

義詮は不安だった。

いざとなつてからではまにあうことではないのである。——どうしたものか？ を彼は父尊氏の許へ、頻々ひんびんと、早馬していた。しかし、その鎌倉がまた混沌で、京都をかえりみている余裕はなかった。尊氏は管領かんりようの邸に入つてもう五十日ほどは経過していたが、一月いらい、心の安らいだ寸刻もない。

直義方の桃井直常や斯波しば、石堂、上杉らの党は、そのご残兵を集めて、延福寺に幽閉ゆうへい中の直義の身を奪回しようと計つているし、宮方の新田義宗、義興よしおき、脇屋義治わきやなどの軍は、打倒尊氏の

大旆たいはいをひるがえして、その郷土郷土からふるい立ち、信濃の宗むねねなが良親王軍も、ぞくぞく碓氷峠うすいを南へくだつていているという。

鎌倉にこそ入つたが、そして直義をも捉とらえはしたが、尊氏自身もまた、みずから掘つた坑あなにひとしい重囲に墜ちていたのだつた。「義詮よしあきらが危ぶまれる」

尊氏は、たまらない親心を、道誉に洩らした。

一面には直義との相剋そうこくを抱え、それみずからの凡情にみずからをズタズタに切りさいなまれている彼の容子が、道誉にもこの数日はあわれに見られていたほどだつた。

「即刻、道誉が都へ駈け戻りましょう。すてておけば北畠親房の思うつぼにはまるだけのもの。猶予はなりませんまい」

「それよ、そこを頼みたかったのだ。誰をやるよりそちならば心丈夫と」

「しかし、ここのお立場も容易ではないが」

「いや、ゆうべ一夜じゆう考えぬいて、思案はついた」

自信をしめすように尊氏は語尾をつよめた。ともな伴っていた微笑は

微笑にならない顔に歪みを作っただけだった。いつも気にならない尊氏のうすいあばたが、一ト粒一ト粒、こんなにも道誉の眼にかな哀しく見えたことはなかった。

「打開の御工夫がつかしましたとな。いや、それ伺えば」

と、彼の一軍はその日にもう西へ立って行った。彼には、そのあとに起るであろうことが、どんなことか、ほぼわかっていた。



そう道誉にも看破みやぶられていた尊氏の気の弱い顔の暗さは翌日までもつづいていた。どこか体の病症でも感じているのか、物に憑つかれた人のようにもあつた。そしてこの日も、戦局の危急を告げてくる声はしきりだったが、何か落着きを欠き、その指令すら忘れていたような尊氏だった。

いつか午後となつている。急に彼は小姓をやつて、延福寺の警固の将をよびよせていた。

呼ばれたのは、二階堂信濃ノ入道であつた。彼は、延福寺におかれてゐる惠源えげん禅門（直義）の警固役の責任者であり、毎度のこゝと、尊氏からは直義の起居、食事、健康上の容子を訊かれるのがつねであつたから、きょうもそれかとばかり心得て、

「信濃にござりまする」

と、いつものごとく管領邸の庭へ来てぬかずいた。すると廊の上に見えた尊氏は、黙つて顎あごを横に振つて、すぐ自身から先に縁を歩いて行つた。で、彼は少し勝手ちがいに戸惑ツたのみでなく、尊氏のいつもにない恐こわい顔つきも、ふと気にかかつた。

小壺こつぼ（中庭）のうちの日当りわるい一室に尊氏はもう坐つていて、信濃を見るとただ一言「……上がれ」という。依然、尊氏の容子が信濃には異常だつた。

それにこの日にかぎつて、直義の細こま々しい日常事にちじようごとは何も問われず、ただひとつ訊かれたのは、

「頑かたくなは、あいかわらずか」

と、尊氏の口から一ト言ただけでしかない。

直義の頑かたくなと尊氏がいった意味は、信濃にはそれだけでわかつていた。——直義の延福寺生活はもう五十日にもなるが、それはりよしよう虜將りよしようにひとしい扱いだだったので「約束がちがう」と初めから直義の感情をひどくこじらせてしまっている。

だからそれ以後、尊氏の胸をおびた者が、どんな慰撫いぶをこもごも持つて行っても「なにが和談だ！」と、あたまから受けつけもしないのだった。尊氏としては、こんどに懲こりてふたたびこんなことの起らぬような、いわば直義のほんとの出家遁とんせい世せいを強しいていたものであったから、直義が承服しないのもむりではない。逆にこれまでの不平をぶちまけて、兄の虚偽、不信、非情、卑劣を

かぞえあげ、その罵るときはこめかみに筋をふとらせ狂者にまごうものさえあるとは、使いに立つた畠山や今川もいう毎々なことばであった。

その直義が何としても屈くつしないのは、ただに骨肉の憎悪や甘えだけでなく、なお自分には多くの支持者があることを強く信じていたからであるらしい。事実、尊氏の幕僚中にもそんな気脈がないといえず、機会さえあればいつどんな逆変を現すかも知れないので、尊氏はそれも恐れた。そしてどう自由を奪ってみても延福寺に呼吸している一個の骨肉が何とも不気味でならなかった。しかもその処理は自分おを措いてはする者がないのである。

「お変りもございませぬ」

信濃は答えた。

充分な答えでないのは彼も承知だろうが、家臣として、多くは口にし難いものらしい。

「信濃……後ろを閉めて、もそつと寄れ」

「はっ。……？」

あとは、主従の声の端も聞えなかつた。しかし、それもそう長い間ではなく、まもなく信濃は小壺を退がって、管領邸を出て行った。

まだ夕陽は高く、途々、彼の姿へえしやく会釈する者もまま多い。だが信濃はそれに気がつかないのか、往々おうおう、ぽかんとして馬をやつていた。何か尊氏の憑つき物ものを彼が背負つて帰つたふうにも見え

る。——そしてその晩の真夜半すぎ、信濃は、ふたたび尊氏の寝所の小壺へ這うように忍び入っていた。

尊氏はまんじりともした容子でなく、信濃ノ入道が中庭に来て立った気配を知ると、すぐ寢所を抜け出して外に立った。

当然、宿直とのいたちの影がすぐ「……あ、どちらへ？」と、あとを慕つて来そうにした。信濃は彼らの怪しみ顔を、叱しツと抑おさえて、

「御危篤ごきとくなのじゃ」

そして、もう一ト言こと。

「俄なことでお気もそぞろだ。なまじお供はせぬがよい」

表御門でも彼はおなじことを触れ、そして門外の駒に尊氏を乗せるやいな駈けだした。

もや霽のやわらかなしゅんぎよう春 暁だが延福寺の屋根の下はまだ夜半の氣配だった。すみ墨のような長い廊下を途中で曲がつて小さい灯が一つ風おに恟じながらおどおど奥へすすんで行く。かがみ腰に信濃が持つている紙燭ししよくであった。

立ちどまる。

信濃は尊氏を振向いた。

「ここでござります。ここが長の間の、お座所におざりました」  
 そして御堂建具みどうたてぐの重たい遣戸やりどを二尺ほどそつと開けた。

尊氏は無言のまま紙燭を受け取つて「外ちゆうびろまにいよ」と命じ、また「そこを閉めよ」と言つた。内は天井の高い中広間で、小さい

灯影の及ぶところ、何も無い。

ただ白い夜具よのものと白い枕とが、しいんと、虚空こくうの底の物みたいにあるにはあつた。枕は落ちて、行儀はぎを外し、衾ふすまはその下に何も  
ないかのようで平べつたい。

「……………」

何か言つたのではあろう。尊氏の眉も唇も稲妻いなずまのように引つ  
つれた。だが、膝の関節がささえきれずにその体を先に崩くずしてし  
まつている。そしてふるえる手がもう意志でもなく夜具の襟えりを剥め  
くつていた。下に、顔があつた。変りはた直義ただよしの青白い顔だ  
つた。唇の端はたから糸のような血は見えるが苦悶あつしたらしい痕はな  
い。ただ落ちくぼんだ眼窩がんかのへんには、なお四十七歳の肉体から  
袂別たもとしきれぬかのような生の執着が薄青ぐろく煙つていた。



「しかたがなかったのだ、こうするよりほか！」

おまえが悪いのだと弟へ怒いかツているような尊氏だった。自己への怒りと呵か責しやくなのかもしれない。そう言つてふとんの端を手から離して、もう二度と見る勇氣も別れの惜しみもないようにその手を慥然ぶぜんと胸に拱くんでしまった。ゆうべ信濃をして弟に鳩ちんど毒くをのませたのは兄の自分である。責められるだけ責められよう。尊氏は首をふかく垂れ、自分に許容できるかぎりの罪のしもとを滝の下の一裸身らうしんみたいに浴びていた。涙は一滴も出なかった。しんしんと、肉が凍こごえ、骨が冷え、五体もばらばらになり、その極きわみには、かつと熱くなつて、血があたまへ逆流するのが分つてくる。

「つまりは、ひとでなしよ」

自分を嘲わらつて、

「そもそも、ひとでなしでなければ、成じょう就じゆもせず、思い立ち

えぬような大望をいだいて立ったのだ。いまさら何を」

と、しいてその眼を、壁の一方へそらした。

脚あし長ながの香こう炉ろ台だいのうえに、床とこの間ま掛がけの横物が見える。尊氏

は紙燭を手に立って顔をよせた。その一、二行でもすぐわからず

にはいられない物である。家祖かそ家時からの鏝ぼん阿寺なじの置文おきぶみだった。

尊氏は灯をかざして「はて？」と壁の掛物かけものにむかいあつた。

これが鏝阿寺の置文なら、世にありえない物があることになる。

むかし、鏝阿寺の秘篋ひきようからとり出して実物を一見したとき、彼

はすぐそのあとで、焼きすててしまっている。あるはずはない。

ところが近年、それを錦小路の邸で見せられたという者がま

あつた。今川了俊りょうしゅんも言い、二階堂や山名なども見たという。

思うに、鏖阿寺ぼんなじから副本（写し）か何かをとりよせ、直義がひそかに愛蔵して、一味の重臣に誇り語っていたものであろう。

尊氏はそう解釈してみる。

そしておそらく直義は、戦陣の日も、これを肌身に持っていて、ここの延福寺では、寺僧か誰かに、掛物に仕立てさせ、朝夕、壁にかけて見ていたのではあるまいか。

「……いや？」

そうではないかも知れぬとも思う。直義はこれを用意しておい

て、自分が延福寺へ見える日を、いつかはと、ひそかに待つていたのではないか。

家祖家時公の置文を前に、この尊氏へむかつて、大望の初志から、兄弟ふたりして旗上げにいたるまでの苦労や誓いを「——いまお忘れか」と大いになじるつもりでいたものとも思われる。

まさに、この置文の前で、弟に面罵めんばされたら、一言もない。——その遺言ゆいごんは告げているのだ。わが辱はじを雪すすげ。わが家の家名を上げよ。また、足利家の名をもって北条の幕府に代れ、と。

家に伝わる家祖のそんな遺言があるのを知ったのは、当時、兄弟ふともまだ二十歳はたちがらみのころだった。茫々ぼうぼう、三十年ぢかい前だった。

若い激血は祖先の悲痛な文字にふれて痛涙したものである。異常なそのときの感奮は長く忘られるものではない。大望の誓いに兄弟ふたりで抱き合つて泣いた日のことも昨日のごとく覚えてはいる。

——しかし三十年のむかしだ。人間は育つて行つた。理想と現実とのいかに違うものかを、いやというほど社会の修羅の中で、じつさいに知らされてきた。

置文は、彼にとって、動機ではあつたが、もう終生の信条ではなくなっている。置文の主ぬしが生きていた時代とは時勢そのものがちがつている。尊氏はとうに置文を越えた「時」の尖端せんたんに立つて現在と未来の間に戦つていた。古くさい置文などは胸の隅すみにも持たない時代の権化ごんげなのである。

「……が、弟は」

たまらない憐愍れんびん愍ずるがわいて彼はまた直義の枕元に坐り直した。

弟は自分のようにずる狡くなかった。なお置文をたましいとして持つ

ていた。自分はとうにただの古文書こもんじよとしていたものを、弟は純

な初志と信条を離そうともしなかつた。兄弟ふたりの葛藤かつとうの根はそこ

から来ている。そこで毒を吞ませて根の一方を兄たる自分が殺し

たのだ。ひとでなしでなければ出来ない。そしてまた、これから

かかって来るであろう一生の仕事もまた、ひとでなしでなければ

出来ない。それが尊氏の宿業しゆくごうなのだ。「……かんべんしてく

れ」と、彼は初めて、直義の薄べったい体を、白いふとんの上か

ら抱きしめた。若き日、口喧嘩のあげく、大蔵山の崖で取ツ組ん

だあとで泣き合つたときのように体じゆうで慟どう哭こくした。

夜が白む。尊氏は、そつと歸つた。彼が延福寺へ来たことも歸つたのも、警固のほとんどは知っていない。

信濃ノ入道はすぐそのあとで、直義の遺骸はきれいに処理させてしまつた。そして同朝、寺門のまえに兵を集めて、こういう発表を行つた。

「惠源えげんぜんもん禪門直義公には、かねがねおうだん黄疽をわずらわれていたが、昨夜、事俄におかぐれになつた。お年もまだ四十七。惜しいことであられた」

兵はしゆんと聞いていた。

が、だれもがすぐ思い出していたふうである。昨夜といえは二

月十六日。——前年の同じ二月十六日には、高ノ師直、師泰以下が武庫川堤で惨殺された。その一周忌だ。いっしゅうき 妙な符合もあるものだ、と。

「因縁。いんねん おそろしいものだな」

「因縁といえ、建武の年、直義さまが大塔ノ宮を殺めさせたのも、所はこの鎌倉だった。ここでお果てなされるとは」

しゅうこう 衆口は、やがて言い出した。

「ただの御病死ではない」

「毒殺だ。無残な殺し方もなしえず、兄君の將軍家に一服盛られたものらしい」

こんな声が立つ所にも、尊氏と麾下きかの軍そのものとの内部的な



亀裂が見える。直義党の残党と通じて、いつ寝返るか知れない者が、なお鎌倉の内にはいる証拠と見てよい。

尊氏はそれも知っている。彼はしょうすい憔悴しきっていた。毒を呑んだのは尊氏自身であったようだ。

京都の留守も気がかりだし、外には大敵がせまっている。新田諸党のみか、北畠顕信（顕家の弟）の奥州勢も、はや白河辺まで来たと聞え出していた。

うるう 閏二月のすえ。

尊氏はいかに鎌倉を捨てた。

三浦高たかみち通や二、三の武族は、はたして、内から敵を迎え入れ

て、尊氏を外へ追った。——尊氏は武州の神奈川へ落ちのび、船

で房総へ渡ろうかとまでの覚悟をしたが、なお彼を慕ってくる軍はあとを絶たず、仁木、今川、大高、二階堂など京都いらいの将士二、三千は集まった。尊氏はそれに力を得、多摩の府中へ進出した。しかも兵は日々ふえて行つた。尊氏の名はまだ東国でそう落ちぶれてはいなかつた。

しかし、新田義宗（義貞の三男）の大軍とぶつかつて、尊氏はその序戦に惨敗した。金井、人見の原の合戦にもやぶれた。こんなとき、彼はさいごの物までは賭けない。陣を石浜（青梅線の多摩川原）に移して、甲州、相模、武蔵の兵をさらに糾きゆうごう合した。そして次の戦略を慎重にした。

このあいだに、宗むねなが良親王の大旆たいはいは、碓氷うすいから武蔵の小手指こてさし

ヶ原はらに着き、新田義興よしおき（義貞の二男）と脇屋義治（義助の子）を両翼とし、ほとんど武蔵野を風靡ふうびしていた。

が、尊氏はこれを、数日のまに、討って討って撃ち破った。

奥武蔵の高麗こま一族をしてその背後を驚かせ、また芳賀はが貞綱の勢を川越から。武田、薬師寺の軍を狭山から。およそ三面から総がかりで寸断したものとおもわれる。

この一戦は「太平記」に「笛吹嶺うすいとうげノ合戦」として有名である。だがほんとは、多摩、入間、高麗こまの三郡にかぎられた地域の戦いであつた。碓氷峠うすいや三国峠はただ宮方勢が敗走して行つた山波の彼方であつたまでにすぎない。

すべて東国各地の戦いも、その令は、吉野の軍師親房から出て

いたものにちがいない。

しかし令使は遠すぎる。受ける方ではどうしても、準備不十分な急出動となりやすい。

そうとでも解釈するほか、武蔵野の場合では解きようのない宮方の大敗だった。これで関東における計画はまるつぶれとなった形である。はるばる来た奥州勢もむなしく途中で引つ返してしまひ、新田、脇屋の諸党も四分五裂、とくに宗むねなが良親王の軍は、碓氷の彼方へ、遠くその残影を再びひそめてしまった。

この宮こそは、好まぬお手の弓だった。いつか四十二のお年を風雲の中にかぞえられたが、自著「李りくわしふ花集」の歌のかずかずにも窺うかがわれるように、性はまったく文雅なおひとであった。信濃で

は「信濃ノ宮」と人みな申し上げて、大川原の香坂高宗の館に  
 多年お身をひそめておられたのだった。

信濃国大川原の深山の中に庵して住み侍りける谷間の月  
 をみて「李花集雑」

いづ方も

山の端近き柴の戸は

月見る空や

すくなかるらむ

けれどこんな御生活の許へも、一朝、吉野の軍令が来れば、  
 宮は征夷府大將軍として馬上兵甲のあいだに伍し、即刻、庵を立  
 たねばならなかった。——可<sup>あた</sup>惜だが、尊氏の下<sup>ら</sup>の必死な将士に蹴

ちらされたのもむりではない。まったく宮の責めではない。

かつてお若い頃、お父ぎみの後醍醐の難るいに累せられて、讃岐さぬきへ流されてゆく途上、加古川で船を待つまに、兼好の弟子の命松丸から、ふところ飼いの仔雀をもらつて、たいそう慰められたことがある。

あんなあたたかなものを、そのごの宮は、いちどもふところにお持ちになつたことはあるまい。——ともあれ、その年の武蔵野合戦で、手いたく打ち負かされた秋、宮は香坂高宗らのしきりに留めるのも振りきつて、飄ひょうぜん然ぜんと、狩野かのうのすけ介ただ一人を供に、木曾路から美濃へと旅立たれた。

おそらく、吉野へのお心であつたのだろう。けれど、途上の

兵騷、とても吉野へは近づけないので、東海に出、諸国を漂ひようは

泊くされたのち、幾年もたつて、また越後信濃にもおられたりし

て、地方的な小合戦に、お名をうたわれることはあつたが、馬上の宮は、もうふたたび見られなかつたといつてよい。漂泊の旅に詠よまれた一首には、

暫しばしだに

吹かぬ間もがな

風の上に

立つ塵ちりの身の

在ありか定めむ

という歌もあり、漂泊が宿命のような御一生だった。——晩年、

「新葉和歌集」を奏進しておられるので、弘和元年、七十一歳まで<sup>しじゆ</sup>寿をたもつておられたことだけはたしかだが、おかくれになつた土地さえよく分つていない。河内の山田とも、越後か信濃とも、遠江国の井伊谷とも、諸説まつたく、とりどりである。

ところで、話をもどして、武蔵野合戦の大勝は、尊氏にとって、まさに死中に活をえたものといつてよい。

彼は、鎌倉を取り戻した。鎌倉じゅうの敵を追つて、元の管領邸におちついた。けれど、この頃からとかく彼の健康は、これまでのようではなかつた。

いばら  
茨とからたち



そのご、京都の留守をしていた足利義詮よしあきらのうえにも、大困難がおこっていた。

かねて。予定のこととして。

賀名生の行宮あのう あんぐうを発輦はつれんしていた後村上天皇は、住吉、天王寺などを経て、閏二月二十九日うるう、八幡やわたの男山はいに入られた。

南朝の天皇の還幸は、降伏した幕府代表の義詮としてはどうしようもなく、ただ奉迎かしこの畏みでいたのである。ところが鳳輦ほうれんが八幡に着くと同時に、およそ七、八千騎の軍勢がどこからともなく来て、夜のうちに洛外をうずめ、それらが一せいに旗手はたでを解いて朝空にひるがえしたのを見れば、北畠あきよし顕能、千種あきつね顕経、楠

木正儀まさのり、和田、越智おち、神宮寺など、いずれも南軍の精銳であらぬはない。

「すわ……」

と幕府方では、目に見てからの立ち騒ぎだった。

義詮よしあきらの若さ！ 輔佐の家臣たちの間抜けさかげん！ とも

いえばいえる。

けれど義詮としては、多少、事前にいぶかられる兆きざしもあつたので、法勝寺の恵鎮えちんを先に行宮へやって、朝意を伺わせるなどの、ていねいな手順をふんでいたのである。そしてつい前夜までも、男山から帰って来た恵鎮の報告に、安心しきっていたところだったのだ。

何をするひまもない。

あつというまに、加茂川原も市中の辻々も、どつと混み入つてきた南軍の兵馬に駈け荒らされていた。

迎え撃つのがやつとで、幕府の侍さむらいどころあず所す預あずかり細川頼春さえ、

身みによるいいを着けるひまもなかつた。白しろあわせ裕あと素すばかま袴かまのまま

裸馬はだかばに騎のり、足あしなみも揃そろわぬ将士の指揮しにあたつていたが、たちまち、むらがる敵てきの中で斬り死しにをとげてしまったほどである。

そのほか諸所の狼狽ろうたいの状じやうにいたつてはいうを俟まつまい。

義詮よしかんは、細川顕氏よしかんや仁木義章よしかんにまもられて、やつと、京都の

そとへ逃げ走り、やがて近江しじゅうくいんの四十九院しじゅうくいん（犬上郡）までたどり

ついたとき、はじめて、ほつと、おちつきを取りもどした。そこ

で佐々木道誉の、あの物に迫らない顔の黒子ほくろと微笑とを見たから  
だった。

「いや、京都などはいつでもまた奪とり返かえせましょう。大御所にも  
これはお分りになっていたことで、そのため、道誉に帰れと命ぜ  
られて、とくに近江を固めていたものです。深い御憂慮にはおよ  
びませぬ」

以後の道誉は、義詮をたすけて、大いに兵力の挽回につとめた。  
義詮の執事は自然、彼となっていた。このあいだの義詮の生殺せいさつ  
与奪よだつは一に彼の手の中にあつたといつてよい。

が、ここに。

逃げるにも逃げえられず都におきのこされていた御一家がある。

北朝の皇室だった。

そのご南朝方では、ただちに北朝の光厳、光明、崇光すんこうの三上皇と皇太子直仁なおひととを、そっくり人質として八幡とらに囚きたえ来きたって、三月早々、河内の東条へ移し、後にまた、賀名生あのをうの山中に連れて行ってしまった。

「はや、事は半ば成じょうじゆ就すした」

と、見たか、総帥そうすいの親房は、やがて自身、京都へ乗り込んでいた。そして第二だんの急務として、義詮よしあきらの追討に全力をそそぎかけたが、時にもう近江の義詮は、早くもその軍力をあらたにして、逆に、京都に進撃してきた。

義詮がにわかに関力をもち直した背後には、親の光というもの

がなくはない。尊氏が関東で勝った影響というべきだろう。京都を見下ろす東山のみねには、夜ごと兵のかがり火がふえていた。火の線は長樂寺、双林寺、阿弥陀ヶ峰の端までつらなり、四月に入ると、天を焦がすばかりになった。すべて近江から潜入した義詮の軍だった。

こうして、わずか一ト月のうちに、ふたたび、

さいしやう  
宰相ノ中将義詮

の名が京都を圧してくると、阿波から細川の一手勢が住吉に上陸し、いちど南朝に降っていた赤松則祐のりすけまでが、またそむいて義詮に応じるなどの逆転を、南朝方は次々に迎えだした。

「退くしかない」

親房の大きな計画も今は彼自身、その失敗をみとめないではいられなかった。

計画が悪かったわけではない。失敗の原因は、味方がみな遠隔であり過ぎていたことにある。九州、みちのく、信濃、新田諸党も、急には上洛できない条件の地にあつた。しかもそれにしては、伊勢、畿内きないの兵力だけで余りにここは手薄すぎた。

「ひとまず、男山とりでを砦とりでに」

と、洛中の南軍が八幡やわたに退くと、義詮は時をおかず、本陣を東寺へすすめた。そして細川頼之よりゆきの一手を洞ヶ峠ほらとうげへまわして、八幡の糧道を断つた。

佐々木道誉は、始終、彼のそばにいた。細川、土岐、赤松、仁

木の諸軍を督とくして、八幡をかこんだ。岩松頼宥らいゆうや山名時氏が来会したのもこの前後であり、義詮の陣営はいよいよふるった。そのうえ敵がわかからの投降兵もたえなかつた。「なんで投降して来たか」と訊くと、兵はみな「食えないからだ」と一致して言った。「もう、いいでしょう」

と、道誉は総攻撃の機しおと見て義詮にすすめた。

五月十一日の夜だった。

男山行あんぐう宮をめぐけて、足利勢万余の将士がときの声をあげた。ふもとの寺坊やしろや社などを焼きたたてたので、山はそのまま山なりの炎になった。後村上天皇は、北畠顯能あきよし、名和長重（長年の子）らにまもられて、からくも河内野へ逃げ走られた。——この夜ま



た、お味方の熊野の湯河ゆかわノ荘しょうじ司しが寝返つたので、南朝方はいちばい混乱を大きくし、天皇についていた四条隆資たかすけ、三条中納言、頭とうノ中将かつただ且忠さねまさ、参議ノ実勝さねまさなど、みな途々、矢にあたりたり名もない葉武者にかこまれて屍かばねを野にさらしてしまった。

後村上天皇は、馴れぬ馬で、やっと、敗走兵の中に駈けまじりながら、朝がた、奈良まで来たが、

「みかどは？」

「天皇は」

と、ここで急に同勢がかえりみ合つても、どれが後村上やら分らず、やがてのこと、おん直垂ひたたれのまま、鞍に錦で包んだ筥はこをお置きになつているのが、天皇だとわかつて、初めて警固の隊を組

むような有様だった。

それから先は、楠木正儀まさのりたちが守護して、ともかくお身だけは無事に賀名生あのをうへひきあげられたものの、なんと儂い京都還幸の希望だったことか。——親房の大計画も、わずか百日のお夢を帝にささげたのみで、むなしくここに終ったというしかない。

南朝がたの望みも画餅がべいに帰して、賀名生はまた元のみじめな山中宮廷に返ってしまつたが、より悲惨なのは、ここに拘置こうちされた北朝の三上皇と皇子らで、それは、

朝廷が朝廷を。

天子が天子を。

囚とらえて捕虜としたことでしかなかつた。一系の根も血も一つの、

金枝玉葉きんしぎよくようではあつたのに。

しかし北朝の皇室を見る南朝の憎しみはどうしようもなかつたであろう。囚われの上皇光嚴こうごん、光明。また崇光天皇は、南朝の廷臣らの詰問に、こう涙して弁疏べんそしたということである。

「もとより、即位は朕ちんの志ではなかつたのです。また即位してからでも、諸政一事として、朕こころの意から出たことはない」と。

なにしろ、ひどい待遇であつたらしい。「吉野拾遺」によると、黒木の御所の荒壁もあさましいばかりな上に、茨いばらやからたちの木をすきまなく植え込んだ中に押し込められていた、とある。

梶井ノ宮尊胤かじい たかたね親王も囚われていたが、夜、警固の武士のすきをうかがつて、どこへともなく脱走してしまった。——また、光

嚴上皇は、このさい髪をおろして、以後は一切、世の外にと、かく御心にちかわれたという。

すべてが惨だ。あわれでないものはない。

それにつけても、北朝の方々を、こんな憂き目にあわせた責任者は誰か。いうまでもなく義詮よしあきらだつた。いや尊氏でなければならぬ。尊氏こそは、根本の責任者だろう。

従来、

「皇室への畏かしこみと、朝廷を大事と念ずる誠意とは、自分とて決して人後におちる者でない」

と、よく何かのばあいに彼が用いていた言葉も、いまはみずから放擲してみずから自己の非を暴露したもので、ただ巧みに皇室

を利用して来たものといわれても、尊氏自身、弁解の余地はあるまい。

が、これは尊氏や義詮の誤算であつた。これほどまでに、南朝がたの北朝処理が、峻烈に出て来ようとは、予想しえなかつたところからの手落ちであろう。もし予想していたら事前に方法もあつたはずだ。

ともあれ、尊氏は困つた。自分の奉ずる帝室がそつくり賀名生あのうの捕虜となつてしまつては、どうしようもない。

彼は、あらたな苦慮をまたかさねていた。いまや北朝は空位空名くうそくでしかない。しぜん幕府も自己の立場も空疎くうそくなものに浮いてしまふ。

八月。

彼は鎌倉から使いをやつてよしあきら義詮よしあきらに策をさずけた。

光嚴院の第三の皇子、弥仁親王いやひと（十五歳）を、しいて皇位に即けたのである。

御母の広義門院は反対で、初め、どうしてもお許しになるみ気色でなかつた。それを幕府は力で迫り、公卿の一条経つねみち通とほや二条の関白良基よしもとらも、古例や先例や、いろんな理窟をつけてついに、北朝の後光嚴天皇として、踐祚せんそを見るにいたつたものだった。

「受禪じゆぜん（皇位讓渡の式）もなく、上皇の詔しやうもなく、また神器もここにありませんが、尊氏は劍です、良基よしもと（二条関白）は璽じ（印）です。これを神器とすればよろしい」

と、良基はいったという。まったく前例も無視して強行された天皇の誕生だった。

義詮は、京都に。

尊氏は、遠く鎌倉に。

この変則的なかたちはほぼ一年の余つづいた。

ところがここへ来て、九州の足利直冬は、南朝からうけた綸旨<sup>りんじ</sup>を名分に、正平八年の夏、大挙して都へ攻めのぼってきた。

おそらく、鎌倉で毒殺された直義<sup>ただよし</sup>のことは、彼をいからせ、彼を一ばい奮然と蹶起<sup>けつき</sup>させたにちがいあるまい。

実父の尊氏よりは、直義こそほんとの父だとしている直冬なのである。そのひとの遺志をついで、南朝方に降り、尊氏や義詮を

敵として 誅<sup>ちゆうばつ</sup>伐<sup>ばつ</sup>するのが何の不思議であろうやと、豪語を放つたことであろう。

南朝軍は、もちろんこれに呼応して、直冬と共に、京都へせまつた。——義詮は防ぎきれず、新帝の後光厳を奉じて、美濃へ落ちた。九月である。すでに、尊氏も變を聞くやいな、鎌倉を発足していた。

けれど軍旅の尊氏は、美濃の垂井<sup>たるい</sup>ノ宿<sup>しゆく</sup>まで来て、ここで後光厳に拜謁をとげると、二十日ほども陣中で寝こんでしまった。医者も病名のつけようのない病氣であつた。去年いらい、食はすすま<sup>おうおう</sup>ず、快<sup>おうおう</sup>々<sup>おう</sup>とつねに楽しめない色なのである。一年半ぶりに父に会つた義詮は、父の顔からあの茫<sup>ぼう</sup>として大どかなまろみが、無残



に削り<sup>けず</sup>とられているのを見て、心のうちでぎよつとした。

「この残暑で、軍旅がおこたえになったのでしようか」

「いや。もすこし、物が食べさえすれば何でもないので」

「関東での御苦労など、深くお察し申しあげまする」

「何、たいしたことではない」

そして、いった。

「張合いもなし、力も出ぬ戦だが、さりとて、直冬という魔の申し子みたいな奴を、都にのさばらせておいてよいものか。あしたはここを立とう」

あきらかに尊氏は病苦をこらえているふうだ。けれど止めてもきくまいし、また留まっていられる時でもない。軍旅は急調を加

えて行つた。そして月の末には、京都へ突いて入つた。

南朝ではその間、直冬を「総追捕使」に補して、尊氏討伐の宣下まで与えて鼓舞してしたが、直冬はもろくも京都をすてて山陰の石見へ逃げ落ち、そこでまた諸国の直義党を糾合し、他日の大挙をもくろんでいた。

尊氏は、高倉の邸に入つてやつと療養につく暇をえた。しかし母の清子は康永元年の十二月に病歿しており、妻の登子や女の鶴王（頼子ともいう）は丹波へ難を避けさせておいたのでここにはいない。あたかも他人の家のような空漠が久しぶりの主人をくるんだのみだつた。

そのうえ、彼がまたなく可愛がつていた鶴王が、その冬、亡く

なつた。尊氏は、それを聞くと、病床ですすり泣いた。こんな父は見たこともないので、よしあきら義詮は父の変化と体の方が気づかわれ、日ごと高倉を見舞つて、とかく政務も軍務も手につかなかつた。

すると、翌年の四月。

南朝方にも不幸が起つた。とうりよう棟梁の臣、北畠親房の死であつた。この南朝の柱石とも見られていた人の死は、あのをう賀名生の行宮を悲しみの底につき落したのみでなく、世上へも敵味方ない哀傷の感をつよくひびかせた。

親房の死を聞いたとき、尊氏の心はありのままにこころうず疼いた。

「もう南朝方には、恐るべきほどな人はいない」と。

が、それは敵の悲しみを僥倖とするだけでなく、彼自身の心身もばらばらになつての氣落ちと共にうめいていたのである。

彼にとつての親房は、夢にまでみる強敵だった。軍いくさにかけ謀ぼうにかけ、始終、あの一禅門には抗しえぬ威圧感と翻ほんろう弄の受け身におかれていた。何よりもその親房には、学識と思想があり、武力に理論づけ、武士を思想の下に統御していた。自分には、それが  
ない。

また、いつも親房の手のこまかさには、奔命に疲らせられた。

直義と師直との衝突も、それいらいの直義の変り方も、なお先頃、

義よし詮あきらと自分とを遠くに分離して、東西、個々に撃とうとした

計なども、みな親房の方ほう寸すんから出ていたものだ。

そして、それとはこつちも看破みやぶつて親房のウラを搔くつもりでは、またいつも尊氏は、自身を泥沼にのたうつてしまふ破目をまぬがれなかつたものである。——だのに、その恐ろしい人物もいまは南朝方にいなくなつたと知ると、彼は、その強敵を敵として、無残にまでつよく自己を生かして来た大きな張りを失つていた。淋うつつろしさに似る虚の下から、

「……死んだか」

と一言、つぶやいた尊氏だつた。

尊氏はしかし、以後はなお繁忙だつた。

南朝方では一時、愁然としていたものの、決して戦意は沮喪そそろうしてはいなかつた。九州の菊池党は、健在であり、いちどもその初

志を変えていない。征西ノ宮將軍（懷良親王）の旗幟は筑紫を  
 圧している。

そのうえ、ちかごろ、尊氏方の大族、山名時氏父子が、佐々木  
 道誉と不和をかもして、南朝方へ奔つてしまった。

山名の本拠は但馬である。——さきに石見に落ちていた足利直  
 冬とむすび、伯耆、出雲の兵をあつめて、それはたちまち、京  
 都をおびやかす一団の疾風雲になり出していた。

すけどのがた  
 佐殿方（直冬の称）

と、この雲は呼ばれた。

佐殿方には、自然、さきの直義党の残党はみな加わつた。桃井  
 直常、斯波高経らも北国の兵をあげて応じ、またも京都は、あや

うくなつた。

尊氏は、よしあきら義詮へ、

「洛中の兵をみな引つさげて播磨へ向え。遠国の味方を待つていは間にあわぬ」

と、すぐ急がせた。

そして彼自身も、さきの例があるので、やがて新帝の後光厳を奉じ、われから京都を捨てて出、近江の武佐寺むさじで、その年の正月をこえた。

尊氏は、自身の健康をいつか意にもしなくなっていた。運命が彼を引きずり廻し、皮肉な健康をしいて彼に授けていたのだ。しかし彼をめぐる諸将は「めつきりおすこやかになつた。また一ト

頃よりもずっとお肥こえになられた」といって祝福した。一個の大器が、百戦百難の風雪を凌しのいで、年もようやく五十路いそじに入り、いよいよその風貌ふうぼうにも年輪としわの威を加えてきたものとみな頼もしく見ていたのである。

## 彼の番

しかし尊氏は変った。わけて直義の死から後において著いちじるしい。何事によれ大ざっぱで、人まかせで、大局はよくつかんでいたが、つねに茫ぼう洋ようと見える彼だった。ぜひなく陣頭に立つときでも、不利と見れば見得なく逃げるし、すすんで乱軍の中を馳ち駆くす



るような猛將ぶりは彼にはなかつたことである。

その彼が、近来は往々、将士のさきに立つて おおわらわ 大童な働きを

見せ、血に染んだ赤い陣刀を肩にかついで、体じゆうで息をはア  
はアいわせながら引き揚げて来るようなこともしばしばだった。

いや、こまかい政令や賞罰のことなどでも、病床の日でさえ、  
みずからびしびし裁決をくだし、その命じ方がまた、ただならず  
気短だった。かつてのような悠々たる風ふうではない。

師直も今はいないのだ。

直義も亡くなつた。

左右の手を失つたにひとしい せきりよう 寂寥がひしとそこにはあるの

であろう。師直に代る者、それはいない。直義に代る者、なおさ

らない。人は多いが、残っているのはみな犬と猿だ。ひとり佐々木道誉の名はいつも彼のあたまにあるが、しよせん、腹から心のゆるされる男ではない。

しかも、義詮はまだ若<sup>じやくねん</sup>年だ。

あれこれ周囲と将来を考えると、彼は、自分という者を置き換えずにはいられなくなってくる。一日も早くその義詮を次代の將軍にすえて、幕府統一を固めておかねばとするあせりがつのつた。それに自分もいつか年は五十をまたいでいる。

「<sup>あきうじ</sup>顯氏」

武佐寺での尊氏は、油幕を引いた大庭に床几をおき、朝も<sup>ひるが</sup>昼糧<sup>て</sup>も、<sup>うるち</sup>粳に味噌をつけたような物を床几のまま<sup>かじ</sup>で嚙っていた。

「叡山はまだ、うんといわないのか」

「はつ。再度のお使いも、今もつて戻らず、何の早馬もないところを見ますと」

「よい条件を申しやってあるものをな。なぜだろう、即答を渡るのは」

「いまだに、天龍寺造営のいきさつを、恨みにふくんでいるのはありますまいか」

「ばかな」

と、癩氣かんきをたてて。

「では、直冬ただふゆへつく気か」

「いや、すけどのがた佐殿方への加担も拒んでいるということではあります

る」

しばらくすると、彼はまた、畠山国清をよんで、

「きのう今日の軍兵の着到を見せい」

と、簿ぼを取寄せていた。

管領の基氏が派してよこした東国勢やら、美濃の土岐、信濃の小笠原など、諸国の兵は毎日のようにここへ着いていた。その数は武佐寺の内外にあふれて、すでに万をはるかにこえている。

「よし。叡山の返答など、気永に待つているにおよばん。明日は東坂本へさして進め。ただし湖上で、後光厳のきみに、お風邪をひかすな」

あくる日。後光厳の御船をかこむ一軍は湖上を行き、大部分の

兵馬は、陸路を迂回して東坂本へ向つて行つた。

この大兵を目にみると、叡山側は一も二もなく山上の延暦寺へ後光厳をお迎えした。また尊氏は、さらに一步を進めて、東山のみねに陣取つた。

直冬とその一味の軍は、この二箇月余を洛中おごで驕りに驕つていゝる氣勢だつた。一躍、都の主となり天下をここに取つたようである。

「……………」

尊氏はそれを東山の陣地から見下ろして、ただの敵ならば起りそうもない憎悪やら複雑な感を催した。

京都は、彼が幕府を置いてからでも、猫と猫の間の鞠まりのように、

奪とつたり奪うばい返したりをくり返してきた。だから今さら無念はそれではない。

私情である。まったく彼だけの私情であつた。——藤夜又の産んだ、あのひよわい一病児の不知いさやまる哉丸が、こんにち、都に君臨を見せようなどは、かつては、夢想もしていない。それがしかも、尊氏ちゆうばつ 誅せんじ 伐たの宣旨せんじを南朝から申しうけて、公然と、義父ただよし直義ちかよしの讐あだとも称となえているのである。小癩こしやくとも何とも言いようはない。

「困つたやつ！」

じつに、尊氏には厄やっかい介かいな挑戦者であり、困惑きわんきわまる相手ではあるのだ。けれどもまた、どう憤いきどおつても、

「不逞ふていな子！」

とは本心で罵ののしれなかつた。不逞な父は自分かもしれないのだ。

彼は焦じりじり々する。

相手は自己の分身にひとしいものだ。それへの憎しみは自分を憎むことでもある。だから骨肉の憎しみ合いは他人の比でない深度と非人間性を持つ。すでに尊氏はもうそんな愛憎本能など無性に七面しちめんどう倒たうくさくなっていた。憎悪一本になっている。むらと、胸の毒どくえん焰えんを声に吐いて、左右へ令をくだしていた。

「今夕から総がかりをかけて、あの有頂うちようてん天てんな痴しれもの者ものどもを、ひとり残らず洛中から追ッ払え」

これが三月十二日である。

しかし洛中の合戦は、二十一日までかかった。

相互、血みどろをきわめ、この時も見さかいなく民家や寺院を  
双方で焼いた。

その間には、播磨の斑鳩いかるがから急進してきた義詮よしあきらの軍も尊  
氏をたすけ、佐殿方すけどのがたは木ツ端みじんに破れてしまった。そして  
当の直冬は、敗走に敗走をつづけ、どこへ落ちのびて行ったのか、  
これ以後は、まったくその居る所すらわからなかった。安芸にい  
るともいわれ、石見いわみに隠れたままだともいわれたが、ついにその  
生涯も分明せずに終っている。

ともあれ、京都はそれ以降、ややおちついた。

といつても、北朝に本来の御威光はなく、幕府のうちの内証ないこう  
も後あとを絶たつふうでない。



たしかに、武力は強力になった。けれど諸国の武族は各みなその郷国での地盤をかため、自信を蓄え、それが次に来る群ぐん雄ゆう割かつきよ抛ほうがの萌芽を地表にあらわし始めていた。

尊氏はいぜん心の安まるひまはなかつた。

幕府の内訌も、因もとをただせば、細川、畠山、斯波しば、今川、佐々木といったような功臣が、みな自力で割かつきよ抛ほうがしうる力を持つてきたからである。若い義詮がこれをおさめるのは容易でない。手習の手を取って教えるように、尊氏は政治を教える。

けれど、ともすれば義詮自身がその渦中にまきこまれた。そしてしばしば、南朝方へ奔はしる者やら小反乱を内に見た。武家統一の幕府造成は、前途まだ遠い感だった。

しかし、それらのことはあつたにしても、とにかく、

正平十一年（北方の延文元年）

正平十二年

の両年は、諸国とも静謐せいひつな方だった。

さきに南朝に囚われていた光厳法皇やほかの上皇親王たちも、五年ぶりです、解かれて京都へ還つて来られた。が、ひとり光厳法皇だけは、伏見の寺へ入つて、人にもお顔を見せられなかつた。よくよく、酷むじい世の仕組みがお身に沁しみたものとみえる。

また、それいぜんに、後村上天皇は、賀名生あのうの行宮を、河内の金剛寺へ遷うつされていた。尊氏へたいして、一步前進を見せ、親房は亡くも、決して素志そしを喪うしなう南朝でないことを、つよく示された

ものといえる。

しかし、滔々とうとうと、諸国の武家は独自の力を養って肥こえ出していたが、南朝の勢力は、一こう不振をたどっていた。ただこの間かんにも、ひとり昔ながらの宮方としていよいよ強大になっていたのは九州の菊池一党だけだった。

尊氏にも、九州は数年らしいのなやみであり、わけて昨今では、

「なんとかせねば」

と、焦躁のたねとしている課題であった。

「もいちど、わしは二十二年前の若さに返って、筑紫つくしの地を踏み、みずから菊池征伐にあたらねばなるまい。九州さえ平定し得ればまず天下も一おう定まる。——そのうえで、義よしあきら詮せんに將軍職

をゆずり、大名どもをして、二代將軍へのかわりなき忠誠を誓わせよう。——それを見るまでは」

と、彼はこの正月、正平十三年の年頭に、しみじみ言った。妻の登子とうこにむかつて洩らしたことばであつた。

正月四日。

天龍寺が焼けた。

尊氏はただちに再建を命じ、二月には早や奉行を任命したりしていたが、こえて三月に入ると、建武三年いらい二十二年の間、筑紫つくしの探題として留とどめておいた一色直なほうじ氏が、菊池武光に追われ、九州を捨ててさんざんなていで都へ歸つて来た。

「義詮」

と、彼をよびつけて。

「これに教書きょうしょの案文をしたためておいた。祐筆ゆうひつに命じて、同文の教書十数通をしたためさせ、そちが花押かきはんして、それに書上げておいた大名諸武士らへ、すぐ布令ふれいをまわせ」

「や。これは御出陣の」

「そうだ、わしみずから征ゆく」

「いけません。お見合せください。義詮もすでに二十九。私が征きます」

「いや、九州の少弐しょうじ、大友、島津。そのほかの古い輩やからも、多くはそちをよく知っていない。尊氏ならではの心を一つに集まるまい。わしがまれば」

「ですが」

と、義詮は思いきつて言った。

「ご健康があやぶまれます。さなくても、母上はそれをここ数年のお体によく見ていて、始終、お案じなのでございます。どうぞ、御遠征のことだけは、時を見て、このさいはおとどまりを」

それは妻の登子も共に強<sup>た</sup>つて止めた。尊氏はなかなかきく風でなかつたが、四月に入ってからすぐである。尊氏はついに倒れた。その夕、寢床<sup>とこ</sup>につくなり登子へ悪寒<sup>さむけ</sup>を訴えて、子供のように彼女の腕<sup>かいな</sup>にしがみついた。

灯が白く冴えて、病間は病間らしくない木ぐちの新しさと木の香だった。

旧高倉の將軍御所は義詮に渡して、二条万里小路までのこうじに去年造営されたものである。尊氏はそれだけでなく、やがては、將軍職のすべてをも最愛の子に譲ゆずるべく、その一つとしてこんな心支度もしていたのであったらしい。

「とくと、はいしん 拝診申し上げましてござります」

さつそく召された二人の典医は、登子の案じ顔をみて言った。

「ままある急な御風熱ごふうねつと拝かんされます。肝、胃、腎じん、お悪いところはありませぬしお脈もいたってたしかなので」

「では、さしての心配にはおよびませぬか」

「元々、人いちばい根が御丈夫なお骨ぐみ。かえって、そのためつい御過労も積りましょう。お熱さえ下がれば御本復は疑いご

「ごいませぬ」

明け方までに二度、登子の手で熱い煎薬せんやくを服のませられたほかは、あくる日もあらかた、よく眠つてばかりいる尊氏だった。

そして三日目にはもう、

「起きる」

と言い出して、登子や義詮をこまらせた。けれど尊氏は、こうしているぶんにはよかろうと、ふとんの上に坐つて、その日は、義詮をつかまえて帰さなかつた。

義詮は、問われるままに、当面の政務や時局の処理方針などを、なにくれとなく答え、そして、かりに五十日や百日お寝みやすみでも、決して時務に遅滞ちたいはいたしません、諸大名も案じています、どう



ぞ充分御静養を取られますようにと、さすがもう世嗣よつぎの嫡ちやくなん男ららしく自負して言った。

「む。……うむ。……」

尊氏は聞いていた。しかし憂いを残している容子ようすで。

「義詮」

「は」

「わしの体よりは、むしろ、おまえの体こそ粗末に持つなよ。わしは貧しい幼少と野性にめぐまれ、風雲にもいやというほどきたえられた。わしはまだなかなか死ぬまい。けれど、おまえはどうも弱いな。どこか弱い」

「いや、さようなことはないはずです。お父上から見たらお目だ

るいかもしれませぬが、戦陣でもめつたに疲れは知りませぬ」

「それは若さというものだけだ。この父に似ず、何よりは意志が弱い。決断力も鈍く、人を観る明にはすこし欠けておる。わけていまの武士どもを統御するのは容易でないことをよく知っておかねばならぬ」

「それは、まいどの仰せ事。心しております」

「頼む者はまったくないのだ。自分だけが頼みと思え。しかも將軍家であれば、それではならん。由来、この京都には常時たくさんな兵は置けぬ。事あるたび、諸国の大名や家人どもへ召を発して呼び集めるのが慣い。むずかしいことではある。おまえは尊氏の子でも尊氏ではない。人を観、人の心をよくつかむだけを習う

がいい」

「義詮がこれと頼みにしてよい人物は、麾下きかの内で、見渡すところ誰でしようか」

「まず、頼春の子、細川頼之よりゆきだろう……」と、言つて「したが、まだ若すぎるな。そちの執事には」

と、尊氏は急に疲れ気味な色をみせて、自分から横になつた。

尊氏が病間になずみ出したことも、初めは、ごく側近にしか知られていなかったが、月の半なかごころ頃にはやがて外部にも洩れて、それは洛内じゅうの大きな関心事とならずにいなかった。

朝廷からは、典てんやくのかみ薬頭やくづかみの和気わけ、丹波の二家をさしむけられ、

門前には見舞の公卿車くげくるまもあとを絶たない。

諸山の寺院では祈祷がおこなわれ、邸内でも薬師十二神將の法  
 とか、不動延命えんめいの修法とかを、日夜、勤めているのであろう。  
 館の大おおびさし廂からは護摩ごまの煙が雲のように立ちのぼり、衆僧の振し  
 んれいずきよう鈴ずきようや誦経が異様な喚かんきよう叫かんきようをなして二条の町かどあたりまで  
 も聞えてくるほどだった。

「眠たい」

尊氏は、そうした中心にある一室の厚いふとんの上にうめいて  
 いた。

体を横たえているのではなかった。横になれない症状なのであ  
 る。胸の高さにまで折り畳んだ夜具よのものに、両の肱ひじと苦患くげんの顔を乗  
 せて、俯うツ伏せもたに凭もたれて坐もたったきりな容かたちだった。

はじめ、館の典医が、お風邪かぜとかく診みたのは、まもなく、ま  
つたく誤診とわかつた。

高熱はつづくばかりなので、医師も小首をかしげているうちに、  
病人は、自分の左の手を背へ廻して、やっと指がとどくあたりの  
脇ろっこつ骨裏にあたる部分の異常感を訴えだした。ポチとそこに何か  
腫できている。『蚊触かぶれ』という病名があつた。医師たちはこの発見を  
すぐそれに附してかぶれの練ねりぐすり葉を塗布して容体の変化をみて  
いた。ところが数日のまに、そこは朱あかい腕のフタぐらいな大きさに  
まで腫はれ上がり、また幾つもの小さいくちを作つて、さながら  
柘榴ざくろみたいな皮色ひしよくさえ呈して来た。

「これは？」

と、典医たちも狼狽して、ようやく自分たちの手におえない重患とさとり、協議のすえ、当時、町医ではあるが外科の第一と評判のある医僧有隣ゆうりんという者をよんで篤とくと診みさせた。有隣は濁さないことばで告げた。

「癰瘡ようそうと拝診つかまつりました。おそれながら癰は古来から命とりと申すほど難治の病。ひたすら、看護みとりと療法の最善をつくすしかございません」

以来、看護みとりは登子とうこが、療治には侍医たちが、有隣のもとに全力をつくしてきた。わけて登子は帯も解かない窶やつれを病人と共にして、良人の苦熱を自分のなかにも喘あえいでいた。

しかし経過は何の見るべきものもない。患部は朝ごとに目もあ

てられぬ斑<sup>はんでん</sup>点を増して、腫れた所は赤ぐろく耀<sup>かがや</sup>き、無数といつていい孔<sup>あな</sup>からは血膿<sup>ちうみ</sup>を出した。それは煮え沸<sup>たぎ</sup>る火山の噴火口が幾つもの吐けぐちから硫黄<sup>いおう</sup>を噴<sup>ふ</sup>いてゐるのに似ていた。熱はたびたび、病人の意識界を超え、尊氏は時折、異様なうわ言をいった。そしてはまたふと現<sup>うつ</sup>に返った。

「登子。……ああ眠たい。すこしやすませてくれ」

「ようお寝<sup>やす</sup>みのようでございました」

「いいや、耳の中で、のべつ釜の湯が鳴るような声がわんわんする。祈祷僧のわめきだ。止めさせろ」

「でも、せつかく……」

「今、わしは何ものにもすがってはいないのだ。また、神仏に後<sup>ご</sup>

生しょうを頼める自分でもない。ただ静しずかが欲しい。坊主どもはみな  
 帰せ。祈祷はいらん」

以前から彼の心の隅すみには「山林さんりん」があつた。「後生の願い」  
 もたぶんにあつた。すべて能かなわぬ希ねがいであつた。

それがいま、懐かしまれていたのであろうか。

尊氏はだんだんに、病間の孤独しずと寂しずかたを欲ほしていた。邸内の  
 祈祷僧はすべて帰してしまい、有隣や侍医たちの手当さえ、とか  
 くうるさげしりぞに退しりぞけるふうだつた。そして、薬餌やくじ、何から何までを、  
 「登子、登子」

と、妻へ甘える眼をして求めた。患部の膿汁うみを拭きとることか  
 ら、朝夕のくすりの塗布や煎薬せんやくなども侍医にはさせないで妻に



させた。また熱湯でしぼった布で体じゅうの皮膚を隈なく拭かせるときでも、子供のようくまに安心して、彼女の手には人に見せたくない所もまかせきつてくまいるのだった。

そんなあとでは、さばさばするとみえて。

「登子、おまえと夜も昼もひとつにこうして暮すなども、思えば病気のおかげだな。三十年もつれそいながらふないことだった。不愓びんといつても追いつかぬが、おまえもあしゆらんだ阿修羅の女房になつたものよの……」

また、あるときは、

「背なかの腫物できものをこの眼で見たい。鏡をよこせ」

と、登子にも鏡を持たせ、自分も鏡を持って、患部を合せ鏡に

映して、その惨烈とも無残ともいいようのない自己の糜爛びらんした肉体の一部をしげしげと見、

「なるほど。これは尊氏がやって来た『業』ごう そのままな縮図だわえ。人のからだでは癱ようだが、国に腫できれば地上の大乱そのものだ。

身にこれを病むとはよくよくわしは宿命の子にちがいない。……

母ははじや者は地蔵尊を信仰なされ、わしも地蔵尊を身の守りにして来たが、しよせん地蔵菩薩ぼさつの御手みてでも救いがたい阿修羅の申し子だつたとみえる」

と、深い吐息といきで言った日などもある。

かと思えば、高度の大熱に、こんこんとして、「基もと氏とうじか、何しに来た？」と譎言うわごとに言ったり、また「筑紫つくしはどうした、義よしあ

詮きらはまだ返らんか」と、あらぬことを口走ったりした。けれども現うつつない口走りの多くは登子にも意味のうけとれないことが多かった。ただいちど「河内どの」と明らかに言つて、楠木正成と話してでもいるような幾いくこと言かを洩らしたときは、登子にもすこぶる意外な思いがされた。そのほかには、まま、

「平家を聞きたい」

と、よく言つた。

へいきよく

平 曲をと望むときは、苦痛をそれに忘れたいとする容子らしく、すると次の間では、畏かしこまつて、ただちに琵琶を掻き鳴らす者があつた。尊氏の息づかいも、苦患くげんとたたかっている炎の眉も、それを聞いているうちには、だんだんとおさまつて来て、やがて、

すやすや肩に安らぎをみせて寝入るのが常であつた。

しかしついにことぎれた。彼の癰ようはやはり命取りの癰だつた。

正平十三年四月三十日の子ねノ刻こく（ま夜中）と、その薨こう去きよは、

幕府から公布された。

なか二日おいて。

葬儀は、衣きぬ笠がさ山やまの等持院とじいんでいとなまれた。勅使さしの差遣さけん、五山

の僧列そうりつ、兵へい仗じょうの堵列とれつ、すべて、儀式ぎしの供華くげや香煙かうえんのさかんだ

つたことはいうまでもない。

尊氏は、五十四歳であつた。

こくびやくもんどう  
黒白問答

五月の明るい日であつた。

歩みの鈍い、そして長い行列がいま、  
にしのとういんあや西洞院綾ノこうじ小路の職  
 屋敷の門からえんえんと出て行つた。

みな盲人なのである。

もちろん、幾人かは狩衣かりぎぬや布直垂ぬのひたたれの目あきもいて、何かと  
 勘かんのわるい者の世話をして行くふうではあつた。

いったい、どれほどな盲人の数なのか。——先頭はもう長蛇ちようだ  
けい形に染屋川の土橋を渡つて、はるか先に霞かすんでいるのに、まだ  
しっぽ尻尾の方は、職屋敷の清聚庵せいしゅうあんの門を出切れず、そのの曲り角  
 で、

「こつちだ、こつちだ」

「何と、かんの悪い座頭衆だよ。かんのいい振りをしなさんな。杖と杖をつなぎ持ちにして歩いたらどんなものだね」

と、目あきの座役たちに手を焼かせている有様で、ざつと二千人はかぞえられる。いわば二千の盲人大衆が遊山ゆざんにでも練ねツて行くような奇観であつた。

けれど、嵐山も大堰川おおいがわもとうに花は散つたあとだし、めくら

に新緑を愛めずる風流気はなかうし、だいいち、故征夷大將軍尊氏こうしが薨こうじてから今日はまだ八日目なのである。

ついきのうは初七日しよなのかの忌きで、宮中をはじめ二条の故館こかんでは法要が行われ、各寺院でも終日の勤ごんぎよう行ぎやうがあり、町の声にしても、

もう亡い人となると、いまは何か、巨大に感じられる人間像とあの空虚うつろに、つい話を持ち切っていたような時でもあり、往来はこの奇異な行列にみな目をそばだてた。

「ほう、世間にはいるもんだな。めくらの衆も」

「いるとも。綾ノ小路には、諸国から集まって来る」

「いつもこんなにかい」

「いやこんなに集まったのは始めてだろう。けれど職屋敷のかく一郭ときたらたいへんな広さだ。建物の数でも外からではわからない」

「えらいもんだな、盲人でも」

「なにしろ明石あかしのけんぎよう検校と仰いつしやるのは、当道とうどう派の主座で、

それに、死んだ將軍家とはおいとこ従弟にあたる人だ。あれくらいなこ

とはわけなくできたらうさ」

「そういえば列のいちばん先に、職屋敷の執事と一人の女によしよう性せいをつれて歩いて行つたね、あれが明石の検校か」

「もと明石ノ浦にいたのでそう呼ばれているが、覚かくいち一いち法師ほうしとい  
うのがほんとの名だよ。晩年は、当道とうどうの如じよいち一いちに就ついて、琵琶ひたの奥の奥の道までをきわめたものだそうだが、もう二十歳はたちごろ名  
人の聞えがあつて、なんども宮中に召されたことだつてあるのだ  
そうだ」

「晩年というが、見たところまだ、四十四、五にしか見えぬ検校  
だつたが」

「そう、まだそんなもんだらうよ。けれど老成してござるから聖ひじり



といつてもおかしくない。盲最上の位なので、緋の衣ひころもに、檢校帽子をかぶり、後ろに燕尾えんびを垂れて行くさまは、唐画とうがの人を見るようじゃつたな」

「それはいいが、この途方もないたくさんな盲の衆めしいは、いつたいどこへ行くのかな」

「さればよ。きつと等持院とうじいんへ行くのである。御葬儀の当日から初七日しよまでの等持院は、目あきばかりでゴツタ返していたからね。そこで盲は盲同士と、七日過ぎての会葬を、今日はゆつくりお練ねりで練ねッて行くのであろうて」

まもなく、衣笠山の麓ふもとにたどりついた盲人の列は、順次、本堂での席序せきじよをただし、廻廊かいりやうのそとにまですきまもないほど座ざにつ

いていた。

施主、せしゆ 檢校かくいち 覚一

とうどうのもうかん

当道之盲官 一同

の名で、寺中へは多額な寄進もされ、つづいて東とうり 陵りやう 和尚の  
しゆどう 主導のもとに、盛大な追善が長々といとなまれる。そして終  
と、一同はまた庭上に出て、土の色も宝篋ほうき 印よういん 塔とうの石もまだ新  
しい

等持院殿仁山妙義大居士

の墓所へ順にぬかずいた。

それも長い時間がかかった。ひと口に盲官といつても、檢校、  
別当、こうとう 勾当こうとう、座頭の職位のほか、なお幾十階の下級もあるので、

中には昔ながらの乞食こじきほうか放下や路傍の琵琶びわひ弾きそのままな盲者もたくさんいたのである。けれど、それらの盲めしいにしてさえ、

「この將軍の御代ごだいに会つて、わしらは初めて人なみになつたのじや。目あきに馬鹿にされずともよく、目あきとひとしく職を持つてりつぱに生きて行ける者となつたのじや」

という謝恩の念は胸にきざんでいるふうだった。

その、いわれをただせば、これは尊氏の発意で始まつた民政ではない。ひとえに、覚一の願望だった。彼が身に舐なめてきた世路せいろの盲人の生き難い相すがたから常に考えさせられていたものを、將軍家へ献策して、その結果、ひとつの盲官組織と、また盲人たちを総括する職屋敷の土地とを与えられたことに由来ゆらいする。

それまでの盲人といつては、社会の視る目もむごく、

「めくらが一人死ねば、富者が二人できる」

などと平気でいわれていたほどだった。戦乱が生んだ餓鬼道の巷ちまたでは、癡人、穀こくつぶし、足手まとい以外の何者とも視みられなかつたといつてよい。

職屋敷ではまず従来から乞食扱いにされていた盲めしいの琵琶弾きを収容して、これに官の印可いんかと保護を与えた。また、すさんだ大道芸へいきよくに平曲へいきよくのよさを習得させた。さらに筋すじのいい者には座の職階を上げて、座頭、勾当こうとうの名誉もさずけた。

盲人は、ほこりを取りもどした。技をみがいて、人をたのしませ、自分も高い盲官の位置をえて、人中でも敬われる身になりた

いとすする希望にもえた。が、中には天性、平家の一曲も覚えられない者もある。それらの者には鍼はり、灸治、按摩あんま、売ばいトぼくの道などを教えて、ともあれ職屋敷の制度下にいれば、何かの生業たつきと保護を得られ、そして穀つぶしなどと蔑さげすまれるいわれもなくなった。

戦争は目あきを無限の闇に追いたてていたが、ここの盲人は曙光にみちていた。近国の盲人まで伝え聞いて寄つて来た。もちろん盲人たちはその稼みぎから冥加みよがきん金や印可料を「座」に納めることなので職屋敷の経済力もなかなかばかにならぬ力だった。

こうした一制度が地に育つてから、今年はもう十二、三年になる。しかし覚一はこれを自分の功とはせず、いつも將軍尊氏の恩徳であるといった。また今でもある。一同の墓ぼはい拜がすむとそこ

とをみると述べて、あとは随意に散会してよいと施主せしゆの辞をむすんでいた。——そして、座頭以上、勾当こうとう、別当、檢校けんぎょうなどの六、七十名だけが残つて、しばらくは等持院の内で、茶と点てんし心の饗きようをうけていた。

そこへ寺僧が入つて来て、大勢の中へ告げた。

「……じつは先ほどから、明石の檢校どのにぜひお会いしたいと、年のころ六十路むそじがらみの法師と、さよう、親子とおぼしき能役のうやく者しやていの者が三名、あちらでお待ちしておるのですが」

「わたくしに」

「はい」

「はて、どなたやら？」

覚一かくいちは、そばの人へ、

「そなたには、心あたりがありますかの」

と、しずかな睫毛まつげを向けて訊いた。

そばに付き添っていたのは彼の妻であつた。母の草心尼そうしんにはとうに亡い人だったが、よく明石の家へ遊びに来ていた兼好法師がその母をも説いて、たつて覚一かくいちに娶めあわせたひとなのである。

覚一よりやや年上だったが、草心尼の若い頃をも思わせる清雅できれいな女性だった。そして母の歿後、やがて明石の隠れ家を捨てて尊氏を都にたよつて出て来た時には、尊氏もまた、この女性を前からなみなみならず知っていた関係もあつて、この良縁を共によるこび、覚一の盲人救済の主旨や職屋敷の実現には、いち

ばい力をいれてくれたものだった。

「さあ、わたくしにも」

と、彼女はまた、

「思い寄りのございませぬが、きょうの御法要の先を慕って、ここへ来てお待ちになつてゐるからには、やはり生前、尊氏さまに、何か有縁うえんのお方たちではありますまいか」

「それは、そうなの」

「ともあれ、お通しになつてみてはいかがでございますか。こう大勢の中ではありますが」

「む」

覚一はこの女性を、妻とも、また亡くなつた母とも思つてゐる



ように、素直にうなづく。

寺僧はやがて、四人の訪客を案内して来て、坐る所もないままに、座敷のそとの廊にその人々を据え並べた。

四人は年配の順に坐った。

老法師をかしらに、年五十がらみの、芸能者とはいえ武者烏帽子むさえぼに狩衣姿の人柄のいい男と、次には、その妻であらう、髪を布結びにした色白でふくよかな女と、また息子むすことみえる二十四、五のきりつとした若衆とをつれて、

「せつかく、お休息の所を、おさまたげ仕りまして」

と、さすが芸能者の行儀よく姿をそろえて辞儀をした。

が、検校はじめ、別当、勾当こうとう、座頭、ここにいるほとんどは

盲人である。辞儀にこたえて席の一同も頭を下げたが、いかなる服装やら人態にんていやら一見で知る識別はその人たちにはない。

とくに息子らしい若衆は、髪を艶つややかな鬘まげに結つて、後世かみしもの袴に似る腰みじかな役者羽織を着、いうならば水もしたたる美貌の青年であつたが、それも幾人かの目あきの者だけに、目をみはらせたのみである。

けれど、覚一検校のそばにいた彼の妻だけは、初めからその綺き羅らな若者よりも、親の夫婦と、もひとりの老法師の容子とに、じつとひとみを注そそいだきりで、やがてのこと、はつと思ひ出したようにこう軽い声でさげんだ。

「法師は、右馬介うまのすけのではありませんか。また、夫婦ふたりのお方も、

たしかどこかで、お見うけしたような？ ……」

「さればで……」

と、言い詫わぶる態ていで。

「いかにもこの老法師は、右馬介が成れの果てにござりまするが、してあなた様は？」

訊かれると、彼女はまだどこかに残る佳麗かれいを面おもてにほの紅あからめて、

「自分ですら思いがけぬ身の移うつろい。お分りでございませうか」

「もしやその昔かみの、小右京こうきようさまでございませぬか」

「おお、その小右京でございます。双ならびヶ岡おかの法師のおすすめや

ら、いまは亡そうしんき草心そうしん尼さまの、たつてのおことばで……」

「やれやれ、それは覚ささまにはまたなき良い御内助。草心そうしん尼さま

まも、御自分に代るお方を得て、さぞ安心して世を終られたこと  
でございましょう」

「いいえ、倅せなのは私でした。おかげで、それからの月日は」

「とにかく世の女によしよう性が世の荒波に負けて、ややもすれば尼の門

に髪をおろしてしまふ様をさま、兼好法師は、世にもあじけなきこと  
と、いたく嫌うておられましたな。法師の心も酌くめますわえ」

このとき初めて、覚一も。

「右馬介か。久しいのう」

「これは覚一さまで。ああ、お立派になられましたなあ。かつは、  
目あきでも成し得ぬお仕事をこの大乱の世に果して」

「それもこの目の盲めしいがさせてくれたのだ。目が見えぬゆえ人皆の

欲しがる物に思いをわずらわされずに。……して、お辺は湊川合戦の後は、どこに？」

「は。今は何もかもお話し申しあげる時と存じます」と、右馬介はこう話した。

——正成の首級を故郷の遺族にとどけてやれと尊氏から命ぜられたとき、彼は自分の奉公もこれまでと弓矢も思い断つていた。そして河内へ行き、いらい二十二年の長い間、観心寺の片すみに一庵をむすんで、人知れず正成の掃墓をしていた。

これを彼は「尊氏さまに代つて」とも思つてして来た。尊氏が多年、正成へ抱いていた思慕と深い惜しみは、彼のみがよく知つている。いわば「両雄の胸に秘された私の情」は——今生相

容れぬ敵——と尊氏を呼んでいた正成の方にもあった。

「まずは、さようなわけで」

と、右馬介はことばを切った。そして、連れの三名を横に見ながら。

「じつは、尊氏さまの御逝去と聞き、都へ出てまいりましたところ、はしなく職屋敷のほとりで、日ごろ親しゅうしているこの方々と行き会ったのでございました。……聞けばお三名も、明石の検校どのを訪ねて来たが、今日は当道の門人一同と等持院へお出ましの模様らしい、どうしたものかというおはなし。……ならばいつそ、われらも等持院へ行つて、御法要の終るのをお待ちしていたらと、そこでかように控えていた次第でございます。……」

さ、元成どの、卯木どのうつき」

「は、はい」

「つい自分ばかり喋しゃべっていました、いまこそです。さあきゆうか久く潤つの情おもいをお遂つげなされませ」

すると、覚一の方から先にはたと膝を打って言った。

「わかりました。では、そこにおいでのお方は、むかし雨露うろじ次じと隠れ名かくれなしていた服部治郎左衛門どのと、卯木さまでございませうがな」

夫婦ふたりは胸むねの堰せきを切ったように、にじり出て。

「おおようお忘れなく。……私は治郎左衛門元成、これにいるのは妻の卯木でございませう」

「やれ、おなつかしや」

と、覚一は、離れ過ぎている上座かみざから、もどかしげに。

「世になみならぬ騒ぎにつけ、また、少しでも戦が休やむにつけ、どうなされておられるやらと、おふたりのことは忘れた日もございませぬ。さ、さ、さ、どうぞこちらへ寄つて下さい」

ほかの座頭や別当や勾こうとう当たちは、そう聞くと、客の四人を急に内しやうへ請じて、覚一のすぐまえに席をあけた。

「お、どこに。……お手は」

と、覚一の両の手は、片方に元成の手、片方に卯木の手をさぐりあてて、握りしめると。

「ああ、おすこやかよ。あれはもう二十数年も前の春の暮でした



な。けれどあの折、お別れした時の通りなお手の温ぬくみが、思い出と共にあふれてくる。ただここに母がいないのだけが淋しい」

「ほんに……」と、卯木はすぐ涙して。「私たち夫婦ふたりには生涯の門出となった一夜でした」

「それは私も同じこと。——母と私は住吉の具足師柳斎——いまここにゐる右馬介の家を訪ねて行きました。——が、柳斎はいず、そこにおいでたのは、下絵描きの元成どのと、御内儀の卯木さまでした」

「そして」と、元成もいう。「もしあの翌晩の長屋騒動がなかったら、お互いの身の上や心の底などお話しあう御縁もなかったでしょうに」

「それも所は住吉の浜、四所しよのおやしろのある白砂の上でしたか  
ら、ひとしお胸めいに銘めいじるものがありました。世はいかにあろうと  
も、お互いはわき目もすまい。志こころざしす道につき進もう、そしてもし  
一道の芸能しの士と成り得たら、何十年の後なりと、またお目にか  
かりましょうと……」

「ええ。そこには草心尼さまもおいでられて」と、卯木は言いつ  
るえて「——私たち夫婦をお身に比べて励ましてくださいました。  
そして夜すがら四人で松落葉の火を囲み、語り明かしたその朝、  
浪華なわの河口で舟と陸おかにお別れしたきり……」

「いらい母も私もさんざん修羅ちまたの巷をさまよいました。けれどお  
ふたりを思うと私は精しょうじん進しんせずにはいられません。いつかはお目

にかかる日が来よう。そのときに、消え入るような自分であつてはならないと」

「ああ、今日は思いが果たされました。お目にかからぬうちから、とうに明石の検校のお名は伺つておりましたもの」

「してただいま、お夫婦ふたりは」

「修業のかいもありましてか、大和の結崎ゆうさきに田楽能でんがくのうの一座を開き、春日、法隆寺、東大寺などの仏会神事ぶつえしんじの催しごととも預かつて、どうやら結崎一流の能舞のうまいを打ち創たて得ようかと、なお工夫の途中にござります。そしてその望みは、これなる若年のせがれにかけておりますよなわけ」

「お。御子息よな」

やや離れて控えていたその若者は、検校がさぐる面へ向つて、  
急ぎ両手をつかえていた。

その日、卯木夫婦うつきが連れていた若者は、幼名を觀世丸かんぜまるといつ

ていたが、やがて觀世を姓に直して、まだ二十五の若手ながら、

大和結崎座やまとゆうぎぎの觀世清次せいじと、未来を囑しよく望もうされている者だった。

「ほう」

覺一は、おどろいたふうである。

「では、近ごろよう評判を承うけたまわる觀世清次とは、おふたりの仲の御  
子息であつたのか」

「まだ未熟者にすぎませぬ。どうぞこれからはお引立てを」

はれがましそうに、夫婦ふたりは子に代つてそう言った。

そしてなお子を語る親心の問わず語りがつい続いた。住吉の浜でお会いしたときは、まだ清次は生まれていず、そのせつ妊娠みごもつていた子も流産したので、長谷はせの観音へ祈願をこめて、初めて得たのがこの子であり、そこで幼名も観世丸と名づけたものであったという。

けれど生まれたのは、千早籠城ちはやの食べ物もない中だった。

卯木の兄正成が、一族すべてをつれて立て籠こもつたため、彼女も良人と共に籠城しんさんの辛酸しんさんをなめ、清次はそこで呱呱ここの声をあげたのである。——だから生まれながら修羅しゆら矢やたけびの中に怯おびえ、母乳も出ぬほどだったし、はたして人なみにこの子が育つか否かさえもあやぶまれたことであつた。

「それが」

と、卯木は現在の清次を、身のそばにかえりみながら。

「このような成人を見ましたのは、まったく兄正成どのお慈悲と、芸一ト筋に生きて来た賜物でございました。いえ、すべては観世音菩薩の御庇護ごひごであつたのでございましょう……」

それからそれへ話は果てる模様もようもなかつたのである。ところが、座役たちはそろそろ帰りの時刻を案じだしていた。

というのは今夜、職屋敷に職位四階以上の者だけが寄つて、故等持院殿とうじいんでん（尊氏の法号）どのに関する思い出や世評ぜぜひひ是々非々にたいする検校の意見なども伺い、かたがた琵琶びわの一曲を霊前にささげようではないかという申し合せをしていたのだった。

「それよ」

覚一は、卯木たちへ、急に思い出したふうで言った。

「今宵こよひ、私たちは私たちなりの琵琶供養を職屋敷の内で営みたいと存じております。いかがでしょう、綾あやノ小路こうじの宅までこれからご一しよにおはこび下さいませぬか」

「でも……」と、卯木は良人の顔を見てためらった。

「女ではありませんが、この身も楠木家の一人です。尊氏さまとは生前とも、俱ともに天いただを戴かぬ仇あだ敵がたきとまで世上にいわれていた正成どのの妹。そのようなところへ交まじるのは、後に世間の聞えもいかがでしょうか。もし職屋敷の御迷惑にでもなつてはいけません」

「ああいや、それは御斟酌ごしんしゃくがすぎるといふものです。たとえ新

將軍家のお耳に入ろうと何のおそれかございましょう。私たちはひとえに芸の道を以て諸民に仕え、諸民と苦樂を共にしているだけのもの、弓矢の徒とではなし、南朝北朝の争いなども知るところではありません。その点、尊氏さまにはよく理解がございました。お案じにはおよびませぬ」

綾ノ小路の職屋敷では、その晩、使用人やふつうの会衆には酒し飯ゆはんの追善振舞ついでんふるまいがあつて、それも終りをつげていたが、やがて子ノ刻ねこく（深夜十二時）ごろとなると、四職以上の盲人に客の四人、座役の数名の人だけが口を嗽すすいで、道場にあつまっていた。日ごろは琵琶びわの祖神蝉せみまる丸像の幅ふくが見える板かべの床とこには、それが外はずされて、稚拙ちせつな地藏菩薩像の幅ふくがかけられ、下には一基きの



位牌いはいがおかれていた。——「等持院とうじいん殿仁山居士にんざんだいこじ」のそれで、懸物かけものもまた故人が戦陣のひまにはよく画えいていたといわれる尊氏自筆の地藏絵であつた。

ところでこの夜の琵琶法要は、おもてむき故人の遺徳むくに報むくう行事よじとして、以後は年々行われたが、初めのほどは、まだ足利幕府の力もよわく、三代將軍の義満よしみつの治にいたるまでは、なお南北兩朝の争いも絶えぬありさまだったので、しぜん尊氏にたいする功罪論の是々非々ぜぜひひだの、その人物を疑惑視する世評もつよく、それが当道の盲人にはとかく胸のわだかまりになつていたので、盲人たちは、ここの結界けっかいをたのんで、その夜は明石の檢校けんぎょうを中心にかなり突ツ込んだ質疑や応答があつたものであるらしい。

というのは、当道とうどうの一門人がそれを口授くじゆして記録しておいた  
 ものがのちに、

とういんけん  
 桐蔭軒無言録

しやうさつし  
 という小冊子となつて世に残されたからである。「桐蔭軒」

とは琵琶道場のわきに大きな桐の木があつたのでその名があり

「無言」は「無絃むげん」の意をもじつたのではあるまいか。

しかし何もかもが一いっちやう朝あさに瓦礫がれきとなるような戦も珍しくない

世に、その正本などがただしく伝えられるはずもない。おそらくは伝写に伝写をかさねて世を經へたものだろうから、どこまでが

ほんとか、記載のことも巷説こうせつの程度以上とは信じかねる。が、

それにしてもなお、数十年の大乱をただよそにしているしかなか

つた無明世界の盲者たちには、どんなふうにも、その目あきの世界が映つていたか、考えられていたか、明暗を逆にした彼らの社会観として見るぶんにはなかなか捨てがたいものといつていいように思われる。

で、ここに当夜の模様などを描写するよりは、むしろ「無言録」の語録そのままで見ることが有効におもわれるので、その一端を次に抜抄しておくことにする。文中ではもちろん、問者は誰々、答えたのは誰と、いちいち明記はないが、質問者は大床おおゆかに居ながれた当夜の盲人三、四十人（例外として目あきの質問も出たかもしれぬ）と見てまちががなく、答える方は覚一検校ひとりであったにちがいない。

問 「まず、序問じよもんの僭越をおゆるし下さい。何事も腹藏なく問え腹藏なく答えん、との仰せですが」

答 「そのとおりです」

問 「けれどそれが過ぎて、御生前の批判やら世上の悪声などに及んだら、先將軍（尊氏）の靈にたいし奉つて、失礼にはあたりませぬか」

答 「あたりません」

問 「でも主旨しゆしの御供養にはなりますまいが」

答 「いや、何よりの大供養なりと信じます。棺かんを蔽おおつて定まる

とか。生きとし生ける者のほんとの声を、尊氏さまも今は千万部のお経きようよりは、泉下せんかで聞きたいとしておられるものと存じます」

問 「はて、いかにとは申せ、検校どのには、先將軍のお心をそこまで、御断言できますか」

答 「幼少より存じあげ、かたがた、薨こうきよ去の当夜まで、お枕べに近い控えの間にいて、夢寐むびのままなきおくるしみや折々のおん譚うわごと言さえ洩れ伺うておりました。いささか御胸中を拝知しておる一人かと自負しております」

問 「死ぬるまぎわまでおん悩みとしていた第一のことは何でしたらうか」

答 「たくさんな人間をこの地上で殺したことでしよう」

問 「尊氏公が殺したわけでもないでしように」

答 「あのお方の正直さではそう逃げられぬ。でも家を興すには

戦争もせねばならん、戦争へのぞむからは勝つため敵も殺さねばならん、がすえしじゆう未始終には、これは天下の諸民を助けることになるのだ、世を安きに建て直す途上では仕方がないと、一生わき目もふらぬおすがただったものでしょう」

問「それがいつ頃からお心の悩みと変わったものですか」

答「私にもわかりません。おそらくは曲がりなりにも幕府が出来たころででしょうか」

衆声「……げ解せぬこととう？」

問「幕府の御成立は、尊氏公にすれば、大望じようじゆ成就、得意とくいでありますように、なぜそれを境に、お迷いが始まったので

答「たとえば粘土ねんどを以て一つの円まろい陶壺すえつぼを仕上げようとなさ

れていたものが、真二つとなつてしまつたからでした」

問「朝廷の両立ならば、その亀裂は昔からの古傷で、いま始まつたことではない」

答「いや、何よりは足利自体の内訌ないこうです。股肱ここうの臣と臣とが  
 喟いがみあい、骨肉おとごの弟御いぼしや異母子いぼしまでが、みな主体そむに叛そむいてわが  
 身をわが齒くで啖くいはじめました」

問「世間の蔭口うそでは、それも尊氏公が政略のやり損じで、御自  
 分の嘘うそから御自分を破つたものと申しますが」

答「さよう。私もそんな気がする。一例をあげれば、清水寺きよみずでら  
 の願文がんもんなど、あれを書かれた御本心が疑われてならないのです。

——この世の幸さちはみな弟直ただよし義ぎに与えて給え、この尊氏にはただ

後ご生しょうのみを授け給われ——と、ひたすらな遁とん世せいの念と弟思いいが溢あふれているあの願文なのですから」

問 「それが、その弟御をついには毒殺なさるとは」

答 「げに、人の心とは怪しいものです。とはいえ、清水寺の願文が嘘の文字とは申せませぬ。あれを書いたときのお心はその通りな尊氏さまであつたに相違ちがございませぬゆえ」

問 「不ふしつけに申すなれば、先將軍というお方は、何せい、われらどもには解わからぬことだらけですが」

答 「げに、矛盾にみちたお方でした。情じょうにもろく、情のお人かと思えば人以上に冷たい。藤夜叉という女性へも、直ただ冬ふゆどのにも、あの冷たさは異常です。そして閨房とて、ほかに入れた女によし



性ようもありません。すべてを大望にかけて御自分をころし切ツていたものでありましようが」

問「でも、その大望も、御自身ついに滅失されたのでは」

答「いや、さいごには、その滅失を取り戻そうとなされた焦躁あせりが、直義ただよしさまを、あんな思いきつた御処置になされた、第一の御理由であつたように思われます」

問「檢校けんぎょう。てまえにも一つ借問しゃもんさせていただきませぬ。――

――夢窓国師は、尊氏公の長所三ツを賞めて、一は生死ちゆうだつに超脱ちゆうだつしている、二には慈悲心ふかく人の非もよく宥ゆるす、三には無欲恬て淡たんで物に慳貪けんどんの風がない――と。その通りでございませう

か」

答「御長所ならば、もつとありましよう。尊氏さまの周りまわには、つねに大どかな和がありました。ほがらかで茫洋ぼうようで、小さい事にはこだわらず、お気楽で威張つたところが少しもない」

問「ではずいぶん人好きのするお人柄としか思えませぬが」

答「そうです。たとえば八朔さくの朝など、諸家の進物しんもつで広間が埋まるほどの物も、そばから人に与えてしまうので、夕には一物もなかったということです。ですから土地なども奪とるにしたがつて武士どもに分け与え、御自身は権力すらも実はそんなに欲しがつておられなかったと思われまする」

問「だのになぜ一面では、権謀術策、無情苛烈かれつ、血も涙もない政略家のように誤られたのでございませうか」

答「いや、それも誤りではありません。悪と善、鬼と仏、相あいは反する二つのものを一体のうちに交錯して持つふしぎな御仁ごじん」

問「すこし分つてまいりました。後醍醐天皇とのお争いなどもそれでしような」

答「これまでの歴代にも現れなかつた烈しい御気性の天皇と、めつたにこの国の人傑にも出ぬようなお人とが、同時代に出て、しかも相反する理想をどちらも押し通そうとなされたもの。宿命の大乱と申すしかありません」

問「その大乱というのが、てまえども庶民、わけて盲人の身には、何のためにやっごぎるやら、武家衆や公卿衆の、正気のほどが解わかりませんか」

答「たれにも解ることではございますまい。もし足利殿なかつたら、戦争は起らなかつたか。後醍醐のきみが武家に取つて代るごむほんぎ御謀反ごむほんぎ気を持たれなかつたら、かような乱世にはならなかつたか。そんな単純には言い解けませぬし」

問「では誰が、いや何が、こんな凄まじい世にしたのでしようか」

答「下手人はないのですよ」

衆声「ほう？　ないとは」

答「しいてあるといえばあるともいえましよう。一部の陰謀や火ツケで出来るものではありません。全土に素地したじができているから始まつたことなのです。源平、鎌倉、北条と長い世々を経てこ

ここまで来たこの国の政治、経済、宗教、地方の事情、庶民の生なりわ業、武家のありかた、朝廷のお考え——までをふくんだ歴史の行きづまりというものが、どうしてもいちど火を噴ふいて、社よのなか会かたちの容かたちをあらためなければ、二にツ進ちもさつちも動きがとれない、そして次の新しい世代も迎えることができない、いわば国の進歩に伴ともなう苦悶もとが何よりな因もとかと思われまする」

問 「では、何十万の死者も、その犠にえ牲せいというわけですか」

答 「北条殿、新田殿、足利殿、そして後醍醐のきみも、正成どのも、犠にえ牲せいであるに変わりはない」

問 「ほかに工夫はないものでしょうか。そんな殺し合いをしな  
いでもすむ——」

答「それが智恵です。けれど人間はまだ悲しいかな、そこまで叡智の持ち主でありませぬ」

衆の声「はアて？ どうじやな同朋どうぼうたち。檢校けんぎょうどのの今のおはなし、合点がてんがゆくか」

衆「いや合点なまいらぬ。大乱の因もとは地震のようなもので、火ツケの悪徒のせいではない。ただ、人間全体が叡智にさえなれば、戦はなくてすむという仰せだが」

答「ま、同座の衆、お静かに。今の言い方では宇宙から下界を見たような感をうけたかもしれぬが」

衆「その通りじや。こんな馬鹿な戦を果てなくやっけていられたら、人間全部が一生の五、六十年はまるつぶれになってしもう」

答「ならば旧態のまままでよいか。それも不断に進む世の自然に反します。行き詰りの世が腐りだすと、腐り放題に腐<sup>す</sup>えてゆく。いやでもまたその無秩序や不平が恐ろしい不安を醸<sup>かも</sup>して来ますのでな」

問「と仰つしやるのは、庶民も戦争の手伝い人だと仰つしやるので」

答「庶民は戦争にふるふるです。ですが時には、事を好む弥次馬性と射倖心にもうごかされやすい」

問「なるほど、そんな浮浪もいるにはいますな。けれど戦争の元兇は、やはり権力の中に住む人間どもにありとしか思われぬ」

答「……権力。そうです。権力欲とは何なのか。摩訶<sup>まか</sup>不思議<sup>ふしぎ</sup>な

魅力をもつて人間どもを操り世を動かす恐ろしいものに相違ござ  
いません」

問「天皇、女院、將軍、執事、大名、大名の下の武士、みな権  
力に憑かれて、それが戦争の」

答「ああいや、他を言つて自分を措いてはいけません。それは  
私たち盲人の中にさえあるものだ。この座のうちにも潜んでいる  
ものです。恐い。何がといつて、権力の魅力ほど恐いものはない。  
下手人はこれと見つけたり！　としておきましよう」

問「では話をかえて。——当今の武士の廃れは嘆かわしい。裏  
切り、偽セ降参などは朝飯前。これを源平時代の武士にくらべら  
と、雲泥のちがいですか」



答 「墮落も泥ンこも、次へたどりつく途中と思えば」

問 「ではまだ当分続くのでしょうか、こんならちやくちやのな  
い風潮と、暗黒時代が」

答 「が、必ず朝は来ます。朝の来ない夜はない」

問 「何か、あけぼのきざ曙の兆しが、ちよつとでも何処かに見えていましよ  
うか」

答 「それはある、萌もえかけている」

問 「どこにです」

答 「地の下、つまり庶民の中にです。長い戦乱は、みなを苦し  
めたには違いないが、庶民の生活はくらしいつともなくずんと肥えてい  
ましようが。外へこぼれ出た宮廷の文化。分散された武家の財力、

それらも吸って」

問「そういえば、しいた虐げられつつ、庶民の生活はくらし枯草のように、前より根強くなり進んで来ておりますな」

答「自分の力に自覚を持って来たからです。田でんがくのう楽能一つに見ても、以前は権門の物でしたが、当今では、河原小屋や辻つじのう能で、庶民に愛され、庶民が育てているものとなっている」

衆「いかにも、いかにも」

答「また、われら盲人にしても、このような職屋敷を持ち、以前にはなかった職能と人なみの生活くらしを得たのは、やはり暗黒の世の陣痛が生んでくれた一つの光明であつたのではないでしようか」

問「光明……今の世にも光明があるとは初めて伺いました……」

無限の暗黒、無限の合戦、無限の南北両朝のお争いかと悲しまれておりましたが」

答「長い時の流れからみれば、わたくしどもが見た半生の巷ちまたなど一瞬しゅんのまに過ぎませぬ。大地とはそれ自体、刻々と易かわつてゆく生き物ですから、易かわるなどいつでも易かわらずにおりません。そして易かわり易かわつてゆく地上には、時にしたがって時代の使命を担になった新しい人物が出現して来る」

問「そして次の時代を耕たがやすというわけですか」

答「そうです。それが血で耕されるような季節こそ人間最大な不幸の時期に当りましたよ。思えば北条殿、新田殿、足利殿、また後醍醐のきみや、幾多の連枝れんし、廷臣もみなこの時に生れ合せて、

いやでも越えねばならぬ悪時代をこえるために戦つたものとも申せましようか。……と私は考えるのです。そう思い去り思い来る<sup>きた</sup>と、何十万の白骨もくるめて、上下なく、誰も彼も、ただあわれでなりません。……このあわれを誰よりもよく知つて、人間の叡<sup>え</sup>智<sup>いち</sup>を持つと、あえてすべてを祈りへ捧<sup>たて</sup>げて壮烈な自滅を取つたよ  
うなお方もただ一人はありました」

問 「それはどなたです」

答 「正成どのです」

衆 「……ああ、げにも」

問 「しかし、それでは運命とは何と不公平なものでしょう。楠木殿のようなお方もある一方、佐々木道誉どののような世渡り上

手で狡ずるいお人が、憎にくていいよいよ榮えておりましたよ。やはり正直者はばかをみるということですか。

答「さよう一概にはいえませぬ。道誉どのの無節操や婆娑羅ぶりも、武門の風潮で、あのお方一個が狡ずるくて驕きょうまん慢まんなわけでもない。むしろ憚はばかりなく、生きたい生き方をやって退のけるなどは、それも一流の正直で独自の頭の良さともいえましようか」

問「ほ、これは意外な御賞揚ではある」

答「いや賞ほめはしません。ただ宇宙は人間それぞれの性さがをよく公平に“時の役割”に使っていると云いたいのです。彼が道楽に創はじめた立花りっか（生け花）、鬪とう茶ちや（茶道）なども、やがて観世清次どのの舞能ぶのうのごとく、案外、ゆくすえ世の文化に大きな開花を見

せるやも知れませぬ。なべて人に役立つものは亡びない。けれどどんな英傑の夢も武力の業はあとかたもなくなる。ですから、ものふとは、あわれなのです。とくに尊氏さまの御一生などは、無残極きわまるものでしかない」

問「が、お名は千載せんざいに残る」

答「いや、それも霸力はりよくの名ですから時の移ろい次第うつつです。ひ

とたび足利氏が衰えれば、逆賊、佞将ねいしょう、涙なき権謀の人物と、

あらゆる悪名や人の唾つばを浴びるときがないとも限りませぬ。……

ですがわが仁山大居士にんざんだいこじはもう御観念ごくねんでしょう。何事も大悟たいごして、

世の流れのままにどんな毀誉褒貶きよほうへんもあの薄らあばたを幻まぼろしとして地

下に笑っておいであるに相違さむございませぬ」

×

以上、桐蔭軒無言録の問答記事はここで終つており、項こうをべつにして、次にはつづいて行われた仁山大居士琵琶法要のもようと、観世清次の手向け能たむのうがあつたこととが記されている。

職屋敷始まつて、始めてのことであろう。

—— 檢けん校ぎょう 以下、別当べつとう、勾こう当とう、座頭が一堂に集まつて、し

かも丑満うしみつき下がり、おのおの琵琶びわを抱いて、故人の亡魂をなぐさ

めるため、当道の秘曲をささげるなどの例は稀れにもなかつたことである。

大床おおゆかに居ながれた盲人四十余名は、やがて上座にある明石の

檢校の、

「いざ」

というあいずを聞くと、各自、うしろにおいていた琵琶のふくろを解いて、絃を調べ出した。そしてしばらくは大勢の絃のしらべや転手を締める音などで床はただ水の乱声するような風情でしかない。

が、すぐ肅となる。

そしてみな、仁山大居士の位牌の方へ坐を向け直して一せいに低い礼をする。

検校の撥に始まって、四十数面の琵琶がいちどに奏でられ出した。詞は平曲のうちでもきわめて淡々と無常を謡い上げている筋のない一節であり、歌詞はないにひとしいくらいなものだった。



けれど四絃げんの変化と音色ねいろは当道覚一流の玄妙をつくして余すところもなかつた。

そもそもまだ覚一も小法師の頃から、彼の、黒い網膜もうまくに映じていたこの国の内乱と諸相しよそうは、彼の琵琶にもつよい影響を与えずにいなかった。

彼の悲泣は絃いとに宿つて人の世の黒業こくぎよう白業びやくごうを傷む曲となつていた。単なる無常觀に終り切れないで、如法にょほう長夜ちようやの闇にもなお朝の光を待つてやまないもの。それが明石ノ浦から興つた当道覚一流の格調だつた。

だから新しい。どこか明るい。一同、弹奏を終つて、礼をすましたあと、余韻よゐんはなお、盲人たちの明日への希望をどこかた

だよい繞めぐらせていた。そしてこのあいだに、觀世清次かんぜは、道場の一隅で能舞のうまいに立つ身支度をし終り、琵琶をおいた大勢の者がひと息つくさまを、こなたで謹んで待つていた。

これはあらかじめ、検校とのあいだで「御縁にひかれてこよいの御法要につらなるからは」と、ふと話が出来あがつていたことにちがいない。元成が自作の一曲を清次に舞わせて、いまは敵も味方もない足利殿と楠木殿の靈に併あわせて回向えこうしたいと望み出たのである。もとより覺一めしに異存はなく、願うてもないよい御回向ごえこうとよろこんで、盲めしいに見られるものではなかったが、

「故人の靈も目でごらんあるのではない。われらも心の眼で拝見させていただきましょう」

と、なったもの。

すでに、宵の打合せで、小右京には鼓つづみをたのみ、元成が太鼓を勤め、卯木うつきぎは笛を持つことになっていた。地謡じうたを謡い出たのは老法師右馬介である。——それにつれて、大床おおゆかの中ほどへすすみ出た観世清次は白の小袖に白地に銀摺ぎんずりの大口袴おおぐちを穿はき太刀を横たえ、尉じようの仮面おもてをつけていた。

驚くべきことには、仮面めんは余りにも正成の顔かほに生写いきうつしだつた。しかし、いわれなきことではない。これは湊川みなとがわへのぞむ前のあの哀かなしい諦観ていかんと苦憂の半ばにあつて、ただ永劫えいごうへかけての和と人の善智とを信じようとしていた当時の正成を、仮面師めんし赤鶴しやくくづるが一心に鑿のみに写しとつておいたあの一作であつたのだ。

地謡じうたを謡う顔も、笛をふく白い顔も、いつかみな濡れていた。

舞は湊川の矢たけびをここに呼び、討つ者、討たれる者の、ひとしいあわれさやら、矛盾むじゆんの世が生んだ矛盾の子尊氏と、悲心のひと正成の祈りとを、清次の一つ姿に、足拍子あしびようしもとどろに描えがき——そして舞い終つてもなおなかなか終る気色はなかつた。

「みな琵琶びわを把とり給え」

と、檢校の声がかかっていたからである。四十余面の琵琶は、ただ松風と浪音の宇宙のひびきを一せいに奏かなで出し、連れて、笛はさけび、つづみや太鼓もまた、清次のすがたをかりて地上のみなはの平和の願はいを打ち囃はやすがごとくであつた。なんらの違和もない不思議な楽がくのあらしとなつて。

いつか外には外で小鳥のさえずりがしはじめている。小鳥の世界だけでない人間界の夜明けもついそこまでは白みかけている朝かのような今朝であった。



## 青空文庫情報

底本：「私本太平記（八）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年5月11日第1刷発行

2009（平成21）年12月1日第27刷発行

※副題は底本では、「黒白帖《こくびやくじょう》」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2012年11月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 私本太平記

## 黑白帖

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 吉川英治  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>